
マンガみたいな告白と再会の行方

日月あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マンガみたいな告白と再会の行方

【Nコード】

N8889V

【作者名】

日月あきら

【あらすじ】

25歳になった笹原瞳は、今だ初恋の人を忘れられずにいる。もう二度と会うことがないはずの彼に偶然出会ったことから、新たなストーリーが始まった…

*全サイトに連載していたお話を手直しして移動させたものです。

春、3月。

朝から冬の名残の雪がちらちらと舞っている。

今日は中学校の卒業式。

大切な門出の日だというのに、どんよりとした曇り空。

厚みを感じさせる雪雲が、まるで心まで覆い隠していくようだ。

…痛みを伴う”別れ”を予感させるように。

別れの儀式を終えて。

みんなととのに写真を撮り終えて。

私は心の中で温めてきた”想い”を彼に伝えようと決意し、教室に舞い戻った。

そこには予想通り、ぼんやりと校庭を眺める彼がいた。

中学生活の3年間、ずっとずっと想っていた。

ふとした時に見せる哀しげな瞳が心に焼き付いて、離れなかった。
凍えた心を隠して、穏やかに微笑むことで感情に蓋をして。

背中で泣いている彼のことを…私の腕で温めたかった。

そして、その腕に温められたかった。

一世一代の告白は、やはり、あっけない一言で終わった。

「…ごめん」

わかってた。

彼が誰を好きなのか。

叶わぬ恋に身を焦がしていた期間は、きっと彼の方が長い。

彼の肩越しに見えた窓の外は、雪が白い斜線を引いているように吹き荒れていた。

もう、帰らなきゃ。

けど。

あと、一言だけ。

ずっと友達として仲良くしてきて、彼がどれだけやさしい人か知ってる。

そんな彼だからこそ、こんな無理な願いを試してみたくなった。

「ねえ、お願い。」

もしね、もし、これから何年もたって偶然街中で会ったら…

その時は嘘でもいいから『きれいになったな、あの時振ったことを後悔するくらい』って言うてくれる…？」

「…なんだそれ？」と彼は薄く笑った後、至極真面目な顔をして言

った。

「約束する」と。

それから握手をして、「元気でね？」と型どおりの挨拶をして、教室を後にした。

ばたん、と教室の扉を閉めた瞬間。

両目から涙がとめどなく流れ始めた。

積もりに積もってしまった、彼への恋心。

全部を涙にして流してしまうつもりなら、これだけじゃ全然足りない。

だから今だけは、止まらなくなつたって仕方がないじゃないって、甘えていたい。

それから、長くない年月をかけて。

その日の事は私の中で、ほろ苦くて冷たい大切な思い出になった。

じりりりりっ!!

突然鳴り響いた目覚ましに驚き、飛び起きた。

…何年使ってもこの音に慣れないんだから…私ってば…。

起床時間ぴったりなんだから、長年の相棒である目覚まし君はしっかりと真面目に仕事してくれたことになるんだけど。

正直、毎朝毎朝心臓に負担がかかることこの上ない。

しかも今朝は目覚める寸前まで夢を見ていただけに、目覚めは最悪だった。

心臓がまだバクバクいつてる。

私は左胸に手をあて、鼓動が落ち着くのをじっと待った。

それにしても。

あの夢を見たのは、久しぶりだった。

中学校の卒業式。

焦がれるほどの想いはあの頃よりも和らいだけれど、でもこうして

夢で見させられるとちよつと辛い。
辛い分だけまだ想いを引きずっているから。

あの後、父親の仕事の関係で遠くに引越してしまった私。
お陰で今日現在に至るまで彼に会う事は全くなかったし、これから
先も会うことなんてないけれど。

”時間薬”という言葉信じて、今日の今日まで生きてきた。
離れてみれば想いは薄れていくものだって思っていたのに、私の場
合、全っ然！そんな言葉は当てはまらなかった。

未だにしつこく初恋にしがみつく自分を”馬鹿だ”と罵る毎日。

私、笹原瞳は、25歳になった今でも、初恋の彼・富樫雄大君に心
を奪われたままだ。

もう年も年だし、もちろん、男の人とお付き合いしたりってことも
あった。

この人ならきつと彼以上に愛せるに違いないと、その度に運命を感じ
てみたりするのだけど。

お付き合いに慣れてくると知らず知らずのうちに富樫君との違いを
探す自分に気付き、抱きしめられてキスされた途端”違う！”と自
分の持てる全てで拒否して…ジ・エンド。

こんな私に呆れた親友の真世は、数度の経験を経た後、もう決して
私に男友達を紹介しようとしなくなつた。

『こうなったら、あんたの気の済むまで、とことんその富樫って男の影を追いかけなさい！』

そして、しわくちゃのばーさんになって、この日の事を後悔するがいいわ！』

叱咤激励とも切り離しもつかない台詞。

それでも気持ちが暴れて苦しくなった時に突然呼び出しても、嫌な顔して悪態つきながら時間を空けてくれるもんだから。きちんと私を理解して受け止めてくれてるんだ！なんて、どっぶり甘えきっている。

迷惑かけて生きてる私。

彼を思う気持ちを捨てない限り、きっと私ははた迷惑な、前に進めない女のままだ。

それでもいいと心安らかな日々を送っている私は、もう救いようもない末期症状ってことなのかもしれない。

けれど。

彼の夢を見たあと、こんな自分のことを悔やんでしまう。

夢を見た日は、一日中考えるのは彼のことばかり。

その度に”この大馬鹿娘！”と自分に向かって叱責してみても、どこか空しい。

あの頃、中学生だった私の目から見て、彼はとても大人びて見えた。今はもっともっと素敵な大人の男に成長してるに違いない。

私がいなくなった後、彼はどんな人生を歩み、どんな風に生きてきたんだろう？

有名な私立高校を出てから、大学にいったのかしら？
どんな将来を夢見て、どんな学部で学んだんだろう？
今は何してる？

就職？それとも、大学院に行ってるのかな？

どこの街で暮らし、笑い、人生を謳歌してるんだろう？
恋は…してるのかな？

もしかしたら…木本さんと恋人同士になっているのかもしれない。

また胸がちくん、と痛んだ。

子供だった私が最後に彼と交わしたとんでもなく乙女チックな約束。
彼は覚えてくれてるだろうか？
もし私に会ったら、今でもちゃんと守ってくれるのだろうか？
かなり確かめてみたい気がする。

だから。

「……………会いたいな」

未練たらたら。

こんな日は、真世を呼び出して飲むに限る！
重たく始まった一日の終わりに勝手に楽しげな計画を書き込み、今週最後の出勤に向けて準備を始めた。

「うっ…まぶしいい…」

前日、計画通り真世と飲みに行ったのはいいけど、お酒にそんなに強くない私はあっさりと二日酔い。

朝日が白眩しい…瞼の裏がじくじくする…頭が割れそうに、痛い。

もう翌日だぞって時間にふらふらになりながら帰宅し、シャワーだけざっと浴びて、

化粧水も乳液もつけることなく、もちろん髪を乾かすこともなく、ベッドにダイブして爆睡。

そつと髪に触ってみたら、大爆発間違いなし！な手触り。

顔…鏡見たくない。

愛用の目覚ましくんを見ると、時間はもう10時。

日の光が目をやたら刺激するはずだよ…思わずため息が出た。

こういうささくれた生活をしていると、あっという間におばあさんになってしまいそうだ。

こういう時、愛しのダーリンに日々愛され、お肌ツヤツヤの真世がうらやましい。

私はもそもそとベッドから這い出て、熱いシャワーを浴びることにした。

気分がさっぱりしたところで朝食を摂ろうとテーブルを見た。けれど、そこにあるはずのパンがない。

昨日焼きたてのパンを買って帰ろうと計画していたのに、すっかり失念してた。

つてことは、今朝食べるものが、ない。

…がっかり。

どうしたもんか？と思案した後、まだふらふらするけれど隣駅前にある大型商業施設に行くことにした。

私はお腹の欲求には勝てないタイプ。

飲みすぎた翌朝でも、胃はいつも通りに貢物を要求してくる。

カフェで軽くランチを食べて、映画観てからウィンドウショッピングでも楽しんで…

予約できたらクイックマツサージに行くのもいいかもしれない。

楽しい時間が持てたら、きっと乾いた心が潤ってくれるはず。

そうだ！

お気に入りの石鹸がもうすぐ無くなりそうなんだった。

いつもお世話になってる石鹸の専門店が量り売りをしていて、たくさん種類のなかから気に入ったものを選ぶことができるのだ。

店員さんと話しながら試供品を試し、目に留まったのを選ぶのも楽しいんだよね。

これからの予定を思い浮かべて、にんまり。
気分も上昇したお陰で、出かける準備も手早く出来上がった。
：デートじゃないんだから、気合も入ってないって話だけど。
それでも、なんだかいいことがあるそうだ。

私のがちゃりと鍵をかけると、鼻歌を歌いながら駅に向かって歩き始めた。

もうすぐ12時になるという時間だけあって、駅前には人が溢れ返って来ていた。

私は目的の商業施設の中にあるカフェのバルコニーにある一席に座り、お気に入りのカフェラテとスコーンで遅すぎる朝食を摂っていた。

道行く人を眺めながらゆったりと朝食（…お昼はちゃんと食べるつもりだから）を食べていると、

まるで映画の中の主人公になったみたいだ。

ちよつとした命の洗濯。

それから映画館へ行って、見たかった映画のチケットを購入。開演は2時。

それまで時間があつたので、クイックマッサージで身体中のコリをほぐしてもらい、

雑貨屋さんをのぞいて回ったりした。

丁度いい時間になってきたので、映画を見ながら食べるためにマイ

ブームのポリウム満点ローストビーフサンドとカフェ・オレを買って映画館に行った。

開演5分前だったので場内は薄暗く、ほとんどの席が埋まっていた。私の席は2人掛けの通路側。すぐに見つかった。

隣には誰も座っていないので、気が楽だった。

スクリーンでは映画館での注意事項やこれから公開予定の映画の予告編などが流れている。

ローストビーフサンドが入った紙袋を膝に乗せ、ドリンクホルダーにカフェオレを置いて、

私は何気なく館内を見回した。

やっぱりラブコメディということだけあって、カップル多し。

…って、一人で来ている女が、へん？

ちよつとだけ居心地悪くなったりして…。

…およ？

何となく見たことがあるような後姿が…何だろ？あの後頭部の形に何かを感じる。

いや、でも、気のせいだろう。

だって、どう見てもあんな背の高そうながっちりした男の人、会社にいないもの。

もしかして、無理やり参加させられた合コンにいた人？

…どっちにしろ、もう関わる必要もなければ関わりたくもないし…。

視線をスクリーンに戻してから、取り出したローストビーフサンドにはむっ、とかぶりついた。

映画が終わり、それぞれの劇場から観客達が吐き出されてきた。

アニメ映画もあったので、家族連れも多い。

子供たちが興奮して映画の感想を話している姿が、とてもほほえましい。

映画は全般的に笑わされたけれど、でも最後にはほろりと泣かされて。

終わったあと「はー、おもしろかったあっ！」と笑顔でいられる、元気の出る映画だった。

観に来てよかった。

うきうきしながら映画館の中にあるグッズショップで商品を物色していると、振り返りざまに大きな男の人にぶつかってしまった。

足を思いつきり踏んづけてしまったようで、「いてえ…」と低いうめき声が聞こえた。

映画が終わった後で混んでいるとはいえ、商品に集中しすぎて周りを見ていなかった私が悪い。

スニーカーだったのが不幸中の幸いだ。

私は慌てて「ごめんなさい！大丈夫ですか！？」と謝りながらその人の顔を見た。

途端。

ぴきん、と固まった。

おっさん…いやいや、大人になつてはいるけれど。

見間違えるわけないじゃない。

この男は……

「雄大君、どうしたの？」

硬直したまま口をパクパクしていると、かわいらしい女性の声がして、私は再度固まった。

そこに立っていたのは、儚げな大人の女の魅力をオーラのように纏っている木本さんだった。

私は一瞬にしてパニックに陥った。

逃げる！逃げるんだっ！！私っ！！！！

木本さんとはもともと面識ないし、富樫君にさえ気付かれねば全てが丸く収まるんだ！！！！

相手に気付かれぬ間に、そ知らぬ顔してスーパー・ダッシュだっ！！！！

「ごっ…ごめんなさいっ！！

私がいっきりぶつかった上に足踏んじゃって…ほんと、ごめんなさいっ！！！！」

そう言つて、私は冷や汗をかくゴキブリのごとくカサカサッと逃げようと一歩踏み出した。

と。

突然拘束された右手首。

私は驚いて富樫君の顔を正面から見上げた。

私の手首には、すっかり大人の男になつてしまつた富樫くんの大きくてごつごつした手。

でもとってもきれいな優しい肌触りだ。

大人になつて精悍な野性味が加わつた顔はそれはそれは男前で、フエロモン撒き散らしてるなあゝと惚れ惚れするほど。

決して顔で惚れたわけではないけれど、やっぱりお年頃の女としてはぽーっと思惚れてしまうわけで。

「……きれいに、なつたな……あの時、振つたことを後悔するぐらい……」

心臓が止まつたかと思つた。

きつと周りには聞こえなかつただらう。

それぐらい、囁くような、優しく、低く響くような声。

引き寄せられるように彼の顔を見たら、懐かしそうに瞳が笑つてた。

胸がきゅうんと鳴った。

「雄大くん？」

木本さんの声で現実には引き戻された。

ごく当たり前のように富樫くんの隣に立って、彼のシャツをかわいらしく引つ張る彼女。

彼の白いシャツを摘む、彼女の桜貝のようなピンク色の爪。儚げな指先。

そか。

当然、だよな？

夢にまで見た、すっごい偶然。

願った通り彼に会えたのはうれしかったけど。

けど。

現実を突きつけられるのは…やっぱり、すっごく辛いよお…？

涙を堪え切れなくなった私はくしゃりと顔を歪めた瞬間、彼の手を振り切ってその場を走り去った。

やっぱり、私は馬鹿だ。

何であんな約束しちゃったんだろ？

乙女爛漫だった中学生の私をこの時ほど恨んだ事はない。

確か、あれは従姉妹のお姉ちゃんに借りた漫画だった。

主人公の男の子に振られてしまったヒロインは、涙を流しながら微笑んで言ったのだ。

『私、魅力的な女になるから。

だから…もし、私たちが大人になった時偶然出会うことが出来たら、

その時は…”きれいになったね、振ったことを後悔してしまうくらい”

って言ってたね？』

数年後ヒロインと再会した主人公は、その頃よりもきれいになった彼女を一目見て好きになって、

そして2人は結婚して…

ありきたりなラブロマンスだけど、あの頃の私は心の底から運命的な恋をする2人に憧れていた。

だから。

自分がヒロインと同じように失恋した時、叶うはずない願いを込めてそう言ったのだ。

マンガの世界ではうまくいったのに、現実なんてこんなものだ。
…ってか、ごく普通に笑い話にしかないし。

「…お似合いだったな…富樫君と木本さん」

富樫君のシャツをつん、と摘む、木本さんのほっそりとした指先。
成長した彼女は、爪の先まで美しかった。

……ホント、私の…馬鹿。

落ち込んでいようが。
辛かろうが。

時間なんて、待っちゃあくれないものなのよ。

週の始まり月曜日。

私はそんな当たり前のことをしみじみと考えていた。

いつも通りに目覚まし君に起こしてもらい、いつも通りにばたばたと身支度し。

いつも通りにご飯を食べて、いつも通りに出勤して。

いつも通りにタイムカードを押して、いつも通りに机に向かって仕事をしている。

…心の中はまだぐちゃぐちゃだってーのに。

現実って、無情だ。

ため息一つついて、朝一番に入れたマグカップいっぱいアップル
ティを飲む。

粉末のインスタントで、結構な甘さと林檎の香りが魅力的。
落ち込んだ時の私に一番合っている飲み物だと思っている。

ちびちび飲んでいるからすっかりぬるくなってるけど、好もしさは
変わらない。

入れたてよりも甘みが強くて、奥歯が疼く気がしないでもないけど、
体中がリラックスしてくる感じもしないでもない。

私は肩を数回上げ下げさせ、コリをほぐした。
さっさと仕事に取り掛からねば。

私が勤めている会社は、中堅お菓子メーカー。

そこで商品の企画や広報、販売促進業務を担当している。

大企業なら分業しているんだろうけど、何せ中堅。

そこらへんは一括で……ってとこなのだろう。

大学でデザインを学んできた私は、デザインに関わる仕事を担当し
ている。

担当といっても、まだまだ入社3年目。

商品の企画や広報といったものではなく、デザイン業者さんや出版
業者さんと一緒にパンフレットやスーパーなどに飾るディスプレイ
のデザインを決めたり発注したりするのがメインの仕事だ。

今は、来月に発売予定のスナック菓子のパンフレット作りの真っ最中だ。

過去販売していた人気商品をリニューアルしたもので、小さい頃に愛したこの懐かしいお菓子里に思い入れの強い中堅どころのおじ様たちが力を入れているらしい。

先週撮影してもらった商品の写真ネガが上がってきたので、パンフレット原案に入れてもらい、再度校正してからいよいよパンフレットの発注、各営業所への発送という作業手順。

今週末までには手配を終えなければならぬので、金曜日まで慌しくなりそうだ。

今日も11時からいつもパンフレット印刷でお世話になっている東洋印刷の方が来ることになっている。

それまでに必要なものをそろえなければ。

ファイトだ、傷だらけの私！

何とか資料もそろえ、余った時間で伝票を整理していると、内線が鳴った。

受付から来客の知らせだった。

時計を見れば、あと5分ほどで11時。

丁度いい時間だった。

私は予定していた来客用のブースにお客様を通してもらうように受

付にお願いし、資料をもう一度確認してから席を立った。

「あ、笹原さん！」

立ち上がった私を見て、課長が慌てて声をかけてきた。

「何でしょうか？」

「東洋印刷から電話があつて、今日から新しい担当に代わることになったらしいんだ。」

で、今日新しい人がみえてるから、ボクも挨拶をしようと思つて」

恰幅のいい課長は、先々月お子さんが生まれたばかりの新米パパ。

生活に愛娘という潤いが出来たせいか、今日もツヤツヤ血色がいい。

そういえば近いうちに大きな人事異動があるんだと、入社以来のお付き合いである東洋印刷の営業・樋口さんが言つてたっけ？

辺境の地に左遷されるんだと芝居がかった調子で言つていた樋口さん…もしかして、ほんとの話だったのだろうか？

かなりの無理にも笑顔で応えてくれる、とってもいい人だったのに。これが事実だとしたら、東洋印刷も人を見る目がなさ過ぎると思うものだ。

「次の方もいい人だったらいいですよね」
「全くだねえ」

課長はのほんと返事をしてからゆつくりと歩き出した。

「新人なんです、これから御社担当になりました、営業の本山です。」

まだ入社1年目の新人ですが、よろしくご指導ください」

「どうぞ、よろしく願います」

私がかかわっていたんだということには、笑顔で語る樋口さんによつてあっさりと判明した。

左遷ではなく係長への昇進で、営業業務の方に移るから内勤になるのだそうだ。

騙されたとわかり、心の中で『コンチクショー!!』と叫びつつ、おめでたいことなのでにつこりと微笑んで受け流すことにした。

樋口さんに紹介された新人さんは、とてもはきはきした元気よさそうな、ショートカットの女の子だ。

どれぐらい仕事出来るのかはこれからでないとわからないけど、私好みだからよしとしよう。

それに、入社3年目にして主任に任命されたという非常に仕事のできる営業がフォローにまわることに
なっているとのこと。

樋口さんが太鼓判を押す人なんだから、そうそうめちゃくちやになるという事はなさそうだ。

課長もひとまずホッとしたのか、名刺交換して少しだけ世間話をしてから仕事に戻っていった。

課長が去ってから、3人頭をそろえて新商品パンフレットについて詰めていく。

うん、本山さん、すごく頭の回転の早い人だ。
安心できるぞ。

私はにっこりと微笑んだ。

一通りの話が終わり、何故か飲み会の話になった。

何でも明後日、樋口さん昇進祝いの飲み会があるらしい。

「どうせなら、笹原さんも一緒にどうです？」

突然のお誘い！……って以前からずっとこんな調子で誘ってくれてるんだけど。

しかしな……取引先の会社の飲み会に参加って……まるで接待みたいで感じ悪いし。

渋っているとみるや、樋口さんはいつになく強引に誘ってくる。

「今回は、営業業務の人間も来ますし。

窓口担当の田代もですが、杉田も参加ですし。

気心が知れた二人が一緒だし、たまには……ね？」

お？

真世が来るのかー！！

しかも、田代さんとも感動の初対面が出来る！！

心に参加へとぐらりと動いた。

親友の真世は、うちの会社の窓口じゃないけど、東洋印刷で営業業務を担当している。

全然違う業種に勤めたから、まさかこんな形で繋がるなんて二人とも思ってた。

びっくりな偶然に喜んだものだった。

そして、田代さん。

私が入社する前からずっとうちの担当をしてくれていた人で、あと3ヶ月もしたら産休に入ることになっている。

電話で話をするだけなのとにかく気が合うというか、右も左も分からないひよつこの私をよくフォローしてくれた人だった。

会いたいねー！なんていいつつ、今の今まで叶わなかったんだけど。

いい機会かもしれない。

どんよりした心に立ち込める暗雲を追い払うにも一役買ってくれそうだし。

コンパで散々な目にあってるから会社の飲み会以外には行かないことにしてたけど、知らない人間ばかりじゃないし、真世だっていてくれるし。

「わかりました。明後日、ご迷惑じゃなかったら参加させていただきます」

参戦表明したら樋口さんが大げさに喜んで、時間と場所を教えてください。

本山さんが呆れてるよ…。

毎度の事ながら、本当にオーバーリアクションな人だ。

とりあえず予定通りに業務を進め、飲み会の約束をしたところで樋口さんたちは帰っていった。

明後日に突然入ったサプライズな予定に、少しだけ気持ちが浮上したような気がした。

…この時は、まさかあんな大波乱に巻き込まれるとは思ってもみなかったから。

年取ったら時間の流れが必要以上に速くなるというのは実感済かどうか…。

私は今、樋口さんの誘われた東洋印刷主催の飲み会に来ている。
まだ二日あるしいい、とか思ってたのに。

事前に真世に連絡して、樋口さんの話通りさして肩肘張るような会合ではない事は確認済みだったから、気持ちは若干上向き。
いつも飲み会に参加する時みたいな嫌々な気分よりも、楽しみて思う気持ちが勝っている。

部署が変わったといっても樋口さんは同じ会社内にいるわけだし、ごくごく親しい関係者、若い世代の人たちと内輪だけで…ってことになったらしい。

そのせいか借り切った個室は盛り上がり、活気がある。

気持ちは分かるよね。

上司なんざ呼ぶ人間間違えたら、一体誰の、何のための飲み会かわからなくなるもの。

長いスピーチ。

くっだらな説教。

本当か分かったもんじゃない、とつてもうそ臭い武勇伝。

女子社員を無料ホステスかなんかと勘違いしてるんじゃないか？と思われる、その態度。

金払え、金！…とまでは言わないけどさ。

セクハラ寸前の行為は本気で止めよ！

あの、クソ部長めっ！！

…いや、違う。

あいつは来ないし。

うちの会社のヤツだし。

とりあえず気持ちを落ち着けて、深呼吸…。

「あれ、笹原さん、どしたの？空気悪い？」

「あ、樋口さん」

トリップしている間に、ビール瓶片手に樋口さんがお酌に来てくれたようだ。

さつきまで隣には独身の真世ちゃん和我的ため（？）、田口さんが”妊婦の苦勞”について講義してくれてたのに。いつの間にかそれぞれ別席に移動してるし…。

宴会開始からもうすぐ2時間。

さすがに出来上がりつつあるな…私も。

「今日は誘ってくださって、ありがとうございます」
「いえいえ」

そろそろ顔が火照ってきたので丁重にビールをお断りし、手元にあった烏龍茶で乾杯。
いつも会社で会うときよりも気さくな様子の樋口さんに、ちょっとだけ親近感を持ちたりして。

いい人だなあ、ほんと。

「こんな機会じゃないと笹原さんと仕事以外のお話できないでしょ？だから今日は、ちょっと強引かなあ」と思いつつも、
杉田と田口ダシに使って誘ってみました」

イタズラっぽく笑うと、とっても幼く見えるのね。
ちょっと新鮮な感じ。

「あんまり飲み会って好きじゃないからどうかなあ？て思ってたんですけど、

とっても楽しいですよ？

田口さんのお話もたっぷり聞けたし」

「じゃ、これからは、僕とたっぷり話しない？

…例えば、恋の話とか」

「恋…ですかあ？」

きつと今の私、あからさまに眉間に皺寄ったぞ。
声だつて、すんごく低かったし。

酔っ払いつて怖いな。

度胸満点って感じた、私。

樋口さん、引いちゃってるよ…

「え？なに？気に障った？」

「や、今、そーゆー話、禁句なんですよ」

「なにになに？…ひよつとすると、彼氏がいたりして、現在喧嘩中…
とか？」

「彼なんてもんは、いませんけどね…ちょっと…過去の思い出が
汚点へと変身してしまったというか、なんというか…」

「過去が汚点へと変身…？」

点目のまま、不思議そうに首を捻る樋口さん。

そりゃわかんないだろうさ。

酔っ払いの私に具体的解説を求めるのは、無駄ってもんですよ。

「係ちよあゝ！瞳はねえゝ、昔の初恋の彼を未だに引きずってんのっ！」

だ・か・ら、中途半端にくどいても空しいだけよあゝ？？」

「ちよつとおっ！！真世っ！変なこと言っなあっ！！」

「なにになに？面白そうだから聞かせて？」

私以上に出来上がり、今や完成の域にまで達している真世が突然抱きついてきた。

げ！いつの間に舞い戻ってきた！？

樋口さんが身を乗り出して、目をキラキラさせている。

話、聞く気満々だ。

なんだよっ！みんなしてっ！！

酒の肴じゃないんだよっ！！！！

「やめてっばっ！恥ずかしいっ！！」

「恥ずかしいって思ってたんだったら、男の1人や2人作ってみろっ
てんだ！！」

まんが界の住人め！」

「なにおうっ！！」

「え？笹原さん、彼いないの？まんが界の住人って、何ソレ？」

酔っ払い真世が背中から羽交い絞めにした拳句、私の口を両手で塞いできた。

抵抗するも、空手有段者の彼女からは逃げられない。

…くっそおーっ！私よりも細っこいくせにっ！！

胸だっって小さいくせにーっ！！

「あのですね、瞳は未だに中学校の時に好きだった男のことが忘れられないんですよ。

で、誰と付き合っても、付き合おうとしても、あーっという間にさよ～ならあ～。

今まで何人の男が泣いたことか…私、男友達に恨まれまくってま

すもん！」

「へえ…なんか、純情というかなんというか…」

「だから、まんが界の住人！夢見すぎ！！現実見なさすぎ！！」
「なるほどねえ」

何とかもがいて真世の手を跳ね除け、戦闘中のウルトラマンのように身構える。

「いいじゃないよっ！ほつといてよっ！ふんっだっ！！」

笑いたければ笑えばいいじゃないっ！

…私が一番、乙女な私を笑い倒してやりたいんだからっ！！

にやにやチェシャ猫みたいな真世とくすくす笑う樋口さんを睨みつけた。

「じゃあさ、笹原さん？」

「…なんですか？」

「僕もまんが界の住人になったら、もうちょっとお近づきになれたりしない？」

「はい？」

「だから、僕、笹原さんの世界を共有してみたいんだけど…仕事じやなくて」

「…お笑いのネタかなんかにするんですか？」

思ったことを口にする、途端に樋口さんの目が点になった。

「空気読めよ、ぶあくっ！！」と真世が後頭部をがっん、と殴ってきた。

痛いよっ！

睨みつけようと振り向いたら、めちゃくちゃ怖い顔で真世が睨んできた。

「おめ、どれだけ鈍かったら気が済むんだよっ！！ぶあくっ！！！！
だあかあらあゝ、ねゝっ！！！！樋口さんはあゝ！！！！」

男ばかりの道場で15年間みっちり鍛えられた真世は、素が出ると半端なくコワイ。

頭を隠してビクビクと真世の怒鳴り声を聞いている時だった。

個室の襖がガラリと開いて、誰かが入ってきたのは。

「富樫しゅにいゝん！おそおおいつー！！」

人影が見えたと同時に、甘えてくねくねした女の子の声が上がった。しん、となった座が、ざわざわと活気付く。

「遅くなつて申し訳ありませんでした」

低すぎない、よく響く色気のある声。
最近聞いた覚えのあるこの声。

まさか…まさか……まさかだよな？

おそろおそろ声の主を見た。

「もうっ！主任が来ないと、全然盛り上がりませんよぉ〜！」
「富樫さあん、お疲れさまぁっ！」

神様。

あなたは鬼ですか？

私の願いも空しく、入ってきた”富樫主任”は富樫雄大、その人だった。

絶望的な気持ちで彼を見てみると、彼も私に気付いたようで一瞬驚いたように目を見開いた。

「…すみません。樋口さん。お祝いの席に遅れてしまって」
「こちらこそ、すまん。残りの仕事、全部請け負ってもらって。
お疲れさん」

富樫君は一緒に飲もうと誘う同僚達を笑顔でかわしながら、ごく自然な足取りでこちらに向かってやってくる。
来るな！来るな！！と念を送っても、届くはずもない。
だってこの会の主役が私の隣にいるんだもん。

自然な感じで私の斜め前の席に座った富樫君は、私を見てゆったりと笑った。

「…君とは随分めずらしいところではかり会っね、笹原さん」

背中にかたい汗が流れた。

「あれ？瞳、富樫君と知り合いなの？」

真世が不思議そうに聞いた。

そりゃそうだろう。

私だってこんな大都会で、子供の頃の知り合いに出会っなんて思っ
てもいなかったんだもん。
ましてや、彼なんて…。

「え…と、あの…」

「幼馴染」

樋口さんがぽかんと口を開けた。

「え？笹原さんって、杉田さんと同郷じゃなかったっけ？」

「あ、違いますよ、樋口さん。」

瞳は高校入学時にお父さんの転勤で静岡に来たんですよ。

もともとは神奈川県、だよな？」

「あ、うん」

「じゃ、2人は小学校の同級生とか？」

「家は近くなかったんですけど、幼稚園から中学校まで一緒だった
んですよ。」

「な？笹原さん？」

富樫君に話しかけられ、緊張のあまり声が出ない。

肯定の意を表現したくて、必死になって頭を上下に振った。

…若干酔いが加速する。

そんな私の馬鹿なひとコマに気付かなかった樋口さんと真世は、しきりに「そんな偶然ってあるんだね」と頷きあっていた。

そして、穏やかに微笑んでる富樫君。

…大人になったなあ。

あの頃から変わらず素敵な彼をぽろりと見つめていると、真世の「あー！！」という叫び声が。

確実に当たる、嫌な予感。

にやりと笑った真世はテーブルに両肘を突いて身を乗り出し、富樫君に聞いた。

「…ひよつとしてさあ、中学校で富樫って名前の男の子、あんただけだった？」

「……………」

…いや、もう一人いたよ。

確か3年の時、笹原さんと同じクラスだったヤツだよな？

笹原さん、アイツと仲良かったし。」

「…はえ？」

…いいえ、あなたのお兄様が卒業して以後、富樫なんて名前は3年

間通してあなた一人しか知りませんですよ。

彼の意図が見えない嘘のせいで真っ白い頭のままでたそがれていると、真世が爆弾を投下した。

「じゃあ、そっちの富樫だ〜！

瞳の青春、知らずに踏みにじってる”初恋の君”は！！」

「…っとおっ！！！！！！」

酔って赤い顔が火を噴いた。

本人を目の前にして…目の前にして…目の……

くらり。

一瞬気が遠くなった。

騒がしい宴会場で、しゅんと静まり返るこの一角。

興奮してるのは真世だけで、富樫君はびっくり顔だし、樋口さんは目が点だし。

さっきの話とのリンクが完了したのか、樋口さんはポン、と手を叩いて言った。

「…って事は、その”富樫君”ってのが、さっき話していた笹原さんの初恋の人？」

「そうなんですよっ！そいつのせいで、真世は現在彼氏いない歴更

新中」

「……もう、やめようよ、その話は……お願いだから」

もうここまでできたら、何もかもばれればね。

昔から脳細胞の活性がよかった彼のこと、きっとパズルのピースはあらかた埋まったことだろう。

取り繕う場所など、あろうはずもない。

息も絶え絶え、シヨックすぎてもう声にも力入りません……ってなもんだ。

これ以上はもう……企業秘密ってことで。

本人目の前にして、アンタ、晒したくない心の傷を親友にカミング・アウトされるって……これ以上の

罰ゲーム、必要ないでしょうよ！

帰りたい。

お家に帰って布団に慰めてもらいたい。

そして永遠にそのまま……異空間へ旅立ちたい。

誰に引き止められようが振り切ってもお暇しようとバッグに手を掛けた時、驚いて言葉を失くしていたはずの富樫君が口を開いた。

「……へえ、笹原さんって、あいつのこと好きだったんだ？」

ニヤニヤ笑ってる。

……知ってんじゃないっ！！

告白したんだからさっ！！！

「そうだ！ねえ、”富樫”ってどんなヤツ？アンタ知り合いじゃないの？」

連絡取れるんだったら、文句の一つ言ってやりたいんだけどっ！

！」

「…それはまた、なんで？」

「ちよっとっ！真世っ！！やめてっ！！！」

一体私のどこにこの瞬発力があつたんだ？というほどのスピードで、真世を後ろから羽交い絞めにして口を塞いだ。

渾身の力を込めて封じ込めるも、酔っ払いモードの真世にあえ無く押さえた手を引き剥がされた。

「だって、瞳ったらまだ片想いの彼に未練タラタラで、彼の一人作らないんだよ？」

勝手にやってろ！って優しく見守ってやってんのに、

この前偶然の再会して彼女連れてらぶらぶモードで歩いてるところ見たって落ち込んで大泣きしてるしっ！

こんな可愛い子がどこの馬の骨か知らん男に今だ縛られてるなんて、

あつたまくるじゃないっ！！」

……言っちゃったよ。

全部ゲロったよ。

私ではない口が。

私のことを思ってくれる真世。

だからこそ、私が悲しんでいる事はまるで自分のことのように心の底から怒り、泣いてくれる。

真世はいいヤツ。

大切なヤツ。

大好き。

でも……

お酒の席で、しかも真世は思いつきり出来上がった酔っ払い。わかってるけど、やっぱりこの状況でこれはきつ過ぎる。

ぼろぼろぼろぼろ。

人前でなんて泣かないんだ！ってがんばってただけだなあ。涙が止まらない。

「……かえる」

しゃくりあげそうになるのを堪えて呟いてから、バッグを持って会場を飛び出した。

さっきの驚くべき瞬発力の効果は、ありがたいことにまだ残っていたようだ。

後ろで三人が引きとめたような気がしたけど、振り返らなかった。

振り返れるわけがない。

幹事さんの「そろそろお開きに」なんてお決まりの台詞が聞こえたし、きつと彼らも追ってこないだろう。

ひたすら走って、明るい街に飛び出して、偶然目の前に止まっていた空車のタクシーに飛び乗った。

タクシーが走り出した瞬間、目にハンカチを強く押しあて、もう一度気力を呼び戻そうと何度も深呼吸した。

じゃないと、ここで号泣して立ち上がれなくなりそうだから。

少しでも気持ち落ち着いて、私にちゃあ一生に一度の大事件が起こった直後だというのに頭に浮かんだ言葉は『会費前払い制でよかった』だった。

案外と図太いじゃん、私！と感心してみたり。

家の前についてお金を払って、引きつる笑顔で「どうもありがとう！」と言っ

たんたんたん…と慣れたマンションの階段を自宅のある3階まで上った。

バッグから鍵を取り出して、がちやりと音がしたらノブを回して家の中に入って。

そしたら速攻施錠。

もちろん、チエーンも忘れずに。

一人暮らしを始めてから、自然に身に付いた習慣だ。

いつもいつも繰り返される動作の一つ。

3歩歩けば、10畳のリビングダイニングキッチンに到着。
真っ暗闇の部屋をぼんやりと眺めた。

見慣れた部屋の風景。

カーテンを閉めて出るのを忘れた窓には、暗いけど明るさの消えない都会の夜が見えた。

やっぱり、うちはいいなあ。

しみじみと感じで、ほっとため息を吐く。

強がりには、ここでおしまいみたい。

気付けば、どこにこんな水分があるんだ？と不思議になるほどの涙が、あとからあとから流れ落ちてきた。

幼稚園の頃からずっと富樫君が好きで。

一度失恋したのに、やっぱりずっと恋し続けてきて。

乙女チックに夢見ていた再会、同時に再び失恋。

これほどまでに追い詰められた状態で、未だにしつこく恋し続ける
気持ちを当の本人に知られるなんて。

「…わっ…わたっ…私の…っ、ばかぁーっ！！呪われてしまえー
っ！！！！」

意味不明な叫びだと、自分の中の冷静な部分が鼻で笑ってる。
でも、いいのだ。
今日ぐらいは。

ぐちゃぐちゃにみつともなく泣きながら、タバコと揚げ物の匂いが
染み込んだスーツを脱ぎ散らし、下着姿のまま柔らかい布団の中に
もぐりこんだ。

涙と酔いで火照った体に、冷えた布団だけがやさしかった。

只今の時刻。

布団の中から我が愛しの目覚まし君を確認。

午前11時30分。

今日は、週の”びみょー”に後半よりの木曜日。

…ごめんなさい。

ずる休みしました。

社会人失格と言って下さい。

でも、こんな化け物みたいにはれた顔で外を歩いたら、保健所に珍獣として捕獲されてしまいそうです。

人間って、泣きながら眠るんだなぁって初めて知った今朝。

どろどろした灰色の眠りの中で見る夢はやっぱり悪夢で、見せられる画像は恋人らしくいちゃいちゃしてる富樫君と木本さんだったり、立ち去っていく富樫君の背中だったり、私のことを馬鹿にしたように笑った富樫君だったり。

結局全てが富樫君だった。

その度に夢の中の私は喉の奥が痛くなるほどに涙を堪え、結局耐えられなくなつてワンワン泣いてしまふのだった。

夢で溢れ出した涙が現実はまだ染み出てきたみたいで、起きた時には枕がありえないほどに湿っていた。

喉が重つたるように痛くて、目じりがひりひりする。

枕に顔をこすり付けていた、寝ている時でさえお間抜けな私。

『マンガだからうまくいくんだよ』

いつか従姉妹のお姉ちゃんが私に言つた言葉。

『男の心なんてねえ、わっかんないもんよ。』

人の心を乱すだけ乱して、結局別の女の手を取るなんて

お手の物なんだから。

この主人公の好きな男だつて、現実に行たら何人女手玉に取つてゐるかわからないわよ』

当時高校2年生だったお姉ちゃん。

不貞腐れたように私の憧れを一蹴したその裏に潜んでいたもの…今の私なら理解できる。

憧れを捨て去る事がいいというのではなくて、憧れはあくまでも夢の世界だつてこと。

現実には現実らしく過酷で、残酷だ。

きつとお姉ちゃんはそのことを踏まえたうえで、私に話をしたんだろつな。

亀の甲より年の功。

人間、どんな風に変わるかなんてわからない。

やっぱりお姉ちゃんには先見の明があったよ。

そんなお姉ちゃんは、今では2児の母。

福福しい優しいそんな旦那様の隣で、相変わらずがははと笑っている。

憧れはとても素敵で幸せなものだけど、でも憧れ通りじゃなくても
幸せになれる。

現実とは、そういうものなのだろうね。

それに気付いたお姉ちゃんは、お姉ちゃんなりの幸せを見つけたん
だろう。

私にもきつと、そんな現実的な幸せがあるに違いない。

わかっているのに未だに憧れにしがみついている私。

…救いようがないよねえ…。

結局だるい体を持て余し、ゴロゴロごろごろ過ごして。

夕方ぐらいになってようやく何か食べようという気になってきた。

冷ご飯で雑炊を制作している時、携帯がけたたましい着メロを奏で
始めた。

なかなか切れないこのしつこさ…絶対に真世だ

『ちよっとっ！アンタ、出るの遅すぎっ！』

…大当たり。

頭に直接響いてくるキンキン声が、収まっていた頭痛を誘発した。

「…ごめん」

『…ったくっ！どんだけ心配したと思ってんの？アンタって子は…』
「…だつて」

『だつてもへちまもないっ！声だつて、そんなに涸らしちゃって…
…どんだけ泣いてたんだって話だよ』

「…ばればれ？」

『ぶあく！あつたりまえじゃないっ！』

やっぱり真世には敵わないや。

目を吊り上げて怒ってるだろう真世の顔を思い浮かべて、へへへと笑った。

笑ってる場合じゃないでしょ？とため息を付いた後、真世は本題に入った。

『で？昨日のあれはなんだったの？』

「ああ…あれね。あれはね、つまり、私の初恋の富樫君は主任の富樫さん

だつたつてことよ」

『…は？』

「だからね、同じクラスのもう一人の富樫君つてのは富樫君の嘘で、
本当は富樫なんて名前の人、一人しかいなかったの」

『…え？は？へ…つて…えええええっ！？』

真世が本気で驚いてる。

なんだかちよつと気分がすっきりした。
ふふふん。

「主任は、初恋の富樫君その人だったの」

駄目押しの一言で、完全に黙り込んでしまった真世。
混乱してる？

マンガだったらきつと、真っ白の白髪頭になって、背景に枯葉なんて飛んじゃってるだろうな。

最初にどんな言葉が飛び出すかと思いきや、予想外にも聞こえてきたのは嗚咽だった。

あの真世がっ！？

「ちょっ…真世？ねえ？」

「……ごめんっ…ごめんよっ！」

私、アンタにつ、すんごく酷いこと、したっ！」

「だって、あれは…事故みたいなもんじゃない。

真世、知らなかったんだもん」

「私はっ！…アンタがどんな想いでここまでやってきたのか、ずっとそばで見えてきたんだよ？

もどかしくて変なお膳立てしたりしたけどさ、

でも恋するあんたの気持ちは痛いほど分かった。

私がアンタの幸せを応援せずして誰がする！なんて思ってたくせに…アンタを一番酷い形で裏切って、傷つけた…親友失格だよ、ほんと。

何度謝っても謝りきれないよ…ごめんね、瞳…」

「も、ほんと、いいのっ！ね？気にしないで？済んだ事だしさあ」

滅多に泣かない真世に泣かれると、なんだか私まで泣けてきた。
私、愛されてるなあ。

何で真世が男じゃなかったんだろう？

…って、年下の彼氏君には申し訳ないけど。

『…それにしても…返す返すも腹立たしいのは、あの富樫よっ！クソ野郎めっ！！』

明日、めっためたのぼっこぼこにしてやるっ！

泣いて土下座するまで殴り続けるっ！女の敵めっ！』

突然響いてきた、ドスの効いた迫力のある声。

怒ってる。

体の中心から怒りのオーラを発してる。きっと。

前言撤回。

こんな恐ろしげな彼氏はちょっと遠慮したい。

デートDVとかやだし。

「いや、そこまでやる必要は…」

『だってさ、アンタも知ってるから言うけど、アイツには

めちゃくちゃ可愛い彼女がいるって評判なのよ？

だったらなんであんな昔あった、避けるべき話題を持ち出して、

アンタの反応を窺うような、気持ちをかき乱すようなこと言うのよ？

おかしいじゃないっ！

アイツは今のアンタの気持ちは知らなかったにせよ、中学時代のアンタの

事は百も承知なのよ？

その時の話題は、アンタの初恋の人の話だったしさあ。

しかも再会した時、アンタに期待させるようなことまでして…外道よ、外道！

鬼畜のすることよっ！

そついうやつはね、ちゃんと正義の拳をくらっっておくべきなのよっ！

紳士面して、女ったらしがっ！！』

やばい。

富樫君に本気で食って掛りそうだ。

「ホントにつ！ホントにいいのってばっ！！私の話をちゃんと聞いてよっ！！」

『でもっ！瞳が…っ！』

「私がいいって言ったらいいのっ！

…富樫君には木本さんがいるってこと、昔からちゃんと知ってたの。

知っててずっと想ってたんだから、それは私がしてきたことで

富樫君には責任ないし。

それに今回知られたのも事故みたいなもんなんだし、時間撒き戻すこと

出来ないじゃない。

木本さんがいるんだもん、なにも…起こりようないし、知られたところで

…私が恥ずかしいって以外は…特に、問題ないし…」

『…瞳…』

「大丈夫！今日一日サボったら、気持ち整理出来てきたし！

昔の事は昔のことって割り切って、仕事は仕事でちゃんとけじめつけるし！

それにさ、富樫君と木本さんがラブラブカップルだって見せられてた方が

諦めも付くかもしれないでしょ？

そしたら、こんな私でも、恋の一つや二つぐらい出来るかもしれないじゃない！

何事も、いいほうに考えなきゃ！…ね？そうでしょ？」

『…アンタ、ホント能天気。馬鹿』

「…いいもん」

『…いい子過ぎて、涙出ちゃうわ。もっと私のことだって、怒鳴ってくれたらいいのに』

「怒鳴るぐらいに腹立ってたら、携帯からアドレス削除してるよ」

『こわっ！』

「ふふっ！…ホント、気にしないでね？全然怒ってないんだからね？」

『うん、わかった！ありがとう、瞳。』

…何かあったら、ホント、ちゃんと言うんだよ？

今度は富樫の野郎に騙されたりなんてしないから！ね？」

「うん。ありがとね」

真世と話が出来て、気持ちはずっかり落ち着いた。

丁度言い具合に出来上がった熱々の雑炊を食べてお風呂にゆっくりと浸かったら、心も体もぽかぽかしてきた。

きつと大丈夫。

仕事で顔を合わすときや電話で話するときがあるかもしれないけど、ちゃんとやれる。

私はもう社会人で、あの頃とは違うんだから。

明日からちゃんとがんばろう。

決意を胸に、いつもよりも勇ましく目覚まし君をセットし、お布団にもぐりこんだ。

翌朝、私は”何事もなかった、全てまるっきりいつも通りの私”に徹して出社した。

「おはようございます！昨日はご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」

恒例の朝の挨拶と一緒にお詫びの気持ちをこめて頭を下げれば、心優しいみんなは口々に「大丈夫？」

「体なんともない？」「無理するんじゃないよ？」…なんて、泣けてくるぐらいに温かな言葉をかけてくれた。

それはそれは、ズル休みしたことへの罪悪感が釘みたいにぶずぶず私の心を刺しまくってくれるほど。

罪悪感を脇に避けてみると、体を気遣って声をかけてもらったりあれこれサポートしてもらえるのは心からうれしい。

みんなの優しさが心や体に染み込んでいて、不覚にもじんわりと涙が浮かんでしまう。

思いっきり泣き叫んだりしてたから未だに身体がだるくて、気持ちもどんより曇り空。

たくさん励ましの言葉を糧に、昨日の分を取り戻すべく仕事に専念することにした。

それに…忙しいほうが、思い出さたくないものを思い出さなくなる

から。

これから先、どうなるんだろう？

多分もう二度と富樫君と顔をあわせることもないと思うけど、でももし仕事上でどうしようもないトラブルが起きたら主任である彼が出てくるのは確実。

そんなことになったら…私、正気でいられるかな？

ここはひとつ、本山さんにがんばっていただかねば。

彼女、私なんかよりもずっとしっかりしてそうだし、きっと大丈夫だろう。

それに、真世だってついててくれるし。

…なんて。

結局、思考回路は全て彼とのことに繋がってしまうわけ。
ため息も出やしないよ…全く、私ってば馬鹿女！

「笹原さん、今、いいかな？」

課長の呼ぶ声で、はたとお悩みループから解き放たれた私は、「はい！」と慌てて立ち上がった。

仕事、仕事！

がんばらねば！！

私はもう一度、自分に喝を入れた。

ようやく仕事がひと段落。

1時間ほど残業しただけですんで、ちょっと幸せ気分。

今日は金曜日。

明日も明後日もお休み。

時間も早いし、今日は何か美味しいものでも食べに行こうかなあ？
本当なら真世を誘いたところだけど、今日は愛しの彼と濃厚な週末を過ごすんだと張り切ってたし。
寂しいけど、一人で楽しむことにしよう。

こういう時は、大学生の頃からお世話になっているお馴染みの小さな食堂が一番！

おばちゃんとおったかトークで胃も心も温めるぞ！

帰り支度も出来て、更衣室に残っている女子社員の皆様に挨拶をしてから玄関に向かって歩き出した。

…それにしても、真世の言うところの濃厚な週末って一体どんな週末なんだろうか？等と考えつつ、12月の冷え切った空気の中に飛び出してみると。

見たことのある人がガードレールに寄りかかるようにして座り、携帯を操作していた。

「……へ？」

アレは…なんか…その…なんか…似てるん、だけ、ど…？
…いやいやいやいや。

いくらなんでも、それはないでしょうよ！

…ってことは、幻覚…？

私…幻覚見るほどにきちゃってるってわけ？

思考回路がフリーズする寸前、かの人物が携帯から顔を上げ、あることかまっすぐに私を見つめてきた。

途端、私の心臓がどこん！と大きな音を立てて、それからどつどつどつとありえないほどの速度で動き始めた。

幻じゃ、ないよね？

だったら何でまた、こんなところに……？

そんな疑問も声にならず、アホみたいにはかんと口を開けて見つめていたら、私の目の前に彼の影が落ちた。

「よお」

随分とあっさりした挨拶をしたのは、間違いなく、夢でもなく、富樫君その人だった。

「あ…ども」

気の抜けた炭酸みたいな返答が気に入らなかったようで、富樫君はあからさまに不機嫌そうに眉を寄せた。

「あのなあ、もうちょっとだなあ……………って、まあ、いいけどさ。じゃ、行くぞ」

「は？」

「もう仕事は終わったんだろ？ だったら、メシの時間だろ？」

「はあ……………」

「それとも、何か予定でもある？」

「えと…今日は一人ぼっちの金曜日だから、お馴染みのお店にご飯食べに行こうと……………」

「だったら、そこでいいや。笹原、案内して」

「…へ？」

「ほれ、ぼやぼやすんな！」

反応の悪い私の腕をがしつと掴んだ富樫君は、そのまま駅に向かった。すたと歩き始めた。

なんだなんだっ！？

このぶっきらぼうな野郎はっ！！

あの飲み会での大人な彼は一体どこに行ったんだろう？
ちよつと釈然としない。

でも考えてみれば、中学時代の彼は総じてぶっきらぼうだった。

言葉が足りなかったり、乱暴だったりして周りから誤解されることもあったけど、それは照れだったりもどかしさだったり、優しさだったりの裏返しだって、ずっと彼を見ていたら理解できた。

人を傷つける発言だと受け取られがちな容赦ない言葉が、実は相手の気持ちや先のことを考えた、心のこもったものであったり。

若さゆえの不器用さもあり、自ずと損な役割を演じる立場になってしまっていたけれど、平気そうな顔をしていたものの、彼もまた当時未熟な中学生だったわけで。

本当は相当傷ついていたことに、ただ見守ることしか出来なかった私だけど、気付いていた。

自分を良く見せることよりも相手のためになることを優先出来る彼は、本当に強くて優しい人だと中学生なりに感動していた。

そんな彼だったからこそ、今でもこんなにも好きなんだろう。

今の彼がどんな人か、哀しいことに私には分からないけど。

でも、あの中学生時代の彼が基盤となっているならば、きっと素敵な大人になっているに違いない。

木本さんが彼の心に気付いて二人が心を通わせるようになって、まったく不思議ではない。

考えてみれば、富樫君への片想いを続けていた中学時代と今でも全く状況は変わらないじゃないか。

だったら、中学生の頃のように、想いを秘めて生きる事だって、きつと出来るに違いない。

彼らの幸せに水を差すことにだけはしたくない。

だって、大好きな人には幸せになって欲しいもの。

だったら、いいじゃん。

彼とは友達で、大切な幼馴染ってことで。

胸が痛くなるのも次の恋にますます縁が遠くなるのもしかたないし。

どうせ富樫君と接触がなくても胸は痛いし、富樫君を忘れられない
うちは次の恋なんて考えられないし。

せつかく今日こうして会うことが出来たんだし、美味しくご飯を食
べて、迷惑かけたことをちゃんと謝って、元通りの生活に戻ろう。
そしたら次に会った時には、ビジネス上もちよこつと付き合いのあ
る幼馴染というポジションに落ち着いているだろう。

そう思えたら、肩の力がふっと抜けた。

「と、富樫君、その食堂、私の家の最寄り駅で…各駅停車しか止ま
らない

小さな駅なんだけど…それでも…大丈夫？」

「…大丈夫」

富樫君が私のテリトリーに入ってくるってのが、ちよつと不思議だ
った。

けど、あの大好きなおばちゃん的美味しいご飯を富樫君に食べても
らえるんだと思ったら、なんだかうれしかった。

にまにま笑う私を不思議そうな顔をして見ていた富樫君は、なぜか

ふつと笑顔を見せた。

私の記憶の中にある彼の笑顔のどれとも違う、優しさの滲み出た、温かくて印象的な笑顔。

あまりに素敵な笑顔すぎて、私はまるで中学生の頃に戻ったように赤らんでいるであろう頬を隠すように俯いた。

「あら、瞳ちゃん！いらつしゃあゝい！」

毎度お馴染みのおばちゃんの店の暖簾をくぐると、暖かい満面の笑顔が飛び込んできた。

体格のいいおばちゃんの、相変わらずの威勢のいい大きな声。まるで自分の家に帰って来たような温かさが、おばちゃんのいるこの食堂の中にはある。

そのせいか、ついつい通ってきてしまうのだ。

いつもは「仕事どう？」とか「ちゃんと食べなきゃダメだよー！」とかってお説教が始まるのに、今日のおばちゃんの好奇心は、一緒に連れてきた富樫君に向かっていているらしい。

お腹から響きだすような声で、「ええええええゝっ！！」と叫んだ。

…うわ、何か、お客さんに注目されてる。

「何々？瞳ちゃんも水臭いわねー！」

こんなに素敵な彼がいたんだったら、もっと早くに紹介してくれたらよかったのに！

突然だったから、おばちゃん、びっくりしちゃったよ!」

目をまん丸にして、大げさな口ぶりで話すおばちゃん。
こりゃ、からかう気満々だろうな。

「違うのっ、おばちゃんったら!

この人はねえ、私の幼馴染で富樫君って言うの。

彼とか…そんなんじゃ、全然ないの!」

少々頬が熱くて説得力に欠けるけど、どうにか状況を説明できたと思う。

実際、なんでもない関係なんだし、彼には素敵な彼女が居るんだから。

面白くない感情が浮かび上がり、無意識に唇を尖らせた。

これは私の小さい頃からの癖だ。

思い通りに行かないことを我慢する時に、必ずといっていいほどやってしまうらしい。

…おばちゃんに、気付かれなきゃいいんだけど。

「…おやおや。

瞳ちゃんが言うなら…そうなんだろうねえ」

何かもう一言二言と言いたそうな顔をしてから、おばちゃんは富樫君に視線を合わせてにっかりと笑った。

「富樫君、だっけ?

瞳ちゃんのお友達とあっちゃ、おばちゃん、大盛りサービスするから。

がつつり食べて行きな！」

豪快な笑い声を残して厨房に入っていくおばちゃんを見送ってから、空いている席に座った。

とにかく、ここは年季の入った食堂で。

来ているお客さんといえば、ガテン系のお兄さんやおじさんたち、中高年サラリーマンなどなど。

こういうお店が大好きな真世に誘われて通い始めて何年もたってるけど、若いOLの姿など見た事がなかった。

そんなお店にぱりつとした仕立てのいいスーツを着こなしている富樫君が、普通に座っていることに違和感を感じないわけでもない。

…というか、場違いだ。

彼もそう感じているのかもしれない。

お店の前に立った瞬間から、彼の眉間には皺がよりっぱなしだから、むつつり顔で正面に座る富樫君とおそろのおそろ視線を合わせ、問いかけてみる。

「あの…富樫君、何食べる？」

「…おまえは？」

「わ、私は、いつものほっけ焼き定食にしようかな…って」

「…ほっけ？」

「うん、ここのほっけね、港から直接仕入れててね、すっごく美味しいの。」

身がほっこりして柔らかで、じんわりと滋味深いっていうか。

しかもね、旬の野菜を使った煮つけや煮びたしと納豆、お味噌汁、ご飯、お新香まで付いてきて、値段がなんと！650円なんだよ。

すっごくお得でしょ？しかもおいしいし

私的には納豆が付いてるってのがより魅力的に見えるって言うか

…」

「…納豆」

「…あれ？富樫君、納豆嫌い？」

「…いや、嫌いじゃないけど…」

富樫君は、やっぱり渋い物でも食べたかのような顔をしている。

何が悪かったんだろうか？

おろおろしていると、富樫君がふっと息をついてから肩の力を抜いた。

そして、「そーいや、おまえは昔頃からこんな感じだったよな…」
なんて言いながらうれしそうに笑った。

よかった。

気に入らなかったわけじゃないんだ。

「俺もほっけ焼き定食」

富樫君のその声を聞いて、反射的に「おばちゃん！いつもの二つね
っっ！」と素丸出しの大声で叫んだ。

はたと気づいた時は既に遅く、富樫君は肩を震わせて笑っていた。

あまりの恥ずかしさに、頭から湯気が出そうだった。

その後、富樫君はうちまで送って行ってくれた。

駅から歩いて5分のところにあるマンションだけど、わざわざ遠回りしてまで送ってくれたことにそれこそ天にも上る気分を味わった。

富樫君は実家住まいだろうと思っていたのに、意外にも一人暮らしをしているらしい。

うちの駅の二つ向こうの駅だ。

世間は広いようで狭いなあ…としみじみ感じた。

「実家の近くののに、何で？」と聞くと「いい大人が親となんて住んでられねえし」と言っていた。

私なら親が近くに住んでたら、迷わずパラサイトに走るだろう…富樫君はやっぱり独立心旺盛なんだなあ、と感心してしまった。

いい感じで一日が終わり、もうこんなラッキーデーはないだろうなあと思っていたのに。

何故かこの週は毎日、どこかしらで富樫君と出会っことになった。

ある時は会社の前で偶然に。
ある時は駅のホームや改札口で。

富樫君の勤める東洋印刷は、うちの会社と駅を挟んで反対側にある。たとえ使う駅が同じでもビルが乱立するオフィス街で出会う確立など低いだろうに、偶然の連続にびっくりする。
実際、最近になるまで出会わなかったわけだし。

毎日会うとはいえ、お茶しに行ったりするわけじゃ、もちろん、ない。
ほんの10分程度立ち話をするだけ。

年末でどこの会社も忙しい時期なので、富樫君は得意先からの帰りだったり社用の途中だったりで、そんな時間ははなからなかった。若くして大きな会社の”主任”という重職を担っているだけに、彼はとても忙しそうだった。

ただ話をするだけだけど、いつもよりも少し長い時間の残業の後、生・富樫君を堪能できるのは幸せだった。

たとえ幼馴染というポジションだったとしても、ひよろひよろのくもの糸のような縁で繋がっているだけであっても、うれしいことには変わりなかったりする。

現金なもので、先週末のどん底など嘘のようだ。

…喉もと過ぎた瞬間に熱さをあつさり忘れてしまつから、余計に傷つくことになるってのは分かってるんだけど。
根が楽天的だから仕方ないのかもしれない。

うれしいことはうれしいのだ。

木曜日の夜、平日は用事がなければメールオンリーの真世から電話がかかってきたからこの話をする、真世は珍しく歯切れの悪い口調で「…よかったわね」と言った。

本当に良かったと思うているのかどうか全く分からないのは、気のせいと思いたいけど。

口の中でもごもご呟いているのはお念仏ではなくて、確実に罵詈雑言だと長年の付き合いでわかるのだ。

何かあったんだろうか？

「怒ってるの？」と聞いても、「あんたに対しては怒ることなどこれっぽっちもない」ときっぱり返される。

何なんだ？

聞いたところで絶対に教えてくれない事は分かっていたので、おとなしく引き下がることにしたけど。
十分気になる。

そして迎えた、花の金曜日。

週末だし、久々にラーメンでも食べに行こうと歩いていると、後ろから肩を叩かれた。
驚いて振り返ると、なんと、富樫君だった。

全力疾走でもしたのか、息が上がり、おでこには汗がじつとりと滲んでいた。

両膝に両手を付いて数回深呼吸した後、起き上がってネクタイを緩めてからワイシャツの第一ボタンを乱暴に外した。

男らしい荒々しい仕草とふと目の前にさらけ出された喉仏に、一瞬ドキリと心臓が高鳴った。

頬に熱がこもるのが、妙に恥ずかしかった。

私の馬鹿！

意識しまくってるってこと、ばれればじゃんっ！
欲求不満丸出しじゃんっ！！

「…んで、今日はこれからどこへ？」

あわあわしている私に、富樫君が上目遣いで見てくる。
ため息のような息遣いに混ざる台詞が、非常に色っぽい。

男性に免疫のない私は、どきまぎして、しどろもどろに答えた。

「…行きつけの、ラーメン屋さん」

そこはやっぱり学生の頃からお世話になっている、外見はボロ屋だけど味はピカーのお店。

じっくりと煮込んだとんこつからとられた出汁と企業秘密である各種材料との調和は、少し太めの麺にはばっちり合っている。

だからこそ、定期的に思い出しては行きたくなるのだ。

そして、今日はラーメンの口になってしまったわけで。

正直にそう告げると、富樫君は呆れたようにため息をついてから「じゃ、行こうか？」とさりげなく左手を差し伸べてくれた。

戸惑って空中をさまよっていた私の右手を痺れを切らしたとばかりに捕まえ、私から聞き出した場所に向かって歩いていった。

せかせかと歩く富樫君の背中を見つつ、私はきつとまたお店を見た瞬間に眉間に皺が寄るんだろうなあと考えた。

何でそうなるのか、理由はトンとわからない。

でもなんだかそんな彼を見るのは新鮮で、心が浮き立つようだった。

例え友達以上になれなくても、こういう特典はとても美味しいと思う。

頭の中にある思い出のページにしっかりと貼り付けている。

これがただの思い出に変わる日が来る事は怖いけれど、でも大好きな彼と一緒にいる時間は大切にしたい。

そんな想いを胸に秘めて、私はとくとくと早まる心臓の音に気付かれませんようにと祈りながら、富樫君の大きくて頼りがいのありそうな背中を追いかけた。

あの日、ラーメン店の前に立った富樫君の顔は、ちょっとした見ものだった。

愕然と見開かれた目。
あんぐりと開いた口。

店の汚さ加減にかなり面を食らったようだ。
…麵食べる前つてのにさあ…などくだらないダジャレが頭の中に浮かび、思わずうひゃひゃと笑ってしまった。

「…何笑ってんだよ」

冷ややかな富樫君の声。

…お、お、怒った？

一瞬、冷や汗が全身に滲んだ。

強張った笑顔を返すと、はあと盛大にため息をついた彼は「本当にここ？」と再度確認した。

こくこくと頷き返す私を見てじと目で睨んできたと思ったら、「入

るぞ」と言って常連の私を差し置いて入って行ってしまった。

そりゃ驚くだろうさ、この店見たら。

本当に食べ物を出してくれるのか？と呟いてしまいたくなるほど、年季が入りすぎている。

真世の好奇心に付き合わされて始めてこの店の前に立った時、カンベンしてって思ったもん。

でも一度入って見たら、もう、病み付き。

戦後すぐ掘っ立て小屋を手直ししながらずっと営業してきたお店らしく、味にも歴史がうまみ成分と一緒に溶け込んでいるようだった。

正直、ぜひともこの味は富樫君に試してもらいたい。

この味を分かち合い、激ウマによって生まれる興奮を共有したいというか。

きっと気風のいい大将の人柄も、富樫君なら気に入ってくれるに違いない。

今の大将は3代目。

50代で、背が低いのにがっちりした体格の持ち主だ。

なんでも空手の有段者なんだそうで、その繋がりもあって真世とはもの凄く話が合うのだ。

そして2人して私をお子様扱いして……くそそう。

……って、こんな話じゃなくて。

一見潰れそうなお店だけど、時期4代目が大將の元で現在育ちつつあるほどの有望店だ。

大將の甥っ子さんである未来の大將は、勝司君と言って、まだ23歳。

初めてアルバイトとしてお店に来た時は若干19歳だった。

逆立てられた金髪と数を数えなくなるほど開けられたピアスホールが目立つせいで見かけは派手だけれど、外見とは裏腹な彼の志の高さとラーメン作りへの熱意は、とにかく感心せずにはいられない。大將の容赦ない鉄拳にめげることなく、ひたすら修行している姿は見習いたいぐらいだ。

彼の必死の努力が実り、今ではダシ作りの秘伝を教えてもらうまでに成長した。

蛇足ながら。

彼をこんなにも手放しで褒めるのは、決して来るたびに煮卵や手作りギョーザをサービスしてくれるからではない。

決して。

「らっしやい！」

暖簾をくぐると2人の男の野太い声が飛んできた。

富樫君の大きな背中の後ろからちよこんと顔を出すと、大將と勝司君の目が見る見るまん丸になった。

体格が全然違つくせに、こういう仕草に血の繋がりをを感じる。

ちよつと笑えて、にんまり。

「え！瞳ちゃんっ！？珍しい、男連れなんてさ！」

大將が独特のだみ声で叫んだ。

えへらと笑顔で返してから、たまたま二つ並んで空いていたカウンター席に二人並んで座った。

ラーメンとギョーザを二人前注文し終わると、大將は興味深々で近づいてきた。

いつも口悪くも愛想良く話しかけてくれる勝司君は、なぜか睨みつけてくるばかりで鬼気迫る勢いで注文をこなしている。

…なんか、あつたのかな？

「なんだよ、瞳ちゃんも隅に置けねえなあ。彼氏かい？」

珍しく、大將がわざわざカウンター越しの目の前に立った。大將の小さな瞳が、抜け目なくきらりと光る。

わわわっ！誤解されたままじゃ、富樫君も迷惑に違いない。私は慌てて訂正した。

「違う違う！彼、富樫君って言ってね、私の幼馴染、なの。ね？」
「まあ、そうです…どうぞ、よろしく」

大将に笑顔で挨拶を返す富樫君に、ちくりと胸が痛んだ。
ただの幼馴染なんだから、彼がそういうのは当然のことなのに…何
期待してんだ？
馬鹿腫めっ！！

「幼馴染だつてよ！良かったな、勝司！！」

大きな声で熱心に仕事中の勝司君に大将が声を掛けたら、「うっせ
えよ、くそじじい！」とドスの聞いた声が返ってきた。
何が良かったのか分からないけど、いつもの勝司君に戻っててほっ
とした。

「ま、ゆっくり食ってってくれや！」

がははと笑いながら麺をゆでる大鍋の前に戻っていく大将に、笑顔
で手を振った。

その後、富樫君に方に体を向き直すと、何故か彼の眉間にはくつき
りと深い皺がよっていた。

…何か、機嫌の悪くなるようなこと、あったっけ？

「…あの、富樫君？」

「…んだよ」

「…なんか、腹が立つことでも…あった？」

「……………」
「ねえ？」
「……別に」
「……………」

はつきり、怖い。

きっと今私がマンガの中の登場人物になったら、次から次へと汗を流している絵になるに違いない。

会話を探すも、頭の中が真っ白で何も思いつかない。

富樫君は考え込んでいたかと思ったら、何故か厨房で動く勝司君を睨みつけている。

ラーメン屋さん開業を将来的に夢見てるから、プロの技を盗もうとしている、とか？

富樫君に限って…ありえない。

「ラーメンとギョーザ、おまちっ！！」

天の声ならぬ、大将の声！

この声が天使の囁きに聞こえてしまうほど、私は進退窮まっていたのか！？

「とにかく、大将のラーメンはすごくおいしいの！熱いうちに食べよ？ね？」

えへらと笑って富樫君に勧めたら、心もち頬を染めた富樫君が「…おお」と返事してくれた。

「…ん？なんか、目つきが違うつていうか…なんていうか…」

「…セクシー？」

ラーメンの湯気のなせる業だろうか？

さつきとは別の意味で気まづくなった私は割り箸に手を伸ばし、一つを富樫君に渡してからばちん、と割った。

きれいに真ん中で割れたから、きつといい事があるに違いない。

大量に乗ったチャーシューともやしとネギを掻き分け、卵色よりも黄色い太麺をすくい上げた。

豪快にずるずるとすすり上げると、奥行きのある汁の味が口の中一杯に広がり、かみ締めるといつもと変わらぬもっちりとした歯ごたえがした。

「おいしいっ！！」と満足して叫ぶと、「ホント、うめえ…」と富樫君が呟いた。

見ると、その表情には満面の笑顔。

そうそう、旨いラーメンはイライラ腹立ちを全て追い払ってくれるものなのだ！

さつきまでの気まづい空気はすっかり浄化されていた。

「…なあ」

あらかた食べ終わったところで、富樫君が言った。

富樫君はもう既に完食している。

やっぱり、男の人は食べるのも早いなあ。

ギョーザを一口に入れたところで返事が出来ず、代わりに首を傾げてみる。

わずかに頬の血色が良くなった富樫君は、咳払い一つしてから話し始めた。

「おまえさあ、来週のも…」

「瞳！これ食え！！！」

富樫君の台詞と被るように、どん！と目の前に置かれたキムチセツト。

置いたのは、気持ち悪いほど笑顔いつぱいの勝司君だった。

…いつもはもつとぶすっ！としてるのに…どうしたんだろう？

会話を遮られた富樫君はむっと口をへの字に曲げ、勝司君をにらみつけた。

2人の男の視線から火花が飛んでいる感じがするのは、気のせいよね？

「あ、あの、勝司君、ありがと、いつも。大将、頂きますっ！」

「あいよ！勝司のおごりだしさあ、遠慮なく食ってよ！」

「はい！」

大将にも一言お礼を言ってから、大好きな大根のキムチ”カクテキ”を一つぱくりと食べた。
やっぱりおいしいっ！

笑顔で今度は白菜をつまむと隣から端がにゅっと伸びてきて、富樫君が皿にあったキムチを全てすくい上げて食べてしまった。

驚いた私は、あんぐりと口をあけた。

「てめえ、何一人で食ってんだよっ！」

富樫君は怒鳴りつけてくる勝司君を涼しい顔で無視し、まるで頬袋に向日葵の種を溜め込んだりスみたいに食べている。

…そんなに、キムチが好きだったのか…？
知らなかった。

「…ところでよ、瞳、おまえさあ、来週の木曜日、会社帰りにこれねえ？」

「え？木曜日…って、24日？」

「おお！どうせ予定なんてないんだろ？な？いいだろ？」

隣で富樫君が、ごふつと変な音を立てた。
どうやら何かいいたけれど、口の中一杯で話が出来ないようだ。
勝司君がふふん、と意地悪く笑っている。

なんか、不穏な空気…。

おろおろしていると、勝司君が答えを催促してくる。
でもこの日は…

「ごめん。12月23日は両親の誕生日で、22日会社終わったら
すぐに実家に帰るんだ。」

24日は朝かなり早くに実家から出勤することになるし、夜は家
に帰って休みたいの」

本当にごめんね、ともう一度ちゃんとあやまると、勝司君と一緒に
何故か富樫君もがつくりしていた。
なんだなんだ!?

「あゝ…でも、もしさあ、体調悪くなくて寂しくなったらさ、
絶対に来いよ!な?」

「あ、うん。でも勝司君、期待しないでね?」

「わあーっ た」

「勝司、いつまで油売ってんだ!」と大将に怒鳴られた勝司君は、

ブツブツ言いながら仕事に戻っていった。
頼杖を付きながら彼の後姿を見送っていた富樫君が、恨めしそうな低い声でぼそりと言った。

「…お前、あちこちに出世欲の強いオトモダチ、作ってんな」

「へ？なんのこと？」

「…分からなかったら、別にいいよ」

「はい？…って、私の友達の中でも一番出世してるのって、富樫君だよ？」

「…それ、意味分かってて言ってるワケ？」

「え…と」

「…天然も、ここまで来ると犯罪だよな。」

杉田の言いたいこと、いまよくわかったよ」

「え？真世？」

「……早く食え」

富樫君は私に残りを食べるように促してから、一言も話さなかった。
水をちびちび飲みながら、ぼんやりと考え事をしている様子。

何考え込んでいるんだろう？

悩ましげに瞳を細める富樫君の横顔を見てから、名残を惜しみつつ
極上のスープの最後の一口を飲み込んだ。

そっいえば…

来週24日と言えば、言わずと知れたクリスマス・イヴ。

富樫君は木本さんと2人きりのディナーでも楽しむのだろうか？

恋人同士肩を寄せ合い、笑いあい、触れ合って……

そんなことを考えていると、胸がちくちく痛み出す。

私はただの幼馴染。

恋人である木本さんに嫉妬するなんて、おかしい話なのに。

今年も、例年の一人ケンタッキー決定。

空しさを抱きしめながら、はふつとため息をついた。

やっぱり、辛いなあ…。

久々に帰った実家では、申し訳なくなるほどの大歓迎を受けた。

…お母さんの誕生日のお祝いのためだったのに…よかったのだろうか？

女が私一人で、しかも兄達ともかなり年が離れていて、だから余計にかもしれないけれど、うちの家族はとにかく昔から私に甘かった。それを当たり前のこととして若干傲慢な感じに生きていければよかったのだけれど、生まれた時から小市民の私には、物心付いてくると同時に申し訳なさとか遠慮が先に立ってしまった。

特に10歳も年の離れただい兄ちゃんと8歳離れたちい兄ちゃん。

それぞれ家庭をもつて楽しくやってるくせに、未だに何かと私に説教やら旧態然とした理屈をぶちかましてくる。過保護にも程があると思う。

お義姉さんたちも呆れ顔で、私に同情の目を向けてくれるほどだ。

こんな現状があつたから、余計に彼氏が出来ない歴が更新され続けているのかもしれない。

まあ、家を出て一人暮らしが出来ただけでも、良しとせねばなるまい…って、ちい兄ちゃん一家が近くに住んでるけど。

いうところの、お目付け役だ。

家族にとって私は根っからの心配の種らしい。

早朝なのにぎっしり席が埋まっている新幹線の中で、大きなあくびを一つした。

遅寝早起きすると、やっぱり体がついてきてくれない。

一瞬かなり深く眠っていたみたい。

はっと気付いたら、もう見慣れた灰色の街の景色が広がっていた。東京駅で駅員に起こされる前に起きて下車することが出来たのは、ある意味奇跡かも。

大きな荷物は宅急便で送っているし、今日はいつものバッグだけでもさすがに昨夜の宴会の疲労が抜けきれず、眠気が覚めない。

朝っぱらであってもなお、クリスマスを意識させられるってのにこのザマ…。

こんなに空しい思いで12月24、25日の大イベントを過ごすのは、一体何回目になるんだろう？

子供の頃は楽しかったのになぁ…。

今日は長い一日になりそうだ…。

だるい体に鞭打って、なんとか仕事を終えた。

今日はほとんどの人がクリスマススイヴだからって、残業もせずに帰っていった。

私も便乗して、ちゃっかり定時にオフィスを飛び出した。

…特にこれといって予定もないんだけどさ。

更衣室ではみんなわいわい騒いでいた。

これから彼とデート…なんて人は、念入りにお化粧して服装をチエツクしてた。

小さいお子さんがいる人は「ケーキ買って帰らなきゃいけないの!」とかなり焦っていた。

どっちにしろ、みんなとっても幸せそう。

幸せそうな顔を見ていると、なんだか私もニコニコしてしまう。

「笹原さんもデートですかあ?」…なんて質問を笑顔でごまかし、いつもと同じように会社を出た。

今日の晩御飯は決まっている。

自宅最寄り駅にある、ケンタッキーフライドチキン。

ほとんどの人がお持ち帰りで、空席が多い割にカウンター前には結構な行列が出来ていた。

あと3人で順番が回ってくるという時、携帯の着メロが鳴った。真世専用だったので、慌てて通話ボタンを押した。

開口一番の言葉は『ちよつと、アンタ今どこにいるの?』だった。
いつもの”クリスマスに一人でケンタツて…涙でそう”的なお説教
ではなかったので、内心かなり驚いていた。

”…なんかあるんじゃないか?”

…なんて珍しく裏を探ってみるものの、慣れないことだったので何
も思いつかなかった。
だから素直に居場所を教えて、一人のクリスマスパーティをするん
だと言った。

真世からの返事はそっけなく、かかってきた時と同じように突然電
話が切れた。
いつものことだけど。

ようやく順番が回ってきて、慌てて注文した。
余裕でクリスマスイルミネーションで光り輝く街が見える席をゲッ
トできた。

さっき買った、チキン一本とビスケット2個、クリスピーチキンが
2本、グリーンサラダ、スープをテーブルに置いた。
なんてゴージャス!

ケーキは以前から目をつけている、コンビニスイーツと決めてい
るのでパスだ。

正直、チキンも好きだけど、ビスケットの方が好きだったりする。たっぷりとメープルシロップをかけてぱくりと食べるのが、なんともたまらない。

クリスマスっぽくないけど、自分が美味しいと思うものを食べる方がイエスキリストも喜んでくれるだろう。

七面鳥はなくてもチキンがあればオツケーだろうと勝手に思っているの、よしとする。

しかも、店員さんが気を利かせてくれたのか、チキンは食べやすいモモ肉だし！

おいしそうなクリスマスディナーににんまり微笑み、私はイルミネーションをうつとりと眺めながらゆっくりと食べ始めた。

一口、二口とゆっくり味わうようにかじりついていたら、突然テーブルに影が落ちた。

驚いて見上げてみると、荒い呼吸を整えようとテーブルに片手をついて支え、額に汗を滲ませている男性が居た。

紛れもない、富樫君その人だった。

「…こんなところで、何してんの？」

頭の中に浮かんだ疑問をそのまま口に出した。すると彼はなんだか恨めしそうな顔をして、私を睨みつけた。

大きく深呼吸をして、さらにそれに盛大なため息を加えた彼は、どつさりと私の向かいの席に座り、けだるそうに前髪をかき上げて聞いた。

「で？何でこんな日に、たった一人でケンタッキーなわけ？」

不機嫌なのかいつもよりも若干低い声に、びびり根性がひよっこり顔を出してしまった。

怒られる前の猫みたいに首をすくめたこと、きつと富樫君に気付かれたに違いない。

それでも、なんでこんな日に…って聞かれてもなあ…習慣だし。

「一人暮らしを始めてから毎年、こうして過ごしてるから…？」

結局これ以上は答えようがなかった。

富樫君は納得したようになしていないようなうめき声を上げて、カバンを置いたまま席を立った。

しばらくして戻ってきた時は、ちゃっかりとトレイを持っていた。

「俺も腹減ったし…まあ、クリスマスだし、たまにはいいかなあと思ってたさ」

いい訳のような言い方が不思議だったけど。
きつと仕事のしすぎでおなかが空いてるに違いない。

富樫君が戻ってくるのを待っている間に、私のクリスマスディナーはすっかり冷めてしまった。

それでも、彼と一緒に食べるチキンは格別の味がするに違いない。

なんて考えていたら。

富樫君はさつと私のトレーから冷めたチキンをつまみ上げ、自分のトレーにある熱々のチキンと交換してくれた。

”悪いからいいよ”と言おうとした私を片手を振ることで制止し、冷めたチキンにばかりとかぶりついた。

彼のさりげない優しさや気遣いに触れて感動した私の心から、彼を想う気持ちがちがって溢れてくるのが分かった。

やっぱり、今でも大好き。

彼は私の特別な人。

思いは決して届かないけど…。

眼がちくちくして油断したら涙が滲みそうになるのを瞬きでやり過ぎ、彼を做ってばかりとチキンにかぶりついた。

想像通り、チキンは特別なスパイスのせいでいつも以上に美味しかった。

家族と一緒に過ごしたクリスマスだって、もちろん最高に楽しくて幸せだったけど。

今日この日のようなドキメキや安らぎと小さな失望がない交ぜにな

ったクリスマスなど、決してなかった。
決して。

ちらり、と富樫君に視線を合わせた。
黙々と食べる富樫君は、どうやら思った以上におなかがすいていた
ようだ。

そんな彼の幼さに、ますます胸が高鳴った。
私、そんなに母性本能強かったっけ…？

「笹原は、今日は誰とも約束しなかったのか？」

突然投げかけられた質問の意味が分からず、きょとんと彼を見つめ
た。

「あ、いや、だから…この前のラーメン屋の男、とかさ」

…何でここで勝司君がでてくるんだろう？
ますます分からない。

でも、考えてみれば、彼が気にしている事は私が気にせねばならな
いことでもあるのだ。

『木本さんと約束、してたんじゃないのかな？』

頭の隅っこで引っかかっている。

きつとここに来たのは偶然で、これからずっと一晩中彼女と一緒に過ごすに違いない。

だって、木本さんは富樫君の初恋の人で、今は大切な人なんだから。

ずきん、と胸が酷く痛んだ。

わかってたはずのことなのに。

やっぱり、私は大馬鹿女だ。

でも、いいや！

大馬鹿ついでに、2人で過ごすクリスマス・イヴを楽しんでやる！

色気も何もない、真世が聞いたら呆れて口をぽっかりあけてしまいそうな状況だけど。

けど、私にとっては、何よりも大切な思い出の一つになるんだから。

どうか、神様、サンタ様。

今だけ。

この瞬間だけ、彼との時間を私に下さい。

目の前には、豪快にチキンやポテト、チキンフィレサンドを頼張る富樫君が居る。

昔の彼の影を残しつつも、大人になった彼。

ずっと恋焦がれてきた彼が、もう会うことなど二度とないと諦めていた彼が、こうして私の前に居るんだ。

しかも、引越しによって離れてしまったため知りようもなかった昔の富樫君のこともわかった。

随分勉強をがんばってたみたい。

今彼が勤めているかの有名な会社は父方の一族が経営しているそう
で、富樫君のお父さんとお母さんのご実家の方に婿入りしたことも
あって、将来は役員となつて会社を繁栄させるべく入社したそうだ。
会社に対して責任を持つべく、あらゆる学問を究めていったのこ
と。

確かに、富樫君は話題豊富で、打てば響くように答えが返ってくる。
本当に素敵な大人の男性になった。
頼もしくも誇らしい彼に偶然出会って、こうして一緒に居られるな
んて…。

奇跡だ。

絶対に。

きつとこの日この時、私の人生最高のクリスマスプレゼントになる
…私はまさにこの瞬間、そう確信した。

夢のようなクリスマススイヴを過ごして以後、年末に向けて業務が忙しくなったのか、富樫君の姿を見なくなった。

…といっても、今日でまだ3日目なんだけど。

それでもラッキー続きで毎日のように顔を合わせていただけに、なんだか無性に恋しくて、寂しい。

富樫君は、どうしてるのかなあ？

私のこと、思い出してくれてるかな？

…って、そんなこと、絶対はない、ない。

ちよつと図に乗りすぎてない、私？

……

……

…はっ！

いかんいかん！

こんなことでは、またどん底に落ちて這い上がるのが大変になっちゃう！

24日の日、結局9時ごろ富樫君が家まで送って行ってくれた。もう遅いし、危ないからって。ぶっきらぼうなくせに、そういうとこ、本当に優しいなって思う。そしてまた、恋の花を咲かせて…おかげで、冬だというのに頭の中は春爛漫だ。

世間一般でも大切な記念日の一つ、クリスマスイヴ。いい思い出をたくさんもらった。それだけで幸せなのかもしれない。うん。

友達っただけでもすっごくうれしかった。一緒に居られるだけで。

気付けば、今日は27日。すっかり年末だ。

うちの会社は明後日29日までで今年の営業は終わり。30日からはお正月休みに突入だ。忘年会も昨夜無事に終了し、酔っ払いの部長のお説教も30分で切り上がったことを思えば、いい年の終わり方だったような気がしないでもない。

今日はお休み。
明日もお休み。

月曜日に真面目に出勤したら火曜日にこの部屋の大掃除をして、31日に実家に帰省予定だ。これもいつもながらのことだ。

さあ今日はのんびりと大掃除のさわりでもやってみるか！と思って
いると、ふいに携帯電話がなった。

着メロを聞いて耳を疑い、ディスプレイに表示沙汰名前を見て目を
疑った。

富樫君だ…っ！

彼とはクリスマススイヴのあの小さな晩餐会の時、メールアドレスや
携帯番号を交換していた。

そして速攻、お気に入りの曲を彼専用の着メロに登録。

…これぐらいの乙女的行動は許されるだろう、なんて思っ

まさかホントに電話がかかってくるなんて…。

テーブルに置いてあった携帯をむしり取って、慌てて通話ボタンを
押して耳に押し付けた。

「も…っ、もしもしっ!？」

…かっこわるい。

声、裏返ってるし。

カッと頬が火照らせていると、電話の向こうから聞こえて来た声の
せいで一瞬で体中が冷えた。

こういう状態を”冷水を浴びせられた”と言っのだろう。

『あの…笹原さん、ですよ？私…木本と申します』

素敵に澄んだ声に羨望。

魅力的な姿に似合った素敵な声、話し振り。

ちくん、と胸が痛んだ。

ぶんぶんと首を縦に振った時、そんな仕草は電話で通用しないと気付き、こつ恥ずかしい気持ちをわきあがらせて返事した。
恥ずかしいぞ…私。

『突然電話してしまつて、ごめんなさい。

でも、驚いてしまつて…雄大君の携帯に貴女のアドレスが登録されてたから…。

まさか彼が…浮気してるなんて思つてもみなくて…』
「ええっ!？」

びっくりしすぎると話が出来なくなるといふのは本当のことだったんだ、再度驚いた。

「ち、違いますっ！

彼とは…先日再会したばかりで、懐かしい幼馴染ってだけで…え

と、

仕事の関係でも顔をあわせたっただけで…」

『でも、あなたでしょ？クリスマスイヴの日、彼と一緒にいたのは…』

「あ、誤解しないでください！偶然です、偶然。」

特にどうってことなく、ケンタッキーでフライドチキンと一緒に食べて…それだけです」

『……え？そう、なの？』

「そうです…」

真実なので胸を張って証言できるが、どこかでうつすら感じている女としてのプライドとか片想いの熱がさらに私の胸を細い針で強く刺してきた。

それでも、嘘をつくななんて選択肢は、端から私になかった。

ぐつと奥歯をかみ締めて沈黙すると、電話の向こうでくすくすと笑い声が聞こえたと思うと、その声がどんどん大きくなってきた。

『あの雄大君が！ケンタッキー？…っ、貴女、よっぽど適当にあしらわれてるか』

女として認められてないのね？

…ホント、笑っちゃう！

それなら話は早いわ。

私、彼と結婚の約束をしてるの。だからもう二度と、友達としてでも彼に

近づかないでほしいの』

「え？けっ…こん？」

『あら？彼、言ってなかった？』

そうなのよ、昔からの約束なの。もちろん、親同士も賛成してくれてるわ。

彼のご実家も、一族が経営している今の会社も大企業だし、それなりの

格式のある人じゃない？

彼の気持ちは私にあるって事は分かってるけど、でも、女として容認

出来る事じゃないでしょ？

そんなわけだから、あんまり彼に変な噂が流れたりしたら困るの。貴女はただの友達だって分かっているけど、やっぱり世の中って、いろんな風に噂する人がいるじゃない？」

「…そう、ですよね……」

『雄大君ってすごく優しい人だから、貴女のことを突き放すことが出来ないんだと思うの。』

彼ってとつても面倒見がいいし、例えば自分の出世がふいになったとしても、

貴女をないがしろに出来る様な人じゃないのよ。

…だから、貴女が彼からはなれて欲しいの。

そうしたら、彼は罪悪感を感じずにあなたから解放されるし…

貴女だって、大切なオトモダチが傷つくことなんて…したくないでしょ？』

「…もちろんです」

『それなら、話が早いわ。』

絶対に彼に電話なんてしないでね？

それから、アドレスも、もう消してしまつて。

私たちの関係に汚点を残すようなこと、私したくないの。

だって、浮気してたなんて噂が広がれば、彼の立場が危うくなるでしょ？

敵はそれこそ、たくさん居るんだから。

…理解、していただけたかしら？』

「……はい」
『それじゃ、お願いね?』

そこでぶつり、と電話が切れた。
携帯から聞こえてくるのは、規則正しい電子音。

ショック状態から帰って来ると、胸の痛みが尋常じゃないほどになつていた。

体がだるくて、両手を挙げることも億劫だ。

2人で話をしていると、とても楽しかった。
だから、それでいいんだと思つていた。

2人の間に恋愛関係がなくても、友情が育ってくればいいんじゃないかって。

それならなに問題もないって。

…ただ、私一人が尋常じゃない痛みを耐えなければならぬってだけで。

そんなことを言ってみたところで、やっぱり富樫君と会って話出来なくなるこのほうが辛いと思つた。

私、自分のエゴで富樫君の幸せを邪魔してたのかもしれない。
きっと私を傷つけないようにと気配りしてくれていたのだ。
なんだか…自分が嫌になる。

馬鹿みたいに浮かれて、彼を独り占めしたような気分になって…ほんと、どうしようもないほどのお馬鹿女。

こんな時になって気付かされるなんて。
もう淡い恋として飾って置けるほど、小さな感情じゃなくなったことに。

「…もう、最悪…」

私はベッドにごろりと体を横たえた。

分かってたことなのに、納得するにはかなりの時間がかかるほどになつてしまった。

…どうなるんだろ？

暗くなつた携帯電話の画面を見つめながら、急に怖くなった。

自分の人生もこの小さな機会と同じように、暗く閉ざされてしまひ
そう。

心も体も空っぽになるって、こういうことを言うんだなぁ……と思った。

予定よりも早く実家に帰って、それからはひたすら引きこもっていた。

携帯は、木本さんからの電話を切った後、すぐに富樫君のアドレスを着信拒否設定にした。

…本当は消さなきゃいけないんだろうけど…それだけは出来なかった。

後ろめたさが消えなくて、実家に帰ってからすぐに電源をオフにしてみた。

電源が入っていなければ、富樫君からの連絡を無条件に切って捨てるという、上から目線な行為に対する罪悪感が薄らぐような気がして。

意味のない行動だって事は分かってたけど、少しの間だけでも現実から逃れるにはいい手段だと思った。

メールが来るのは真世ぐらいたろうし、真世は年末年始空手の冬合宿で電波の届かない山奥に行くから

連絡はこないはずだし、困ったことにはならないんだけど。

私の気持ちの上では、大いに問題だったりする。

なんにせよ、誰とも会いたくないし、何もしたくないのは確か。

もちろん、富樫君の顔だって……と考えて、がっくりと肩が落ちる。

会いたくない分けないに決まってる。
学習が出来ない、超お手軽脳め！！

真世は今頃、彼女に影響されて空手を始めた彼と、稽古に打ち込んでいるに違いない。

白帯の彼は真世に相当手ひどくやられているそうだけど…彼はぼこぼこにされても一緒に居られるだけで幸せなのだって言っていた。ちよつと変わってるけど、一途な彼だ。

二人の関係が羨ましくて、余計に惨めな気分になった。

胸が焼けそうに痛むたび、私がどれほど富樫君に恋焦がれているかわかる。

けど、相手には伝わってくれない。

そりゃそうだ。

彼は私のことなんて、恋愛対象にしていなから。

今も、昔も、ただの幼馴染のまま。

これまで感じていた以上に真世と彼のことが羨ましくて仕方がない。
大好きな相手に同じぐらい大好きになってもらえる幸せ。

これ以上の喜びなんて、きつとない。

携帯が眼に入るたびに、誘惑に負けてしまいそうになる。

…富樫君と、一度だけ電話で話してみるのがいいかもしれない。

これまで迷惑かけてきたことを機械越しにでも謝れば、少しは前向きに進めるかもしれない。

気付かなかったとはいえ、私が富樫君に迷惑を掛けていたのは事実だ。

そのことについては、彼と木本さんに誠心誠意謝りたい。かといって、会って話をするほどの度胸はないし。

怒りから冷たくなってしまった眼で見られたら……もう、立ち直れそうにないし。

けど。

木本さんのことを考えたら、それがとても独りよがりなものに思えてくる。

私がこのこ出て行ったら結局富樫君に気を使わせ、彼女を苦しめるだけなんだ。

このまま連絡もせず、過去に居た嫌なやつの一として忘れ去られた方が、誰にとってもプラスになるはず。

……私以外は。

それにどんな理由をつけても、実際は私が富樫君の声を聞きたいから電話したいんだってことに私は気付いている。

そう熱望する心を知らん振りして電話をかけられる度胸は、残念ながら持ってない。

欲張りなくせに、意気地なしなのだ。

小心者。

中学を卒業して再会する日までずっと会ってなかった。

彼が居ない事が当たり前の日常生活の中で彼との思い出をふと頭に浮かべても、ちくりと胸が痛んでため息が出るだけだった。

痛い初恋の思い出を胸にしまつて、現実の中で笑い、楽しみ、悩み、悲しみ……ごく普通に生活してきたのだ。

富樫君に会えなくなつたところで、彼と再会する前と全く変わらな
い当たり前の生活が待っている。

たいした事ではないはずだ。

うまくやってこれてたんだから。

なのに。

大人になつた富樫君と会つた瞬間、懐かしさと幼い恋心が硬い殻を
割つて伸び上がる種のように急速に育ち始めてしまつた。

こんな私には馴染み深い感情以外のものが、わつと心の中に一斉に
芽吹いたような気がする。

つまり。

きつと。

私は、性懲りもなく、再び富樫君に恋をしてしまつたって事なのだ
と思う。

しかもあの頃よりももっともつと強くて、もっとうねるような激し
い心で。

自分の中にこんなにも激しい気質があつたなんて、今まで思いもよ
らなかつた。

恋焦がれて焼け死んでしまいそうなほど心がよじれてしまう恋なん
て、知らなかつた。

そうだ。

これでよかったんだ。

嫌われたままで。

だって、どうせ無理だったんだもん。

ただの幼馴染の友達の間までいるなんて。

遅かれ早かれ私は自分の心を持って余すことになっただろう。
報われることのない恋心のために。

私は、まるで獣が叫ぶかのように泣いた。

家に居たお母さんが驚いて部屋に飛び込んできた。

最初はしきりに理由を聞き出そうとしていたけれど、私は答えられなかった。

首を横に振っては泣き続ける私の隣に座ったお母さんは子供の頃と同じようにそっと抱き寄せ、背中を撫でてくれた。

一体どれだけの時間そうしていたのか分からないけど。

気付いたらお母さんはいなくて、ベッドで目覚めた。

辺りは真っ暗だった。

高校の入学祝にもらった大好きなキャラクターのデジタルウォッチを見ると、" 21 : 09 " の数字が光っていた。

今日は大晦日。

みんな年越しそば、食べ終わってるかなあ？

今頃家族全員がリビングに集まって、テレビを見ているに違いない。姪っ子や甥っ子はもう寝てるかも。

今日はお義姉さんたちと一緒に何とかレンジャーショーにおおはしやぎで出かけて行っただし。

突然、暗闇にひとりぽつんとしているのが無性に寂しくて、怖くなつた。

腫れぼつたくて熱っぽい眼のままのろろと起きて、そろりそろりと階段を降りていった。

リビングに続く扉のガラスからこぼれる光と賑やかなテレビの音を聞いたら、じわりと涙がにじんだ。

リビングの扉をそろりと開けると、そこに居たみんなの目が一斉に私に向いた。

案の定ちびちゃんたちはいなくて、お父さんとお母さん、だい兄ちゃんとかい兄ちゃん、お義姉さんの実夏さんと三波さんがコタツを囲んでいる。

いつもと変わらない、生活のひとコマ。
ぽたぽたと涙が零れ落ちた。

「…瞳、これからおそば食べるところだったの。あなたも食べなさい」

お母さんが何事もなかったかのように、でもちゃんとわかってるんだよって優しい声で言った。

涙で滲んだ先には見慣れた顔が優しく微笑んでいて、ちゃんと私の場所を空けて待っていてくれた。

お父さんが「こっちに着て座りなさい。冷えるぞ」なんて咳払いしながら言った

私は飛び込むようにお決まりの場所を陣取り、コタツに顔を伏せた。とたんにだい兄ちゃんとちい兄ちゃんの大きな手が、頭をグリグリと乱暴に撫でた。

誰も何も聞かない。

けど、私の心をちゃんと受け止め、理解してくれている。

改めて家族からどれほど愛されているのかを思い、また涙が溢れてきた。

15分後。

お笑い番組の笑い声に混じって私の鼻をすする音が響くりビングで、みんなで一緒に年越しそばを食べた。

富樫君のことを思い出すと苦しくてたまらないけど、家族の温もりを感じるだけで心があつたかくなった。

泣きすぎて腫れぼったい眼のまま、新年を迎えた。

新しい年の初めとしてはどうかとも思うけど、長い人生の間こんな年の始まりもあるものかもしれない。

案外、去年末に全ての涙を流したから、今年はいいい事がたくさん待ってるかもしれない。

そうだ！

きっとそうに違いない！

…とりあえず、そう思うことにした。

お正月は遅くに起きてきて、みんなでお節とお雑煮を食べた。

可愛い姪っ子甥っ子達にお年玉を上げると、おおはしゃぎで飛び回っていた。

ほほえましい光景に硬くなった心が柔らかくなる。

午後はだい兄ちゃん一家とちい兄ちゃん一家と一緒に、少し遠い神社に初詣に行ってきた。

たくさん出店が出ていて、参道はとても賑やかだった。

1時間近く並んだ後ようやくお参りを済ませ、子供たちと一緒にりんご飴を食べた。

迎春ムードが暗く翳った心を清めてくれたような気がした。

それ以外、三が日は家の中でテレビを見ながらごろごろしていた。

完全寝正月モードだ。

たまにお母さんに嫌みったらしくお尻をこつんと蹴られたりしたけれど、コタツに居座ったままぼんやりしていた。

いいんだ。

5日から仕事だし。

ここから離れたら、ちゃんと現実に立ち向かわなきゃいけないんだもん。

お正月休みぐらい、現実逃避していたい。

お母さんがブツブツ言いながらも入れてくれたコーヒをすすりつつ、ため息をついた。

1月4日。

自営業を営む両親と両親の仕事を手伝っているだい兄ちゃんは、朝からお店と事務所で忙しそうに働いていた。

お父さんが趣味が高じて脱サラして始めた、アウトドア専門店だ。アウトドアグッズだけにとどまらずお母さんが仕切っているカフェも隣接していて、ダッチオーブンやアウトドア気分が味わえる料理なんかを出している。

中でも、お父さん特製の燻製を使ったオープンサンドが大人気だ。だい兄ちゃんはお父さんを手伝いつつ、インターネットショップを開いたりしてお店を大きくしていた。

お店の事はあんまり分らないけど、結構繁盛しているようだ。

お正月休みにも飽きた人たちがたくさんやってきて、繁忙ランチタイムに間に合うようにカフェのお手伝いに行くべく「よっこらしょ！」とすっかり重たくなったお尻を上げた時、家の電話が鳴った。電話の側には私しか居ないので、受話器に素直に手を伸ばした。

「もしもし、笹原です」

『ひとみいっ！！！あんたねえっ！！！……っざけんじゃねーよっ！！！！！！！』

耳の奥でキーン、と音がした。
怖い……真世……。

「あ、あの、あのね、あの……」

『何で携帯に何度電話してもメールしても無反応なわけ！？
私がどれだけ心配したことか……っ！！！！』

あ、そうだ。

私携帯の電源切りっぱなし……。

真世は昨夜合宿から帰って来たはずだから、きっと何度も連絡をくれたに違いない。

「……ごめん」

ぽつりと呟いてから、しばらくの沈黙。

真世が気持ちを落ち着けようと、深呼吸しているしているようだ。

『……で？何があったの？吐きな、全部、包み隠さず』

台詞に似合わぬ優しい声ですっかり気持ちがほぐれてしまった私は、泣きながらこれまでのことを真世に話した。

きっとしゃくりあげる音と混乱した内容で、話の半分は訳が分からなかっただろうに、それでも真世は

何も言わずに話を聴いてくれた。

『……辛かったわね』

全て話し終わった後、真世が言った。

その一言が温かすぎて、心がじんわりと痛んだ。

「…うん、辛かつ…た、の…」

納まりかけた涙が、さらに溢れ出した。

やっぱり持つべきものは親友だと、心から感謝した。

『アンタに何があつたのかも、アンタの気持ちも分かった。

明日、実家からそのまま出勤するんでしょ？』

「うん、その予定」

『だったら今はゆっくり休んで、気持ちを落ち着けなさい。

…ほんとは側に居たいんだけど…ごめん。

まさかこんなことになるなんて…ね』

「気にしないで？ね？だって、初めからわかってたことなのに、

私が勝手に突っ走ったから…」

『馬鹿ね。アンタは一つも悪くないわよ。気に病むことなんて一つもないのよ。』

もつと堂々としてなさい！

アンタはとにかく自分に自信がなさ過ぎるのよ！』

「…ごめんなさい」

『はあ…もう、謝らなくていいことで謝ってばかりね！瞳らしいけどさ。』

明日仕事終わってから、時間空けてなさいよ？

駅前にあるスタバに集合。わかった？』

「…わかった」

受話器を置いて、はあとため息をついた。

怒ってたなあ…真世。

きつと往生際悪く足掻いてる私に呆れてるんだろっなあ。

明日のお説教は長くなるかも。

でも長すぎるほど長いお説教の後は、不思議と心が穏やかになる。
それがわかってるから、早く明日にならないかなって願ってる。

真世の顔が見たい。

いつもの呆れかえった口調で「全くアンタって子は…」なんて言う
て欲しい。

そしたらきつと、いまよりもずっと笑いたくなるに違いないから。

私はお母さんのカフェのロゴが入ったエプロンを手にとって、のろ
のろと歩き出した。

初出勤の社内は、どことなく迎春モードで浮かれ調子だった。

事務所のあちこちに鏡餅が飾られ、花瓶の花も松やら葉牡丹が入っ
ためちやくちゃ豪華なものに変わっていた。

正月ボケが抜け切れないのか、長いお休みの後の出勤のせいで慌し

い営業さん以外は全体的にのろのろと時間が進んでいる感じ。

それでも時間が進んで、あっという間に就業時間。

バブル期に作ったであろうまるで応援歌のような社歌が流れた瞬間、事務方の女性陣は一斉に片づけを始め、飲み会は最高のコミュニケーションと信じて疑わないおじ様連中は若い営業君たちを引きずり込んで隠し持っていたビールの缶を開けていた。

すっかり部長に引つかからないようにと、更衣室に足早に向かう女性に混じって逃げるように事務所を後にした。

17時30分。

かなり早い時間だ。

真世はきつと休み明けの注文をさばかなきゃいけないから、スタバにたどり着くまでもう少し時間がかかるに違いない。

とりあえず大好きなカフェラテでも飲みながら、のんびり本を読むことにしよう。

すっかりつまらないことを思い出したら、ひとりでめそめそ泣いてしまいそうだし。

実際、今日一日、ふとした瞬間にいろんな感情が蘇ってきて、その度に目がちくちくして喉が潰れたように痛くなった。

一生分の瞬きして、深呼吸して、お茶を飲んで、何とか乗り切った。……お陰で何度もトイレに通う羽目になった。

きつとおせち料理食べ過ぎて、おなか壊してるんだって思われたに違いない。

スタバについて店内を見回しても、案の定真世の姿はなかった。時間が早かったからか、二人用の窓際のテーブル席が確保できた。

予定通りカフェラテと、ついでにレモンケーキも注文した。

夕食前にケーキは…とも思わなくもないけど、年末からこちら食欲がなくてろくに食べてなかったせいか、甘いものが恋しくて仕方なかった。

お行儀悪く文庫本を片手に持ち、ちびちびとケーキを食べ、時々ラテを啜った。

目が疲れてきたので本を閉じ、ぼんやりと窓の外を眺めた。

クリスマスイルミネーション以来そのまま電飾されている街路樹が、白と青のライトで輝いていた。

店先やビルの入り口に門松やしめ縄が飾られるだけでお正月モードになるんだからたいしたもんだ、などと、本当にどうでもいいようなことを考えた。

もうすぐ18時半。

もう30分以上ここに居る。

店内に空席は無くなり、おしゃべりの声がざわざわとかがやがやかという音になって低く響いていた。

人恋しい今、この音がしんみりと心に沁みる。

今は一人で居たくない。

人の気配が欲しかった。

頬杖を付いて半分だけ残っているケーキを眺めてから、そっと目を閉じた。

驚くほどたくさんの雑音が耳に流れこんできた。

目を閉じたまま雑音に耳を澄ましているうち、なんとなく惨めな気持ち湧きあがり、心がしくしく痛んだ。

女性の笑い声がある。

甘く誘うような、媚びるような弾むような。

きっと恋人と肩を寄せ合って笑っているんだろうな。

がつん、とハンマーで殴られたように頭が重く、痛かった。

たくさんの人がいるのに、人の気配がたくさんあるのに。

私は一人ぼっちだ。

25年間、ずっとずっと、馬鹿みたいに一つの想いに囚われたまま
で。

どこかで期待していた。

富樫君と再会して、そこから恋が始まるんだって。

そんなマンガみたいにうまくいくわけがないのに。

今度こそ。

今度こそ真世に体中の毒を全部吐き出して、それから新しい一歩を
踏み出そう。

素敵な恋をしたい。

お互いに想い合い、尊敬し合えるような恋。

一緒に笑って泣いて、時には喧嘩して仲直り出来る、心が感じた時
に、「大好き！」って笑いながら伝えられる相手を探そう。

そう決心した時。

私に誰かが近づいてくる気配を感じた。

真世が来たのかと思って目を開けたと同時に飛び込んできた人物は、さも当たり前のように私の前の席にどかりと使い込まれた大きな黒いカバンを下ろした。

そして私は、同じ人物に目を見開きあんぐりと口をあけた馬鹿面を晒すことになった。

真世ではなかったその人物は、富樫君、その人だった。

「…ちょっとオレ、コーヒー買ってくる」

そう告げてふいと行ってしまった富樫君の後姿をただ呆然と眺めた。

…なんで？

…真世は？

…どして？

いろんな疑問がぐるぐるぐるぐる頭の中を駆け回った。

1週間以上ぶりにあった彼は、どことなくやつれていた。

お正月の挨拶周りが大変だったのだろうか？

…もしかしたら、結婚式の準備とか、そういうのだったのかもしれない。

結婚話が本格化したんだったら、富樫君の家みたいな格式ある大きなおうちはずかしくなることだろう。

心臓をぐにゅりと捻り潰されたような気分だった。

このまま何も言わずに立ち去るのが一番いいのかもしれない。
…と思うものの、店を出ようとすれば富樫君のそばを通る事は避けられない。

なんせ出入り口はカウンターの前一つだけ。

ここに来たと言う事は、きっと私に何らかの話があるに違いない。
だから逃げたらきつと引き止められるだろう。

木本さんから話を聞いて、改めて説明しようとしてくれているのかもしれない。

私の妄想と現実との差について。

だとしたら、罪な優しさってもんだと思う。

無視してくれたらいいのに。

惨めな思いはもう十分味わった。

重いため息をついてぬるくなったカフェラテをちびりと飲んだ。
緊張で口の中がべたべたする。

もう一口ごくりと飲み込んだ時、富樫君がカップを持って戻ってきた。

どうやら本日のコーヒーを選んだ模様。

ブラックコーヒーの色は彼のイメージにぴったりだ。

一見真っ黒に見えて、その実深くて複雑で、きれいだ。

正面に彼がいる事が気まずくて、視線をテーブルに落とした。

彼と同じく浮かんで空気を吸っているだけで、なんだか居心地が悪い。

悪いことを悪いとわかってやってる小学生みたいな気分。

思い切っておそろおそろ顔を上げてみると、不機嫌そうにむっつりと唇を結んでいる顔が見えた。

しかも唇の端は切れてるし、頬の辺りが何となく赤黒く腫れている。

「どっ、どうしたのっ！？怪我してるよ？」

驚いて立ち上がりテーブルに身をのりだすと、真直ぐ彼に手を伸ばした。

痛そうな唇：触れるのが怖くて、ぴくんと身をひいてしまった。

富樫君がわずかに顎に力を入れた。

：また嫌な思いさせちゃったのかな？
再びドツボにはまった。

のろのろと手を引っ込めようとしたら、突然がしつと手を握られた。
温かそうに見えた大きな手は、以外にも冷たかった。

「この怪我は……大丈夫、たいしたことないんだ。
むしろ必要だったし、受けて当然の報いだ。
だから、おまえが気に病むことなんて何もない」

私の目を真直ぐに見つめ、真剣に話をしている富樫君。顔がぱつと赤らみ、心臓がバコバコと激しく動いた。

私の無に等しい恋愛遍歴を暴露するかのような反応に触発されたのか、富樫君の頬もほんのり赤く染まった。

…びっくり。

大人っぽい富樫君が、急に少年のように見えた。

「…ま、その、なんだ…今日はおまえに話があつて。

それで、この時間を杉田に譲ってもらったんだ。

こんなところでじゃなくてもっとゆっくり話したいから、

これからメシでも食いに行かぬーか？

今度はオレのオススメの店に…もちろん、おまえが嫌じゃなかったら、

だけどさ…」

歯切れの悪い富樫君。

いつも自信満々で堂々としているのに…。

なんだか見慣れないせいかな、こっちまでそわそわしてきた。

でも、いいのかな？

お食事なんて。

一瞬の逡巡後、木本さんの言葉が頭にぱつと浮かんだ。

ダメダメ！

引きずられてばかりじゃん！

こんなことじゃ、ずっと未練タラタラで生きてかなきゃいけないやつちゃう！

誘惑に負ける一歩手前で立ち直りお断りの言葉を口にしようと小さく息を吸い込んだ時、慌てて富樫君が遮った。

「おまえがなんと言おうと、メシ食いに行くのは決定事項だから。

さっさとそのケーキ食っちゃえ」

：私が嫌じゃなければとかなんとかって選択の余地のあるような言葉は、一体なんだったんだろう？

手のひらを返したかのように強引になったのは、なぜ？

頭を捻ってみるものの、何にも浮かぶはずが無い。

ここで一つ二つ理由に思い当たれるぐらいなら、こんなに不器用な生き方はしてないのだ。

優柔不断は昔から専売特許だった私は、うつかりこくと頷いて残りのケーキに取り掛かった。

目の前では富樫君が難しい顔をしてコーヒーを飲んでいる。
眉間に皺寄ってもカッコいいなあ…。

こんな時にも見とれている私は、究極のお馬鹿さんだ。
そのせいでぴったりと私の動きだけが止まっていたようだ。
何かに強烈に惹きつけられているのと同時に別の事が出来るほど、
器用な人間じゃないわけで……

結局、5分後には店を後にしていた。

右手首をしっかりと彼に握られた状態で、必死になって歩いている。

まるで”ドナドナ”で歌われている子牛のよう。
別に売られるわけじゃないけどさ。

食べることを停止しつつある私に業を煮やした彼は、私から奪った
フォークで残ったケーキをぐさりと刺し、一口で食べてしまった。
あっという間の出来事だった。

啞然としている隙に、あっさり彼に右手を拘束されていた。
スタバを出たら有無を言わず帰宅！…を計画していたというのに。
所詮私が立てた予定など、昔からうまくいったためしがないのだ。

私よりも半歩先を歩く富樫君の横顔を見ても、彼の心は覗けなかった。

今どんな気持ちでいるんだろう？
なんで私なんかに構うんだろう？
木本さんとの結婚する予定なのに、なんで？
木本さんに誠実であることとこうして私を連れて歩く事は、富樫君
の中では両立してるの？

…私のこと、どう想ってるの……？

たくさんの質問が浮かんでは消え、消えては浮かんだ。

駅の改札を通り抜け、電車に乗った。
新年初出勤を終えて帰る人たちで混雑している電車の中では、まるで頑強な壁のようになって私を守ってくれた。

電車独特の臭いの中にも、富樫君の男らしい香りが漂ってくる。
わずかに残っている洗濯した後の清潔感のある匂いや、富樫君がつけている甘めの香水の香りよりもずっとずっと強烈に私にアプローチをしかけてくるみたいに。

…私、欲求不満？

自らの欲求を不満に思うほどの経験は無いんだけどなあ。

近すぎるぐらいに近い2人の距離。
すぐドキドキして胸が疼いているのに、なぜかとても安心できた。

富樫君の全てが心地よくて、離れたくなってくる。

優しい人。

優しくて、罪作りな人。

勘違いしそうになる馬鹿な女の子のことなんて、ちっとも考えたくないくせに。

降りたのは、彼と再会した映画館がある大きな駅。
彼はよどみない足取りで歩いていった。

いつの間にか、指を絡め、手のひらをぴったりとくっつけるように手を繋いでた。
まるで恋人同士みたいに。

「…ねえ、富樫君、どこに……」
一言も話をしない彼に、堪えきれずに話しかけた時。

鈴のように高らかな声が響いた。

「雄大君っ！」

お砂糖たっぷりのミルクみたいに甘い声。
間違えようもなく、木本さんだった。

どきん！と心臓が跳ねた後、頭天边からさっと血の気が引いた。

緊張しすぎて気分が悪い。

この状況を彼女にどう説明すればいいんだろう？

私の人生において、こんな修羅場に身を置くことなど想定外だ。

とにかく誤解の無いようにしたい。

慌てた私はしっかりとつながれていた手を解くべく引っ込めようと努力した。

けれど、何を思ったのか、富樫君は反対にぐっと力を入れて私の手を離そうとしない。

パニックに陥っている私を他所に、富樫君はとっても冷静だった。心もち、目が厳しい。

そんな彼に気付かないのか、木本さんは困ったように眉を寄せて、お色気たっぷりすぎるような瞳で彼だけを見つめた。

もちろん、繋がれた手に気付いた瞬間怒りが燃え上がり、私をギリと睨みつけてきた。

当然の反応だと思うけど、怖い。

「ねえ…雄大君…今日は私…すっごく嫌な事があって…どうしても雄大君にお話聞いてもらいたくて…」。

そうしてもらえなきゃ、私、立ち直れそうに無いの…苦しくて。

お願い。いつものお店で相談に乗ってくれない？ね？いいでしょ？」

富樫君の正面に移動した彼女は、女性的で甘く優美な仕草で彼の胸の上に指を這わせた。

あの天使のように愛くるしい木本さんが、富樫君の前ではこんなにも艶やかに微笑むんだ…。

2人の親密さを見せ付けられたような気がして、がん、と金槌で殴られたような気分になった。

部外者丸出しの私は、おそろおそろ2人の様子を交互に観察した。

女の私でも見惚れる彼女の表情を見た途端、富樫君は心底嫌そうな顔でため息をついた。

……なんで？

今日最大の謎が目の前に展開していた。

「やめてくれ」

感情を抑えようとして失敗した低く響く声で、富樫君は胸に置かれた華奢な手を払いのけた。
木本さんが息を呑んだ。

「俺は、コイツと結婚を前提に付き合ってたんだ。誰にも邪魔はさせない」

「な…っ、なんですって!？」

驚いた木本さんは、ぎゃつと叫ぶように言った。
信じられない、と顔に描いてあった。

それは私も同じだ。

きつと彼女以上にびっくり顔だろう。

きっぱりと言い切った彼は男らしかった。
けれど、内容がいただけない。

富樫君は木本さんと婚約しているはず。
私のこと迷惑だって思ってたはず。
なにより、そんな話聞いてないっつーの。
っていうか、付き合ってもいなければ、彼の私に対する気持ちを聞いたことすらない。

頭がずきずきと痛み始めた。
天地がひっくり返りそうとはこういうことをいうのだろうなあと、
まるで人事のように考えた。

「何言ってるの！？正気なの！？こんな女とっ！？」

正直すぎる木本さんの台詞に、私も心の中で大きく頷いた。
そうそう、私なんて誰からも覚えられていない、超・地味キャラなの
だ。

わかつちやいるけど…かなり傷ついたんですが。

木本さんにぶつたぎられた傷がずきずき疼いて心が麻痺しそうな私。
そんな状態なのに、悲鳴を上げてしまいそうなほど、おどろおどろ
しい富樫君の低音が響いた。
超ホラー。

「綾…今すぐ彼女に謝れ。そしたら君のその失礼な態度もなかった
ことにしよう」

コワイ…っ！！

たちまちびびってしまった、チキンな私。

対してさすがの木本さんは、一瞬鋭く刺すような視線で私を見て、ふんと鼻で笑った後

くるりと大きな瞳をさらに大きく見開いてから、媚びるように富樫君を見つめてため息をついた。

「…ごめんなさい。でもそれは、雄大君が悪いのよ？」

だって、おじさまもおばさまも私がお嫁に来るのを楽しみにしてるって

仰って下さってたのに、

突然結婚を前提にしたお付き合いをしてる人が居るなんて…」

「楽しみにしてると言ったのは君のご両親であって、俺の両親じゃない。」

俺の父も母もちゃんと俺の意思を尊重してくれている。

なにより、俺は君と将来を誓い合ったことなど一度も無い」

「私のことっ！好きって言うてくれたじゃないっ！」

「それはガキの頃の話だろ？大体、君はずっと兄貴に夢中だったじゃないか。」

それに、子供のおままごとのような話を今まで信じているほど、俺たちの仲が幼馴染以上に発展したことなど

過去一度も無いじゃないか。…そうだろ？」

「……っ！それはっ！…雄大君が、私のこと大切にしてくれて…」

「大切？危険のないように処理してたって言う方が近い。」

そう思うだろ？」

悔しそうに唇を噛んだ木本さん…やっぱり本気で怖い。

彼女の中にある女のドロドロした感情を初めて見たような気がする。

どうにかこの場を治めなきゃ…と思うけど、こんなシュチュエーシ

ヨン初体験の私はオロオロするだけで、何の助けにもなりそうに無い。

…ってか、まるっきり役立たずだ。

逃げたい。

「ね、あの、2人とも、ちょっと落ち着いて…人目もあることだし、ね？」

ありったけの勇気を出して、ありきたりな言葉をかけてみる。
引きつる口角を必死になんてあげて。

風水的にもスピリチュアル的にも、口角上げるって幸せ寄ってくるのに有効だって！

ビバ・平和。

けどこれが逆効果だったみたいで、木本さんがギツと怒り倍増の顔で睨みつけてきた。

ヒイイッ！！

びくびくつと震えると富樫君が繋いでいる手に力を入れ、私を引っ張るようにすたすた歩き出した。

「…話はあるで。確かにここじゃ、悪目立ちだ」

これでちよっとは安心できそうだ。

地味に生きてきた身だから、人に注目されるのには慣れてないというか…苦手だし。

…って、逃げ損ねた。

「それじゃ、後は二人で…」って言うつもりだったのに。

好奇の視線に晒されていた場所から移動した先は、海が一望できる広場。

ぼつりぼつりとカップルがいるけれど、プライバシーは保たれそうなほど人気がない。

一定の間隔で置かれたベンチが、やや薄暗いロマンティックな街灯と温かみのある色の照明に照らされている。

きりりとした冬のきれいな空気に、息を呑むほどに美しく輝く夜景。こんな状況でなければ、絶対に感動で目がうるうるしてたことだろう。

…何でこんなことになってしまったんだろう？

海を背にしてくると振り向いた木本さんは、真直ぐに私の目を見た。

輪郭が夜景に光り、顔が陰になっているのが何とも迫力満点だ。

美人は怒るとそうでない人よりも余計に怖いような気がする。

「…あなたの目当てはなんなの？財産？それとも、雄大君の容姿に

釣られたの？

善人面で私は何も知りませんって態度で、ほんっと、頭にくるわ！
いやらしい、最低の女ね！」

「綾！いい加減にしろ！」

「だってっ！私、雄大君だけなのに…っ！

絶対にこの女、雄大君のおうちがお金持ちだから近づいただけの女よ？

これまでずっとそんな女を軽蔑して、距離を置いたり切ったりしてきたじゃないの！」

富樫君の何かがぶちっと切れた音が聞こえたような気がした。
全身から恐ろしげな怒気が立ち上っているのは、錯覚？

目が怒りでぎらぎらしているところを見ると、外れてなくも無い…
のかもしれない。

口の端を上げて笑っているように見えるけど、目がちっとも笑っていない。

富樫君、お願いだからこれ以上木本さんの神経逆なでないで…。

しかし、こういう願いは得てして届かないものだったりする。

「…だから、君とも距離を置いたんじゃないか」

「…え…？」

「だから、俺が何も知らないと思ったら大間違いだってことだよ。
君の交友関係についてはおおよそ把握しているつもりだし？」

「…何のこと？」

「俺の両親や親戚が持っている財産や地位を狙っている女をリストアップしろと」

言われたら、俺は真っ先に君の名前を書くよ。

それについては、反論の余地なし、だろ？」

「そんなんっ！」

「それに、俺が結婚を急ぎたいと思うほどに惚れ込んでいるのは、君じゃなくて瞳だ。

俺が選んだ相手に何故ケチをつける？君に決定権などないのに」「私はっ！雄大君のことを考えてっっ！」

ヒステリックな叫びを片手を上げることで制した富樫君は、冷やかな声で静かに告げた。

「俺の気持ちを考えてくれると言うなら…今すぐどこかに行つてくれ。

そしてもう二度とこんなことで俺たちを煩わせないでくれ。

俺が穏やかに話をしているのは、単に家族や瞳のことを考えてのことだ。

くだらない自分本位な理由でオレの大切な人たちを苦しめるのであれば、

誰であろうと許さない。

親父と君の父親の関係がなければ、俺はこれまで言い寄ってきた女たちと

同じように君を切ると断言するよ。

これ以上、どういえばわかってもらえるんだ？」

ショックで青ざめた木本さんは口元を手で押さえ、よろよろと後ずさった。

ぶるぶる震える両手で持っていたバッグをきつく握り締めると、思

いきなり振り上げて街灯を殴りつけた。
それから高いヒールの音を響かせながら、駅に向かって走っていった。

彼女には街灯が私に見えたことだろう。

木本さんから向けられた怨念じみた感情に背中がひやりとして、胃がムカついた。

やばい…吐きそう…。

私はその場に座り込んだ。

「おい！大丈夫か！？」

富樫君の慌てた声が耳のすぐ側で聞こえた。

さっきとは全然違う、本気で心配している声…。

富樫君の大きな手のひらが私の両頬を覆った。

その温もりに緊張で固まった心がずっと柔らかくなった。

途端、目の奥が熱くなり、意に反して涙がどつと溢れた。

緊張の糸が切れたとは、こういう状態のことを言うのだろう。

喉の奥に大きな塊が出来たようで、声が出ない。

「…怖がらせて、悪かった。

こんなことになるなんて、思ってもみなかったんだ…許してくれ」

彼の柔らかい唇が私の額に小さな音を立てた。
それから溢れ出した涙をすくい上げるように、目じりに向かって私の頬に唇を這わせた。

突然過ぎる展開に驚いた私は、ひゅつと息を吸い込んだ。
もちろん、涙はぴったりと止まった。

両頬を同じように唇で撫で上げた後、かちこんと硬直した私に気付いた富樫君は
最後に額にキスをしてから唇を離し、私の目を覗き込んでくすりと笑った。

顔が熱い。
きっと体中が真っ赤になっているに違いない。
この寒い季節だったのに、耳だって熱いもん。

富樫君がくれた恥ずかしくもうれしいような甘ったるい沈黙の間、これまでの人生であり得なかった経験について思い返すことが出来た。

…確か、結婚を前提に付き合ってるって、言ってたよね？
…私のこと、好きってこと？
惚れ込んでるって…言ってくれたよね？

やっぱり、その場限りの言い逃れ…？

頭が情報処理に付いていけなくて、ぽくっとなぐり君を見つめ返した。

と、偉く真剣な顔になったなぐり君の顔が徐々に近づいてきて、彼の唇が一度、私の唇にやさしく触れた。

この年でファースト・キス……他人の唇がこれほどまでに柔らかいとは思ってもみなかった。

…なんてことをぼんやりと考えていると、突然ぐっと抱き寄せられ、もう一度唇をふさがれた。

さつきとは全然違う、荒々しくて生々しいキス。

こんなの、初めてだった。

苦しくなって薄く開けた唇の間から、彼の舌がぬるりと入り込んでくる。

しばらく中を探っていたと思ったら、突然私の舌を弄ぶように絡み付いてきた。

口内を縦横無尽に味わいつくそうとする舌はかなり強引で、恋愛初心者の私があっけなく無防備で無力な抜け殻になってしまっているうちに、唇を舌先で舐められ吸い上げられた。

苦しくなって一度話された口を開いて深呼吸すると、再び唇を押し付けられ舌が挿しこまれた。

口内を我が物顔で動き回る舌の動きに翻弄され、身体の奥から不思議な熱が生まれてきた。

感情が焼け焦げてしまいそうな、切ない気持ち。

何かが足りない、けどその正体が分からない。

もどかしい気持ちに後押しされて、必死になって絡み付いてくる彼の舌の動きをぎこちなく辿った。

富樫君の両手が私のお尻を包み、ぎゅっと鷺掴みにした。

これ以上はと思っていた2人の距離が、驚くべきことに更に縮んだ。両足の付け根に何やら堅いものが押し付けられ、それが刺激となつてさらに心臓がばくばくと全力で動き、下腹がぎゅっと切なげに疼く。

自分が自分ではなくなっていく、コントロール不可能な状態。

生まれて初めての感覚が急に怖くなって、私は富樫君の背中をぎゅっと握り締めた。

いつ終わるとも知れないほど長いキスは、余韻を残したままゆつくりと終わった。

大人なキスは恋愛初心者にとって高度すぎる技だという事を身をもつて理解した。

こんなで怯んでたら、きっと真世が楽しみにしている”ホットな週末”など、私にはしばらく無理！だろう。

すっかりがくがくと震えている膝を支えるように、富樫君の胸に頬を寄せて落ち着こうとした。

あれだけ緊張してたのに、彼の体温と吐息を感じるだけで安心できるなんて不思議だ。

「…なあ、瞳、結婚しょ？」

うつとりと彼の胸に甘えていると、彼の口からぼろりと落ちた一言。私は驚きのあまり目を見開いて、富樫君を凝視した。

え？なんで？

「俺、やっぱりオマエと居るとすっげえくつろげる。

素のままの俺を見ても本音言っても、自然に受け入れてくれるお前が

生涯必要だって、わかったんだ。

中学校の頃から俺を見捨てず、想っていてくれてたことがうれしかった。

…それが分かった時、もう気持ちが止まらなくなっただんだよ」

「でも、結婚って…富樫君、後悔しないの？」

「ああ？何で後悔？」

ここで結婚しなきゃ、それこそ後悔してもしきれねえよ。

俺だって人生の中でいろいろなことを学んできたんだ。

だからこそ、お前が必要なんだと確信したんだ。

お前だって俺のこと想ってくれてるって言ってただろ？」

「けど！けど…全然違うじゃない…」

なんだかがつくりと肩が落ちた。

…必要だから結婚する。

それはお互いの愛情を「好き」から「愛してる」になるまで深めて初めて成り立つんじゃないかな？

私は富樫君のこと、一生を共にしたいと思うぐらいに愛してる。

でも富樫君は？

これまで登場しなかった毛色の変った女に対する好奇心と愛情を取り違えたりしてない？

…なんて、これは逃げ口上。

ホントは、彼の本当の気持ちが見えないのが不安なんだ。

私のこと、愛してくれてるの？

「だって、結婚するって事はお互いに…」

「ストップ！」

「でも、これは…っ！」

「だから聞けって！」

打算や妥協で結婚するんじゃないんだ。

…俺はお前が好きだ。愛してる。

これからは毎日一緒に夜を過ごし、朝を迎えよう」

真直ぐに私の心に向けられた、真剣な瞳。

富樫君は、私のこと、本気の本気で想ってくれてるんだ…。

ようやく私は何の疑いもなく確信できた。

瞬間、私の心の中からたくさん色とりどりの花があふれ出したように気がした。

怖いぐらいに幸せで、胸がきゅんきゅんと痛んだ。

頬が熱くなり、止まっただけの涙が再び溢れた。

「…泣きすぎ」

優しい、優しい声で囁いた富樫君は、ぎゅっと力を込めて私を抱きしめた。

ちよっと痛かったけど、その痛みがうれしかった。

私と同じぐらいのスピードで打つ富樫君の鼓動が心地よかった。
私よりもずっと硬い富樫君の胸にほお擦りし、ぎゅっと彼の背中を
抱きしめた。

いつまでも味わっていたい、癖になりそうな温かさ。

中学生の時に夢中になった、あの少女漫画。

もう一度読んでみたいなあ……なんてぼんやり考えていたら、富樫君
が頭のとっぺんに小さな音を立ててキスした。

うれしくて、うれしくて。

涙でぐちゃぐちゃで顔が見れる状態ではないことも忘れ、彼の顔を
見上げてにっこりと笑って言った。

「私もね、富樫君のこと、愛してるの！」
「知ってる」

偶然なのか必然なのか、富樫君の答えはあのマンガのラストシーン
と同じだった。

そしてその後は……

夢にまで見たハッピー・エンディングがあった。

< 完 >

16（後書き）

瞳視点はこれで終わりです。

この後、富樫君視点のお話となります。

『女は欲深き魔物である』

俺の初恋がただの幻想で、恋愛に対して純粹だった自分が砕け散った時、悟ったことの一つ。

最初に感じたのは、深い失望、絶望。
愕然としたってやつだ。

時間の経過と共に、これらの感情は怒り、哀れみ、不信感へと変化を遂げることとなった。

そのうち、そういった類の女ばかりが俺の周りを取り囲んでいることに気付き、その数と比例して自分が女嫌いになっていくことは、もはや止めようもなかった。

もちろん、野性的な欲求を満たすために利用はさせてもらう。

女の虚栄心と性的欲求を満たしてやっているんだから、当然の報酬だと考えている。

けれど、ただ、それだけ。

手玉に取られないように、用心に用心を重ねて一時的な交際相手を選ぶ術を身に付けた。

駆け引きのスリルを楽しむ余裕すら出来た。

後腐れのない関係と潔い絶縁。

お陰で精神衛生上非常に健全な男子一般に付いてまわる欲望に悩まされることもなく、人生を謳歌している。

あしらい方もうまくなり、一方で本当の意味での恋愛と言うものにはほとんど縁がなくなってしまった。

けれど、そんな事は痛手でも何でもない。

学生の時には勉強や部活、社会と関わるようになってからは仕事が俺の人生の華となってくれたのだから。

そう、俺はポーカーフェイスのプレイボーイで極度の女性不信男へと成長を遂げ、現在に至るわけだ。

女なんて真っ平だ。

恋愛、結婚、ちゃんちゃらおかしい。

一生涯を伴に出来そうに見える女でも、何十個仮面を被っているのかわからないんだから。

厚化粧と同じだ。

セックスしてシャワーを浴びて、クレンジングクリームで丁寧に擦り落したら、もう誰か分からない。

外面と内面の美しさをまとめて洗い流してしまったかのような。

そういや、一緒にシャワーを浴びてたら、上がる頃には眉毛が消滅している女もいたっけ？

今じゃ滑稽だとしか感じないが、初めて見たときは心底驚いたものだ。

指差して笑うことも出来ないなんて、拷問に等しかった。

そんな女にうつかり首に縄でもかけられたら、それこそ一大事だ。

傲慢じゃないが、これほど屈折した思考にとり付かれていても、過去恨まれるような別れ方をしたことなど一度も無い。

女の恐ろしさ、怨念深さは十分に承知している。

ごねられてもどうにかできないわけではないだろうが、どうにかする時間さえ割くのも疎ましい。

” 必ず抜け道は作っておくこと ”

女と後腐れなく付き合うための鉄則だ。

これは社会の一員として人間関係だけではなく、あらゆることに通じる言葉だ。

道が一つしかなければ、逃げたくても一歩下がりがたくても迂回したくても追い詰められるだけだ。

お陰で社会人として必要な社交術や読心術も自然と身についた。

どんなに最悪なことからでも、その気になれば学ばべきところは多いという事の証明かもしれない。

言っておくが、もともとこんな性格に生まれついたわけではない。あくまでも手痛い経験から学んだ結果なのであって、真の鬼畜というわけではないのだ。

女性に対して偏見にも似た歪んだ分析をするようになったのは、高校1年生の春のこと。

…今にして思えば、くだらない女に引つ掻き回される事もなく生きていくための礎となった、いい教訓といえなくもないが。

結果よければ全てよしとはいうものの、まだまだ子供だった俺にはあれは相当過酷な体験だった。

俺には赤ん坊の頃から仲の良かった幼馴染がいる。

彼女は木本綾。

オレよりも1つ年下で、父親同士が親友で家も近所だったため、長く家族ぐるみで付き合っている。

頻繁にうちに遊びに来ていた綾と俺は、5歳年上の兄・一はじめにいつも一緒に遊んでもらっていた。

守ってあげなくなるほど小さくかわいらしく、とにかく泣き虫だった綾のことを俺は小さい頃からずっと庇ってきた。

俺にとって、彼女は大切な存在だった。

その関係が変わってきたのは、一体いつの頃だったのか。

気付けば俺は綾のことを異性として意識するようになっていた。

はつきり綾への恋心を意識した6年生の夏。

今じゃ考えられないほど純真な恋。

最悪の初恋になるとは、この時夢にも思ってたなかった。

昔から、綾は兄貴に夢中だった。

綾が兄貴に惚れているのは知っていたし、綾の幸せを思えばこそ彼女に協力してやったりしていた。

綾に夢中だった頃、どれほど兄貴の事が好きかという話を綾から聞かされる事は、俺にとって拷問に近かった。

けれど必死になって歯を食いしばって、綾を励まし、支えてきた。

なのに、当の兄貴は暖簾に腕押し、ぬかに釘。

綾の気持ちには気付いているくせに、何食わぬ顔でかわし、知らん振りを決め込んでいた。

一見穏やかそうでいて、計算高い男。

間違いなく、兄貴は親父そっくりだった。

俺が中3の時、突然木本のおじさんとおばさんが綾を兄貴の婚約者にどうかと打診してきた。

さすがのうちの両親も、これには驚いたようだ。

当時綾は13歳、兄貴は18歳。

いくらなんでも早すぎるし、当人同士の気持ちもあるだろう、と。

そんな時、もの凄い剣幕でしゃしゃり出てきたのが、綾のお母さんだった。

まるで自分が結婚する気なんじゃないか？と疑いたくなるような熱心さに、はつきり言っとうちの家族全員が引いた。

正直な話、綾のお母さんだとはいえ、俺は小さい頃からこのおばさんが大嫌いだった。

化粧が濃く、身体の線がぴったりと張り付く服を好んで身に付け、

アクセサリーをジャラジャラ鳴らしていた。

およそ母親らしくない。

時折父を意味深に見つめる目線が何を意味するのか理解できるほど大きくなつた頃には、完全なる嫌悪の対象となつた。

俺は、こんなおばさんに育てられたにも拘らず素直で可愛い綾は、きっとあの穏やかで少々優柔不断な伯父さんに似たんだろうと分析していた。

あまりにしつこい申し出とあの手の作戦に完全に嫌気がさした兄貴は、“婚約はお互いに納得しないうちは結婚しない事”もしどちらかに好きな人が出来たらすっぱり別れる事”デート以外のことで干渉しないこと”などを条件に、綾と交際することになった。

それは俺にとって完全なる失恋を意味していた。

幸せそうに兄貴の腕に絡みつく綾を見て、胸が痛くてたまらなかつた。

何でこれほど綾のことを思っている俺じゃなく、渋々条件を飲んだ兄貴が相手なんだろう？

綾に対して当たり障りのない態度でしか接することの無い兄貴に、憤りすら覚えた。

全てが憂鬱で、何事に対しても熱意が持てなかつた。

それでも、学校にいる間はそんな気分も和らいだ。

友達と馬鹿騒ぎをしているのは楽しかったし、当時なにしろ受験生。両親の意向で中学校までは公立だった。

けれど将来に備えて高校はハイレベルな私立校への進学を目指していたため、毎日必死になって勉強していた。どうしようもないことに脳細胞を使わないように、別のことに酷使したわけだ。

お陰で希望校には無事合格。

その時、大学卒業後、親父の親戚一族が経営している”東洋印刷”に入社してくれないかと、父方のじーさんに頼まれた。

本社が大阪にあるわりと大きな会社で、東京の方での即戦力が欲しかったらしい。

高校生活が軌道に乗ってきたらアルバイト程度の仕事をし始め、大学入学と同時にさらに仕事の量を増やし、卒業後即戦力となるように育て上げたいとのことだった。

そのためには、好成绩で高校、大学を卒業する事が大前提。もちろん、俺はじーさんからの厳しい挑戦状を受け取った。目標は大きければ大きいほど俄然やる気になるってものだ。

公立組が必死になって受験勉強している中、俺はひたすら高校の予習と会社で必要な知識を詰め込むことに取り組んでいた。

綾のことを思うと胸が痛かったが、挑戦しがいのある明るい将来が見えたことで希望でいっぱいだった。

人生がゆつくりと大きく動き出そうとしていた、その時だった。これまでの人生の中で最も印象に残る告白をされたのは。

中学の卒業式でのことだった。

見た目が良かったらしく昔から女の子からの告白は途絶えた事がなかったが、これほどまでにインパクトの強い幕引きは初めてだった。

笹原瞳。

彼女はとにかくちまちまして可愛くて、酷く鈍感でお子様で天然だった。

何故か委員会やらなんやらで一緒に用事をする機会が多かったため、彼女を他の男たちよりも理解していたつもりだ。

そろそろ盛りが付きだした男たちから誘いを受けたりするものの、当の彼女は全く気付いていない。

ほややや〜んとしたオーラに毒と魂を抜かれた男の屍が、彼女の後ろに累々と積み上げられていった。

見ていてはらはらさせられる事が多かったせいか、とにかく保護欲を駆り立てられるやつだった。

そんな彼女の必死の想いを断るのは辛かったが、俺の心にはその時まだ綾が住みついていたのだから仕方がない。

出来るだけ彼女を傷つけないようにと言葉を選んで断った。

すると彼女はリスのように黒目がちな大きな瞳を潤ませて、言った。

「ねえ、お願い。」

もしね、もし、これから何年もたって偶然街中で会ったら…

その時は嘘でもいいから『きれいになったな、あの時振ったことを後悔するくらい』って言うてくれる…?」

きつと他の女だったら一笑したに違いない。
んな、こっばずかしいこと言えるかっ!と。

が、相手は天然お子様・笹原だ。

俺は苦笑交じりにその約束に同意することにした。

彼女とは高校が離れてしまうから、きっと滅多なことでは会う事はないだろう。

そういう姑息な計算も働いていた事是否めない。

彼女とはそれっきり、音信不通となった。

風の便りに彼女が卒業後静岡の方に引っ越したと聞いて、何故か酷くガッカリしたことを今でも覚えている。

そんな告白もすっかり記憶の奥底にしまいこみ、ようやく高校生活に慣れてきた1年生の晩夏。

綾から電話で兄貴に振られたと聞かされた。

兄貴に結婚したいほど好きな女が出来たというのだ。

俺は激怒して、兄貴を捕まえて怒鳴り散らした。

けれど兄貴は涼しい顔で俺の怒りを受け流し、言った。

「お前ね、外見や上っ面だけで判断してたら、いつか女に身包み剥がされるよ？」

お前は賢いんだから、ちゃんと見れば何が嘘で何が本当かよくわかるよ。

俺は心の声に従って、綾との関係をすっぱり切って彼女を選んだんだ。

オレの一生の伴侶は綾じゃなく、彼女だから」

兄貴が自分がもてる全てで彼女を愛しているのか、彼女と想いが通じてからまるつきり”大人の男”の顔になった兄貴を見てすぐに理解できた。

それでも納得できなかった。

俺がどんな思いで綾のことを忘れようと思ったのか、兄貴にはわからないんだ！と何度も怒りで頭が沸騰した。

高校の友達を心配させるほど、酷い態度だったらしい。分かっていても、どうしようもなかった。

”兄貴がそんなだったら、俺が綾を…っ！”

兄貴と喧嘩してから数日後、意を決した俺は綾に自分の想いを告げるため彼女の家に向かった。

途中、通りかかった近所の公園のベンチで、声高らかに話をする3人の女子中学生に目が向いた。

そのうちの一人は見間違えようもない、綾だった。

俺は彼女に声をかけようと、驚かせないようにベンチの背後からそっと近づいた。

そして決して立ち聞きするつもりはなかったけれど、結果的にそうなってしまい、兄貴が何を言いたかったのかはつきり理解できた。

「綾、どおすんのお？未来でつかいカフェチェーンのオーナー夫人に

納まるって言うてたじゃん！」

「うるさいっ！一君に本気の女が出来るなんて、考えたことなかったんだもんっ！」

「何をしくじったの？セックス？」

「やった後、他の男の名前でも呼んだんじゃないのぉ？」

「馬鹿っ！一君とは清い仲だったわよっ！」

「どれだけ誘っても、手のひとつも出してこないんだよ？」

「アンタ、よっぱど色気ないんじゃないのぉ？」

「ばっかじゃないの？」

私に色気がなかったら、アンタの男と寝る事だつてなかったわよ！あいつ、ちよつと胸見せたただけでけだものの様に襲ってきたわよ？」

「あんたねっ！…さいつてー…！」

「お互い様でしょ？」

「ほんと、頭にくるのはあの地味女よ！」

「どうやって一君を丸め込んだのかしら？夢の社長夫人がっ！」

「でも、まだ弟の方がいるじゃない。なんだっけ？雄大だっけ？」

「…ああ、あれはもう釣り上げて、養殖池に入れたようなもんよ。」

次男じゃ社長になてなれないしね、最悪の時の駒ね。

顔もスタイルも申し分ないし、性格も真面目そのものだし？

その上、私に一途だからね。」

親が死ねば財産が転がり込んでくるし、

満足いくまで遊んでから結婚してあげるつもり」

「悪い女々。最悪だね、綾は」

「あんたたちも似たようなもんじゃないの」

爽やかな青空と紅葉間近の公園によく響く、くすくすと無邪気な笑い声。

内容がイメージとあまりにかけ離れていたので、余計に恐ろしかった。

” そうか、俺はアイツの演技に騙されていたのか ”

綾が好きだったのは兄貴ではなく、今は親父が社長をしている県内に15店舗の支店を持つカフェの社長夫人の座と金だったんだ。

それに、贅沢な暮らしと羨望のまなざし。

小さい頃から兄はこのカフェの経営に興味を持っていた。

そりゃ、兄貴にしか靡かないだろうよ、当然。

俺は自分のうかつさ、人を見る目のなさ、ぼんくらさを心の中で詰った。

そして自分が綾の養殖池で泳ぐ一匹にされていたことに屈辱と怒りを感じた。

兄貴はきつとこんな綾の性格を見抜いていたに違いない。

けれど、家族や父の友人であるおじさんの立場を考え、うまく切り抜けていったのだ。

兄の言葉は正しかった。

ここで聞いた事は俺だけの胸にとどめておこう。

そしてこれからは綾をしっかりと観察し、その動向を逐一チェックしていくことにしよう。

” 俺をなめんじゃねーぞ！ ”

奥歯をぎりりとかみ締めて、俺はその場を後にした。
もちろん、心はぼろぼろだった。

公園での出来事があって以来、俺は適当に女をとつかえひつかえの生活を送るようになった。

一度そういう女がいる事が分かれば簡単だ。

少し観察するだけで、綾と似たような思考回路を持つ女をひと目で見抜けるようになった。

後はいいように対処すればいい。

適当に付き合つて別れても、途切れることなく女からの申し出は殺到した。

もちろん、それなりの線引きはしていた。

一度に二人以上と付き合うなんて事はしたことがないし、例え一時的な仲であつてもその時は彼女だけとしか関係は持たない。

ま、ある意味、自己満足だが。

俺がかなり好き勝手遊びたい放題やっていたことには変わらないのだから。

それでも挑戦してくる女が後を尽きないんだから、欲に目がくらんだ女ってやつはつくづく恐ろしい。

自分のことを棚にあげて、プライドって物はないのか？と本気で聞きたくなる。

しかし、そんなうんざりするような生活とは、大学卒業と同時に卒業した。

大学生業と仕事の両立で女の相手が出来た時間は少なかったのだが、本格的に社会人生活に突入し、営業を任されるようになった途端さらに忙しさが倍増した。

土日ほとんど出勤で、ろくすっぽ休みが取れなかった。

じーさんもさすがに休めと言ってきたが、仕事をしている方が数百倍も楽しかったのだ。

自他共に認める、完全なるワーカーホリック。

たまに取る休みは、苦勞して手に入れた念願の我が家でごろごろしたりDVDを観たりして過ごした。
まさに休むための休みのみ。

卒業と同時に買った3LDKのマンションは、通勤にも便利な、何よりも欲しかった自分だけの城。

誰からも干渉されないのが、実家に帰るのも間遠になってしまった。パンツ一兆でうろつろしようが、だらしなく寝そべっていようが、誰も気にしない。

気楽な素の自分に戻れる、貴重な空間だった。

もちろん、綾や一夜限りの女など敷居をまたがせたこともないし、またがせるつもりもない。

俺の見かけを俺以上に気にするやつらの目など、ごみよりも始末が悪い。

ここにはありのままの俺を気に入ってくれているヤツ、一緒にいて俺もリラックスできる人間しかいないつもりだ。

だから今のところ、来たのは家族と数人の親友のみ。

けれど、俺にヒルのようにしがみついてくる女や綾は家に入れるとしつこかった。

うちの両親は俺の気持ちに気付いているのか綾にはこのうちの住所すら知らせないようで、余計にうるさかった。

未だに諦めたように見せかけて、会社帰りに尾行らしきことをされる。

デパート嬢をやってるはずだが…アイツ、仕事してるんだろうか？

そのうち無駄と分かったのか、綾は作戦を変更したらしい。
用もないのに俺の実家に入り浸っているのだ。

綾はうちの母親に気に入られようと、小さい頃からお袋にまわり付いていた。

だから今更な感じがしないでもないが、お袋にしてみればやはり少々やりにくいようだった。

…彼女の母親は始終親父に色目を使っているらしいし。

親父と夫婦仲がよく肝っ玉が据わっているお袋はともかく、よく綾のおじさんは怒り出さないでいられるなあと驚く事が多々ある。

もしかしたら、関係者の中で唯一母娘の思惑に気付いていない人物なのかもしれない。

どっちにしろ、うらやましい性格であることには変わらない。

最近は特に大幅な人事異動があるため、会社もばたばた慌しかった。
実家にはもう1ヶ月以上も顔を出していない。

綾からの電話もメールも全て無視していたせいか、俺の実家に駆け込んで、はさめざめ泣いているらしい。

電話をするとお袋がいい加減うんざりした声だったので、罪悪感にかられた俺は今週土日完全に休日にし、実家に帰ることにした。

金曜日の夜、誰にも何も言わずにこっそりと帰ったつもりが、何故か朝起きた時、家のリビングのソファに優雅に座っている綾がいた。
”アイツ、毎週末入り浸ってやがるな…”俺は心の中で毒づいた。

俺に気付いた彼女は、少し首をかしげて、満面の笑みで「おはよう」と挨拶した。

きつと毎日鏡で練習しているに違いない。

こちらにも負けじと感情一つ見せない社交的な笑みで挨拶を返すと、すぐさまダイニングに入った。

お袋がおはようではなくご苦労様と一言言っ、熱いブラックコーヒーを手渡してくれた。

うまそうな匂いに、ようやくひと心地ついた。

最近の出来事やらなにやらをお袋と話しながら、俺は朝食に取り掛かった。

お袋との間に割り込むように、綾がオレの隣に腰掛けた。

そして組んだ手に顎を乗せて、無邪気そうに首をかしげて、はい、ポーズ。

…これも計算されつくした仕草だな。

朝食の味が一気になくなったような気がした。

「ねえ、雄大君。今日と明日はお休みなんでしょ？」

実は知り合いから映画のチケットを二枚もらっちゃって…

…友達全員都合悪いから一緒に行ってくれる人がいないの。

チケットの有効期限は今日までだし…

お願い、映画に連れて行って？ね？

おば様も一緒をお願いしてくださるわよね？」

べったべたの声にうんざりした。

お袋を見上げると、苦笑していた。

口元が引きつっているところを見ると、どうやら温厚なお袋も綾の粘っこさに本気で限界が近づいているようだ。

俺は心の中で深く謝罪した。

今度きつと埋め合わせに、親父と二人きりのホテルディナーでもプレゼントするから。

映画ぐらいなら害もないし、たまにはでっかい画面を眺めるのも悪くない。

ここは親孝行だと割り切って、付き合っても悪くないだろう。

俺は渋々オツケーすることにした。

しつこいぐらいの綾のはしゃぎっぷりに”お前いくつだよ？たいした演技だな、おい”と内心ツツコミを入れながら、さっさと朝メシを片付けた。

昼食を食べてから映画を観るつもりで、10時頃に家を出た。

目的地は急行で一つ東京寄りにある駅の大きなショッピングモール

だ。

そこなら専門店街もたくさんあるし、退屈な女と何時間いても退屈はしないはずだ。

綾の勧めでいかにも高そうなイタリアンレストランに入ることになった。

もちろん、彼女は全て俺が支払うのが当たり前だと思っている。別にケチというわけもなく金に不自由しているわけでもないのだが、デートだと本人が思い込んでいるこの”ただの外出”での経費を全て俺が負担することに対する礼は一言もなく、当然のように財布扱いされているのはあまり気分のいいことではない。

しかもダイエット中なのか、綾はウサギのようにサラダだけぽりぽり食っている。

しかも、嫌いなスライスオニオンやピーマンを皿の横に避けているし。

そっついの、あんまり好きじゃねーんだけど。

好きなものを食べるのは結構だが、俺が食っているラージサイズのピザを物欲しそうに見るのはやめてほしい。

うまいものが全て味気ないものになり、飲み下すのに苦労するじゃないか。

なんでもっとおいしそうに食べないのか？

俺には大口開けて豪快に食べる女のほうが好ましく思うのだが。

どうせ驕るんなら、もっと楽しく食べてもらいたい。

一緒に食べる人間のことも考えろよ、と言いたいが、言ったところでわかってもらえるとは思えない。

ダイエット食にこだわっていたにも拘らず、食後のデザートで大盛りティラミス을平らげて昼食のカロリーを平均値並に補った彼女と伴に店を出て、映画館に向かった。

1時20分。

少し早い、座っているうちに始まるだろう。

映画館の前まで行って、初めてこれから見る映画のタイトルを知った。

バリバリの恋愛モノじゃねえか。

隣でうつとりと看板を眺める綾を見て、俺はぞっとした。

コメディだということが唯一の救いだ。

座席を見つけて座ると、しばらくしたら館内の明かりが落ちた。

見計らったかのように、綾はワザとふざけて腕を絡ませたり身体を密着させてきた。

…正直、身の危険を感じる。

俺は綾から少しでも遠ざかろうと、座る位置をずらした。

そんな小さな攻防を繰り返すうち、ようやく映画が始まった。

終わってみると苦手分野であるにも拘らず面白い作品で、大いに満足することが出来た。

ラブコメディではあるが男性も楽しめるように工夫されたストーリー展開だし、なによりかなり笑わされた。

これだったら我慢の甲斐があったというものだ。

映画終了後、綾がトイレに行くというので、暇つぶしにグッズショップにふらりと入った。

おそらく出すもんだした後、盛大に化粧を直すため30分は出てこないはずだから。

特に欲しいものはなかったが、今上映中の映画のグッズが所狭しと並んでいて、見るだけでも面白かった。

昔の映画のポスターは結構かつこよく、額に入れて部屋に飾ってもいいなあと思ったり。

先ほど観た映画のグッズを見つけたのでとつかえひつかえ手にとつて眺めていると、何故か店の奥にいる小柄な女性に吸い寄せられるように視線を奪われた。

”どこかで会ったような気がする……”

けれど、その後姿に覚えは全くない。

俺が付き合ってきた女が着ているきらきらしたブランド物には程遠い、色あせてだぼつとしたストレートのジーンズとグレーのダブルコートというカジュアルな服装だ。

肩ぐらいの長さの髪は、大雑把に一つに束ねられている。化粧っ気もなさそうだ。

こんなにも外見にこだわらない人間が、オレの周辺にいるわけがない。

けれど、何か引っかかる。

好奇心の赴くまま、彼女の方にこっそりと近づいた。

気配を消して近づいたはずなのに何故か彼女は突然振り返り、俺の胸に正面衝突した。

一瞬安易な好奇心がばれたのかと焦ったが、なんて事はない、彼女はその場から移動しようとしただけだった。

なんという間の悪さ！

しかも足。踏んでるし。

最悪のタイミングだ。

足の指先わずかのスペースに思いつきり体重をかけられたせいかなり痛く、思わずうめき声を上げた。

当の彼女はぱつと足をあげ、耳まで真っ赤にして必死になってぺこぺこ謝ってきた。

…なんだか、どこか懐かしい小動物的行動。

そして。

はた、と目が合った。

その瞬間、俺は彼女が誰なのかはっきりと思い出したのだった。

笹原瞳。

中学卒業以来ずっと記憶のどこかに住み着いていた女だ。

俺はなんだかわくわくしてきた。

オレの周りに群がる女と同種ではない、俺の知り合いの仲でも唯一気を許せるはずの女。

見た目は随分大人びてきているが、かわいらしく純朴そうな雰囲気

は昔のままだった。

きつと中身も変わらず、正直で素直でまじめなやつのもまだろう。

オレの出現で凍り付いてしまったように動かない彼女を見下ろし、マジマジと観察した。

ダッフルコートの下に隠れた曲線は全く分らないが、全てが小作りなところは中学生の頃と変わらない。

色白で決め細やかなもち肌と大きな真つ黒い瞳、そしてぽかんと開いた口は小さい割に唇がぽてつとしていておいしそうだ。

想像以上にいい女へと成長した彼女を目の当たりにして、純粹に喜びが湧き上がった。

驚いて硬直している彼女を堪能しているところに、タイミングの悪く綾が戻ってきたのが見えた。

綾を見た笹原は顔面蒼白になり、慌ててその場を立ち去ろうとした。

綾が俺の女だと勘違いして焦ったか？

考えてみれば、俺がこいつの過去を知っているのと同様に、こいつも俺の過去を知っているのだ。

「ごっ…ごめんなさいっ！！」

私が思いつきりぶつかつた上に足踏んじやって…ほんと、ごめんなさいっ！！」

気まずさから知らん振りしてダッシュかまして逃げようと思ったのだろうが、そうは問屋がよろさねえ。

素早く彼女の手首を捕まえた。

驚いて振り向いた彼女は目を白黒させた。
おもしれえ。

昔々に忘れ去ったいたずら心が、むくむく大きくなる。

俺はさりげなく彼女の耳元に顔を寄せた。

ふんわりと彼女のシャンプーの香りが鼻腔を刺激する。

俺は内心にやりとほくそえみ、彼女にだけ聞こえる小さな声で彼女と交わした昔の約束を実行することにした。

「…………きれいに、なったな…あの時、振ったことを後悔するぐらい……」

もちろん、かなりこっ恥ずかしかった。

けれど、コイツがどう反応するのか見てみたいという好奇心の方が勝ったのだ。

今や全身真っ赤になっているだろう彼女は、恥ずかしくてたまらないとばかりに眉間に皺を寄せ、口を困ったようにへの字に曲げた。どうしていいのか分からなくなった時に出る、中学校の頃から直らない癖だ。

俺はうれしくて、自然と笑顔になった。

途端彼女の大きな目が見る見る大きくなったかと思うとすっと閉じられ、切なげにため息をついた。

たったそれだけの動作だったのに、俺はただ彼女に見とれた。抱きしめたい。

この場で、思いつきり強く。

そしてあの薄く開かれた唇に荒々しくキスを……って、待て。

突然湧きあがった欲望もどきの複雑な感情に、俺は戸惑った。

「雄大君？」

綾がシャツを引っ張った途端、俺は現実に戻ってきた。

ムツとして綾を睨んだが、当の本人は睨まれていることにも気付いていないようだった。

”こいつさえいなかったら……”

奥歯をかみ締めてそこまで考えて、はたと気付いた。

こいつさえいなかったら、なんだ？

馴染みの無い感情にうろたえて握る力を弱めた途端、笹原は俺の手を振り切って走って行ってしまった。

せつかく彼女と再会できたというのに。

女がいなくなろうが別れてやると怒鳴りながら出て行こうがどうでもいいと思っていたのに、笹原がいなくなっただけで何故か寂しくてやりきれなかった。

そして、念願になった偶然の再会だというのに逃げていつてしまった彼女に、少しだけ腹が立った。

しかし。

きっと彼女とは近いうちにまた会えるだろう。

確信に近い予感、これまで生きてきて外した事はない。

次に会った時は絶対に逃げたツケを払わせてやる！

俺はこの時、固くそう誓った。

予感的中。

彼女との2度目の再会はそれから間もなくのことだった。

12月に大きな人事移動があり、俺は25歳にして営業主任の座を手に入れることになった。

もちろん、身内による特殊なスパルタ教育と過酷な条件をクリアし続ける中、勝ち取った成果だ。

…などと大きく出てみたが、実際は運を味方につけられたおかげだ。

それに、高校生の頃から経営ノウハウを伝授され、大学生の頃には既に現場に出ていたのだから、同期と比べて何歩も先をいつていなければよっぽど”出来ないやつ”だということになる。

俺がこの会社を経営する一族の親戚に当たることはもちろん一部の人間にしか知らされていないが、だからこそ人一倍努力が必要だし、人以上に厳しい基準をクリアしなければ期待してくれた人たちに合わせる顔がない。

誰もが認めてくれるほどの努力と結果を出し続けることが、厳しいことではあるが俺が続けるべきことなのだ。

今回のラッキーに浮かれている場合ではない。

2ヶ月ほど前、営業業務の係長だった西村さんの父親が倒れ、会社を辞めて故郷で家業を継ぐことになった。

そこで、営業部のホープである樋口さんが営業業務係長に昇進し、さらに1人営業3年目の若手が辞職したため総務から一人営業に回し、営業を2年ほど経験後約1年役員秘書をしていた俺が、営業主任として営業を束ねることになったのだ。

学生の頃から秘書という立場の陰で、伯父に叩きに叩かれて数年。待ちに待った、チャンス到来だ。

しかし、辞めていった若手営業はとにかくすちゃらかなヤツで、取引先へのフォローもロクにやっていなかったようだ。たまりたまった苦情にさじを投げ、逃げ出すように辞めたんだからそれもまた計算内だが。

後を引継がねばならないこちらとしては、ウザイことこのうえない。必要な書類は不備だらけだし、過去のデータもところどころ抜け落ちていて要領も得ない。

樋口係長がとにかく出来る人なので、取引先とも安定した関係が築けているため、全く問題なく引継ぎが出来る状態なのは大きな救いだった。

状況としてはましな方なのだろう。

大きな取引先以外はそろそろ単独で仕事させたい今期入社の新人達を担当に指名し、何かあれば俺がバックアップに回るように全体の手綱を握ることにした。

俺も一緒に責任を持つことで、新人がのびのびと仕事に取り組んでくれればいい。

樋口さんも協力してくれるし、新人達もかなりよく教育されている、将来のホープたちだ。

思った以上にスムーズに事は進んでいる。

とはいえ、すちゃらか元営業のケツ拭きが思った以上に難航しているのは事実。

得意先へはなんとかフォローすることが出来ているが、めちゃくちゃな社内用の書類の整理から始めなければ業務自体がどん詰まってしまう。

年末近いというのに、経費伝票などもほったらかしの状態。よくもここまで乱雑にしてくれたもんだ、と頭の一発でも殴りたい気分だ。

…ってか、ケツ拭ってから出ていけっつーの！

お陰で今日は樋口さんの”昇進祝い”という名の若手だけの飲み会があるというのに、残業を余儀なくされた。

宴会が始まって、既に1時間30分は過ぎただろうか？

時計を見ると、確実に過ぎていくようだ。

樋口さんにはお世話になったし、必ず顔を出してお祝いの一言ぐらいは言いたい。

…本音を言えば、うるさい女に付きまとわれるだけの飲み会と言われる類のものには一切顔を出したくないが。

しかも遅ければ遅れた分だけやれ二次会だ、三次会だと長い時間拘束される可能性が高くなる。

罌を仕掛けて俺を喰らい尽くそうとする、女たちに。
うんざりだ。

この分だと終わりの挨拶から二次会へと引っ張っていかれること間違いない、だ。

数人でけん制しあいながらも俺を取り囲み、べたべたくつついてきたかと思うと再び牙をむき合って互いをけん制する女の姿は、見苦しいの一言に尽きる。

”俺の意思や希望”という当たり前の事柄にさえ注意を払ってくれない。

周りを蹴落とせば俺を獲得できるという自信と発想は一体どこから生まれてくるのか…説明してみたい気もしないでもないが、切実に関わりたくない。

ほんと、うんざりだ。

かなり気が重かったが、仕事を何とかキリのいいところまで片付け、慌てて会場に向かった。

店員に案内されて通された個室の襖からは、かなり賑やかな声が響いていた。

もう盛り上がりつくして、席もぐちゃぐちゃになって楽しんでいるのだろう。

「こちらです」

店員がにこりと愛想良く微笑んで下がっていった。

俺は深呼吸を一つして心を落ち着け、感情を押し殺し、襖を引いた。

案の定、一斉に向けられたたくさんの顔。

そのうちの一人、この会社で一番の厚化粧女がいつものように反射的に叫んだ。

「富樫しゅにいくん！おそおおいっ！！」

「遅くなって申し訳ありませんでした」

…俺は真面目に仕事してんだよっ！

心の中でイライラしつつ、出来るだけ感情の出ない落ち着いた声で言った。

「もうっ！主任が来ないと、全然盛り上がりませんよぉー！」

「富樫さあん、お疲れさまあっ！」

やばい。

このままでは俺はやつらのえさだ。

ストレスによる頭痛でずきずきする頭に手を伸ばしたい気持ちを抑えて、何気なく会場をゆったりと見回した。

…と、その時。

馴染み深いがこの場には違和感のある顔が見えた。

一瞬錯覚か？と思い、もう一度見直す。

間違いなかった。

そこには酔って頬を赤らめ、潤んでキラキラした大きなびっくり眼でこちらを見ている、笹原瞳がいた。

真っ黒い大きな瞳に吸い寄せられるように、ふらふらと彼女に向かつて自然と足が動いた。

が、近づくに連れて、ようやく彼女周辺の状況を把握した。

彼女の背にへばりつくように座っている食えない同期の女・杉田と、隣には本日の主役・樋口さん。

しかも樋口さんはかなり彼女と親しげな位置に座っている。

よく見ると、表面上穏やかだが、俺には笹原を確保しているようにしか見えない。

…かなりむかつく。

気に入らない。

はつきりいえば、杉田が貼り付いているのも許せない。

相手は尊敬に値する先輩である樋口さんだというのに、今すぐ引き剥がして外に放り出してやりたいと本気で思った。

杉田はさておき、彼女の隣に俺以外の男が座るなど許されるわけがない。

「何故？」と聞かれれば困るが。

「…すみません。樋口さん。お祝いの席に遅れてしまって」

彼女の側に行くのが当たり前のように、樋口さんに声をかけた。

もちろん、彼がそこにいることに気付いたのは一瞬前だという事も、彼がそこにいる事が気に入らないという事実も秘密事項だ。

彼は爽やかで誠実な男の象徴であるかのような笑顔で、俺に礼とねぎらいの言葉をかけてくれた。

俺は彼らが座っていたテーブルの端、3人の顔が見渡せる位置に座った。

正座した膝が笹原の足に当たるのはなんだかうれしかった。

…まるで変態のようだという心の声は一切無視だ。

がしかし、笹原が俺よりも樋口さんの近くに座っているという事実は、やっぱり気に入らない。

さらに近くで3人を観察し、樋口さんが笹原に多大なる好意を抱いていること、そして杉田が樋口さんを後押ししていること瞬時で察したがため、不快感は増すばかりだ。

俺の中で狩猟本能が目覚めた。

「…君とは随分めずらしいところではかり会っね、笹原さん」

きつとかなりいやらしい笑顔だったに違いない。

表情豊かな彼女の感情は、全て顔に出るのだ。

あの怯えきった瞳…若干胸は痛むものの、それ以上にそそられた。

喰いたい。

…ってか、ぜってーに喰ってやる。

俺の心に、営業目標よりも明確な目標が刻まれた。

俺の本能に忠実な、野蛮なオーラに気付いたのだろう。

杉田が疑わしげな視線を寄越し、じろじろと俺を眺め回した。そんじょそこらの女と違って侮れないやつだからこそ、緊張する。

「あれ？ 瞳、富樫君と知り合いなの？」

何気なさを装い、俺との関係を確認する。

まあ、ここにいる誰にも俺と笹原の接点など想像も付かないだろうが。

なぜか困って口ごもる笹原に代わり、幼稚園から中学校まで同じだった幼馴染であること知らせた。

驚いてぽかんと口をあけた樋口さんに子供っぽい優越感を感じ、さらに探りを入れてこようとしている杉田に対して警戒レベルを上げた。

ここで彼女の不興を買えば、想像以上にあっけなくばっさりやられるかもしれない。

杉田の話から彼女と杉田とは高校からの友達であることを初めて知った。

どこでどんな風に縁が繋がっているのかわからないものだ、と驚いた。

それにしても、彼女の過去を知る事は想像以上に楽しかった。

本人から直接話を聞ければもっとよかったが、現時点でそれは贅沢というものかもしれない。

もつとなにか聞けないものかと内心焦れていると、話が都合よく面白い方向に流れ始めた。

どうやら杉田は思った以上に酔っ払い、普段ではありえないぐらいに判断能力に欠けているようだ。

「……ひょつとしてさあ、中学校で富樫って名前の男の子、あんただけだった？」

俺？

なんで杉田が中学時代の俺をチェックしたがる？

裏がある話なら、なるだけ掘り起こしておきたいと考えるのは、当然のことだろ？

ということで、話を聞きだすべく、俺は大胆かつ慎重に話しを続けることにした。

……つまり、都合よく事実を捏造したってわけだ。

「……………」。

……いや、もう一人いたよ。

確か3年の時、笹原さんと同じクラスだったヤツだよな？

笹原さん、アイツと仲良かったし。」
「…はえ？」

ぼーっと事の成り行きを眺めていた笹原が、変な声を出した。
俺のとっさの嘘に驚き、頭の中が真っ白になっているのだろう。
俺はにやりと笑いかけた。

言葉も出ないほど驚いている笹原に気にすることなく、杉田は魔女のようになんまりと笑って言った。

「じゃあ、そつちの富樫だ〜！」

瞳の青春、知らずに踏みにじってる”初恋の君”は！！」
「…つとおっ！！！！！！！」

改めて人の口から聞かされると照れるが、あの告白が彼女にとって初めてのものなら俺がその”初恋の君”ってことになる。
なんだか無性に気分がよくなってきた。

けれど。

何で俺が笹原の青春を知らずに踏みにじってるってことになるんだ？
頭の中で今あるピースをあわせようとしてみるものの、決定打に欠ける。

俺は首をかしげた。

「…って事は、その”富樫君”ってのが、さっき話していた笹原さ

んの初恋の人？」

かなり気にしていたのだろう、樋口さんが笹原の恋話を掘り下げようと質問した。

… っ てことは、樋口さん、笹原に結構本気か？

樋口さん排除の作戦を練るべきだと頭の隅にメモしていたら、杉田が爆弾の導火線に点火した。

「そうなんですよっ！そいつのせいで、真世は現在彼氏いない歴更新中」

… なんだと？

っ てことは、もしかしたら笹原はあれからもずっと俺の事が好きだったとか…？

「……もう、やめようよ、その話は……お願いだから」

小さくなった声と酒のせいだけとは言いがたい肌の赤み。

消え入りそうなほど身をすくめた笹原の全身から、それが真実だという事実が窺い知れた。

そうか。

笹原はまだ俺の事が好きなのか。

ずっとずっとこの年になるまで、一途に思い続けてくれたのか。

俺は今すぐ大空に羽ばたけるほど有頂天になった。

人生最高の喜び。

緩んだ頬が元に戻らない。

今の俺、きつとやらしい顔してんだろうなあ…。

なんてねじの外れた頭と心が、すっかり調子に乗ってしまった。

特大級の爆弾が爆発することになるとは知らずに。

「…へえ、笹原さんって、あいつのこと好きだったんだ？」

「そうだ！ねえ、”富樫”ってどんなヤツ？アンタ知り合いじゃないの？」

連絡取れるんだったら、文句の一つ言ってやりたいんだけどっ！

「」

「…それはまた、なんで？」

ここまで来ると、止められない。

好きな子を苛める小学生と変わらないと言っならば言えがいい。

この時の俺は絶対調だった。

俺に煽られるようにしゃべり出した杉田を止めようと笹原が必死になっっているが、杉田は勢いよく言った。

「だって、瞳ったらまだ片想いの彼に未練タラタラで、彼氏の一人作らないんだよ？」

勝手にやってろ！って優しく見守ってやってんのに、この前偶然の再会して

彼女連れてらぶらぶモードで歩いてるとこ見たって落ち込んで大泣きしてるしっ！

こんなに可愛い子がこの馬の骨か知らん男に今だ縛られてるな

んで、
あつたまくるじゃないっ!!」

さすがの俺も思考が停止した。
淡い恋心の延長かと思いきや、どうやらそうでもない可能性も濃厚らしい。

そんなことあるか？
そこまで強くずっと想い続けてくれることって。
しかもあの当時俺は綾に片想いしてたし、笹原はそのことに気付いているようだった。
それなのに…

感動にも似た強い感情が心を満たした。
杉田の口から飛び出した事実には心臓が高鳴り、公の場だというのに感情を真っ裸にされたようだ。
きつとガキみたいに頬が赤くなっているはずだ。
誰も酒を飲んでいないことに気付かなければいいが…。

このときは、それはもう俺らしくもなくうるたえ、慌て、緊張した。
これはもう、コイツを捕まえなければ俺の一生は台無しになる。
この瞬間、笹原が側にいる近い未来も遠い未来も、はつきりとしたビジョンとなった。

頭の中にウェディングベルのような鐘の音がりんごと鳴り響いて

いる。

その時だった。

笹原の消え入るような声が聞こえたのは。

「……かえる」

最初、3人が3人ともその場に固まってしまった。

彼女の目にははつきりと涙が見えたとし、彼女が座っていたテーブルにもその名残が数滴残されていた。

はっと我に返った時には、彼女はカバンを引つつかんで部屋を出て行くところだった。

一斉に立ち上がって後を追おうとしたところで、幹事のお開きの声がかかった。

間が悪いことこの上ない。

挨拶を求められた本日の主役・樋口さんは、戸惑いながらも立ち上がった。

「なんなのお…？一体？」

戸惑った杉田はしきりに前髪をかき上げていた。

たった今、人間、羽目をはずすところくなことが起こらないというのは定説だと証明された。

…どうやら俺は、人生最大のピンチを迎えたらしい。

何気にだるい、木曜日。

恐怖の宴会は昨日のことだったというのに、もうはるか昔のことだったような錯覚を覚える。

昨日は案の定2次会、3次会へと引つ張りまわされ、朝から精神的にも肉体的にも疲弊しきっている状態だ。

天国から地獄へと続く道は、どうやら滑り台だったようだ。

定時まではいつもと変わらない業務をこつこつこなし、18時頃外回りから戻り、報告書の作成と本日の必要経費の計算に取り掛かっていた。

今日は何とか9時頃には退社できそうだと考えていた時、殺気で背中がざわりと粟立った。

と同時ににゅっと後ろから伸びてきた手が、机の上に一枚の付箋紙を貼り付けた。

腕を辿って見上げると、そこにはまるで仁王像のような杉田が立っていた。

生きとし生ける者全てが縮み上がってしまいそんな恐ろしげな目でぎろりと俺を睨みつけて、そのまま歩き去った。

怖え…。

背中に一筋の冷たい汗が伝った。

恐る恐る付箋紙に視線を落してみると、女性にしては角々した字で『9時。公園に來い』と殴り書きしてあった。

最後に果たし状をもらったのは一体いくつの頃だったか…頬が思いっきり引きつった。

仕事をさっさと終わらせ、俺は約束の時間に間に合うように会社を飛び出した。

杉田はまるで赤い布を見せられた闘牛のように怒り狂ってるし、ここで遅刻してさらに不興を買うのは得策ではない。

彼女の様子からしてきつともう笹原本人から事情を聞いているだろうし、それは本人から直接事情を知らされるほど笹原と仲がいいということだ。

既に評価は絶悪だろうが、これ以上敵視されても困るのだ。

いや、ここはもっと積極的に、敵意を好意に変えなければならない。なにせ杉田はキーパーソンだ。

彼女が味方についてくれたら、これほど心強いことはない。

ここはプライドを捨てて、何とか彼女の怒りを鎮め協力を求めるべきだ。

俺は善後策を練るべく、頭をフル回転させた。

平日夜9時の公園は、ほとんど人がなかった。
だからすぐに気付いた。

公園の真ん中にある時計台にもたれて、おどろおどろしいオーラを放っている杉田に。

俺はごくり、と唾を飲み込んだ。

深呼吸をして決意を固め、杉田に近づいた。

俺が公園に入ってきたときから真直ぐに俺を見ていた彼女は、開口一番に言った。

「…アンタ、確かなんか武道習ってたって言ってたわよね？少林寺…だっけ？」

予想外の質問に「ああ」と素直な答えが出たと同時に、杉田の鋭い拳が腹に入った。

コイツ、強い！

無駄のない動きとスピード、溢れんばかりの闘志に、驚きが隠せなかった。

とっさに腹筋に力を入れて身を引いたから良かったものの…なんて挨拶だ、コイツ。

痛みに顔を歪めたが、俺がしたことを考えれば彼女の気持ちはよくわかる。

だから一切抵抗も抗議もしない。

ここは潔く怒りの拳を受け止めるべきだ。

拳を引つ込めた杉田は目を閉じ、気を統一させようと何度も深呼吸をした。

再び目を見開いた時には怒りを封印し、冷静に話し合う体勢に入っ

た。さすがだ。

「で、アンタが当の”富樫君”だったってわけね？…何で嘘ついたの？」

「アイツの事が知リたかつたし、

ちよつとでも関心を持ってもらいたかつたからって言つたら…驚くか？」

「マジで？」

「マジで」

杉田が不快そうにぎゅつと眉を寄せた。

「だってアンタ、めちゃくちゃかわいい彼女いるんでしょ？」

「誤解だ。」

あれは幼馴染で、親同士が仲いいから今も付き合いがあるだけだ。確かにガキの頃は好きだった時もあるが、

幼馴染以上の関係になったことなど一度もない」

「じゃあ、アンタにとって瞳って何？」

「笹原との関係を未来に繋げたいと思ってる。真面目に」

「嘘」

「こんなことで嘘は付かない。」

なんなら笹原のイニシャル入りの指輪を今すぐ買いにいつでもいい。

杉田が彼女の左指のサイズを知っているのなら、だけど」

杉田の瞳がきらりと光った。

言葉の一つ一つに込めた俺の本気は伝わったようだ。

今まであんまり付き合いがなかったが、そこの男より潔いヤツだ。

「…なんだ、瞳のヤツ、片思いじゃなかったんじゃない」

杉田は心底うれしそうに笑った。

その笑みにつられて、俺も心からの笑みを浮かべた。

からかうようににやりと笑った杉田は、オレの肩を拳で一度軽く打った。

どうやら誤解は解け、平和的解決へと向かったようだ。

「瞳ってホント鈍くてさ、一途で、純粹で…とにかく放っておけな

いのよね。

高校の時は可愛いし騙されやすそうだから変な虫が付かないように見張ってたけど、最近になってちょっと甘やかしすぎたんじゃないかって

悔やんでたのよ。

だから、性格にも将来性にも問題ない樋口さんを密かに応援してたんだけど

…瞳の気持ちを考えたら、ここはアンタのために一肌脱ぐのが一番みたいね」

「ちゃんと理解してもらえたようでうれしいよ」

いい感じだ。

「ちょっと確認だけど、アンタ、再会は映画館のショップでわずかに分足らず、

だったんでしょ？

昔告った時は断ったのに、どういつ心境の変化？」

「俺もよくわからないが、昔のあれこれもプラスに働いた結果、一瞬で落ちた」

「…落ちた、ねえ…」

気持ちはよくわかると杉田が頷いた。

変わったやつだな、コイツって。

彼女の中で俺の壊滅的な印象が修復されていくのはありがたいことなのだが。

そんなことよりも、この機会にまずは基本情報の収集だ。
現在の彼女のことは赤の他人とっていいほど知らないんだから。
こんな調子じゃ、これからの戦いに勝ち残っていけない。

「ところで、なんで昨日の宴会に笹原が来てたんだ？」

「瞳、宝製菓の販売促進担当なのよ。宝はずっと樋口さんが担当してたでしょ？」

樋口さん、一目ぼれしたみたいで、ずっと瞳を狙ってきたのよ。

田口さんも産休前に瞳に会いたいって言うから、私が誘ったってわけ」

「へえ……」

やべえ、イライラしてきた。

樋口さん、立場を利用して”営業外営業”してたってわけだ。

「でも安心して。

瞳ってあの鈍さでしょ？もの凄くアプローチされてたにも拘らず、未だに樋口さんの気持ちに気付きもしないのよ。

樋口さん、瞳の気持ちに合わせてじっくり長期戦を展開してたんだけど、

昇進したと同時に焦ったみたい。

内勤だと、そうそう会えなくなるからね。

で、私に泣きついてきたからちよつとだけ協力したのよ」

「なんで協力なんて……」

「だって、このままだったら中坊のアンタの幻影に囚われたまま、オールドミスになっちゃいそうだったんだもん。

樋口さんはすごくいい人だし、もしかしたら瞳も前向きに

恋愛してくれるかなあって」

「……」

「だいたい、初恋を引きずって10年って…幻に恋してるだけって可能性が高いじゃない。」

自分の心の中に作り上げた理想の富樫像にいつまでもしがみついてるなんて、

はつきり言って不健康よ。

でしょ？」

「まあ…な」

「言っとくけど、あの子の”富樫君”とアンタの本性との溝が深すぎて

あの子がアンタのこと拒否したら、ストーカー行為に走るんじゃないわよ？」

潔く身を引きなさいよ。

傷つけたり泣かせたりしたら、容赦なくボコすからね」

「…りょーかい」

何気に傷つく言葉があったりしたが、どれもこれも事実だし、笹原のためには一番いいことだったのでぐっと堪えた。

俺って案外健気だったんだな。

そんな俺を見て、杉田は満足そうに頷いた。

そのあと30分も杉田から笹原の取り扱い上の注意を伝授頂き、絶対に実行しなければならぬ”決まりごと”を守るよう脅迫…いや約束させられた。

杉田曰く、笹原と付き合う上で必要なのは”おかしのおなら”なのだそうだ。

お…押し捲らない

か…隠し事はせず、はっきりと分かりやすく事実を伝えることし…しつこく聞きだそうとせず、怯えたら落ち着くまでじっとこらえること

の…のんびりペースに付き合い、決して焦らせない

お…襲わない

な…泣かさない

ら…乱暴はしない

あまりの過保護ぶりにあきれ返った。

話を聞いているうちに始まった頭痛が酷くなってきたので、こめかみをぐりぐりと揉み解した。

杉田は憎ったらしくふん！と鼻を鳴らし、ギロリと睨みつけてきた。

「言っとくけどねえ、瞳はアンタの周りにうようよしてる女とは違うのよ？」

取り扱いを間違ったら、アンタ一生”瞳ちゃんのお友達”よ？

もしくは、瞳の前に二度と出てこれないように闇に葬られるかどっちにしろ、私が脅さなくてもアンタは自然と”おかしのおなら”を

実行するでしょうけどね。

私の経験上、瞳に好意を持った男は漏れなく実行すること間違いなし、よ。

特に2つの”お”は絶対無理ね！」

…俺が一番守れそうにない項目じゃないか。

それなのに、杉田は自分の勘に絶対の自信があるようだ。今でも俺の顔を意味ありげにニヤニヤ笑って見てる。

なんかの罠か？

「今月、瞳は大体1時間ぐらい残業してから帰るから、出来る限り毎日顔を見せるようにしなさい。

それぐらい自己アピールしないと、あの子、何にも気付かないわよ。

とにかく鈍いし、自分の魅力について全く理解してないから。

それから、昨日のことは地面に頭こすり付けるぐらいの勢いで謝るときなさいよ？

今日だって、会社休んで泣いてるぐらいなんだからね」

そうか…泣いてるのか。

一人で膝を抱えている笹原を想像して、心臓が切り刻まれたように痛んだ。

本当に馬鹿なことをしてしまった。

俺は俯いてぎゅっと拳を作った。

杉田はため息を一つ吐き、「まったく…」とブツブツ小声で悪態を吐いていた。

「私だつてまだ腹立ってんだから。」

…でも、ま、ともかくにも、健闘を祈るわ。

瞳の幸せのためにアンタのためにやってんじゃないって事、ちゃんと理解してなさいよ？」

俺は力なく頷いた。

それから携帯番号とメアドとを交換して、作戦会議は終了となった。

杉田は懐の広いやつだ。

お陰で光明が見えた気がする。

知りたい情報は手に入った。

あとは樋口さんを出し抜いて、笹原を手に入れるだけ…。

そのためには許しを乞うところから始めねば。

翌日、得意先回りを順調にこなした俺は、明日の残業付き休日出勤を覚悟の上で定時に退社した。

もちろん、笹原に謝り、許してもらったためだ。

今日は都合のいいことに金曜日だ。

彼女は明日休みだし、お詫びがてら夕飯でもご馳走できればいいと思う。

一緒に飯を食ったら、それなりに緊張もほぐれるはずだ。

うまく緊張がほぐれたら、一歩でも二歩でも関係を前進できる下地ができる…はず。

正直言つて、あんまり自信がない。

まともな恋愛などした事がないだけに、何が正しくて何が間違ってるのかなんて見当が付かない。

彼女の会社の前に馬鹿みたいに突っ立ってるのも、ただ彼女を捕まえなければという気持ちだけ。

何の計画も策略もない。

勝負師とまで言われたこの俺が…情けないっただらない。

彼女は1時間は残業するらしいが、もしも早く終わってしまったら会うことすら出来ない。

俺は辛抱強く、ガードレールにもたれながら彼女を待った。

女を待ったことなど、これまでの人生であっただろうか？
不思議と苦にならないのは、きっと相手が笹原だからだろう。

張り込むこと1時間10分。

携帯に入ってきた仕事に関するメールに返事をしている時、笹原が会社から出てきた。

俺に気付いて目を擦り、もう一度俺をガン見したかと思ったら、真っ青になって硬直した。

それほど俺に腹を立ててるのか？

そんなにも傷つけてしまったのか？

もどかしいさと切なさでどうにかなりそうだった。

けれど何とか自分を取り繕い、勇気を出して彼女の前に歩み出た。

「よお」

極度に緊張したため、気のきいた挨拶一つ出来ない俺を心の中で罵った。

そんな俺に愛想を付かしたのだろうか、笹原からは「あ……ども」と何とも気の抜けた挨拶が返ってきた。

もう、修復不可能なところまできてるのか……？
不安が一気に増した。

いや、ここで引いてはいけない。

ちよつと強引にでも引つ張っていったら、人のいいコイツは温情を与えてくれるかもしれない。

愛用の重たいビジネスバッグをぐつと握り締め、出来る限りさりげなく聞こえるように、それでも当たり前のようにメシに誘ってみることにした。

彼女はかなり戸惑っているようで、行くとも行かないとも取れない返事を繰り返していた。

突っ込んで聞いてみると、これから一人で馴染みの店に行くことに決めているらしい。

俺は杉田に言われた『おかしのおなら』を思い出した。

ここは彼女の領域で話をしたほうがよさそうだ。

…と考えていたにもかかわらず、煮え切らない彼女に業を煮やした俺は、強引に一緒に行くことを了承させた。

決意を変えないうちに移動せねばと焦った俺は、一步も動かない笹原の手首を手にとった。

細い。

一方的で色気のない触れ合いなのに、俺の心はまるでガキのように躍った。

俺は照れ隠しに、ワザと乱暴に彼女を引つ張り続けた。

最初は目を白黒させていた彼女も諦めがついたのか、ふつと肩の力

を抜いた。

「と、富樫君、その食堂、私の家の最寄り駅で…
各駅停車しか止まらない小さな駅なんだけど…
それでも…大丈夫？」

上目遣いにこちらの様子を窺う彼女は、凶暴なまでに可愛かった。
カツと身体が熱くなり、心臓がものすごいスピードで脈打った。

「…大丈夫」

喉がからからで、かすれた声しか出なかった。

コイツは何でこんなに心を乱してくれるんだろう？

そんな俺の気持ちを弄ぶかのように、笹原はそれはそれはうれしそうに微笑んでから俯いた。

街灯やイルミネーションの溢れる12月の夜でも、耳や首筋がうつすらと赤く染まっているのが分かる。

なんだか妙に恥ずかしくて、うれしくて、ムズムズした。

こんなにも初心な反応を見せられて、心決られない男がいるだろうか？

俺は中学時代に天然・笹原の後ろに倒れていった男たちの屍を思い出し、初めて同情を覚えた。

うれしそうにこれから行く予定のいきつけの店の話をしている彼女は生き生きとしていて、とても愛くるしかった。

コロコロと変わる表情とくるくるとよく動く目。

体の芯がきゅっと締め付けられ、愛しいと思う気持ちがちんちん湧いてくる。

もっともっと近づきたい。

彼女を独占し、この腕に抱きたい。

彼女の全てを、そしてこれからの時間を。

熱い想いを心の中にぶちまけていた俺の思いの丈は、約10秒後に粉碎したのだが…。

笹原の行きつけの店は、昔ながらの寂れた食堂だった。

客はガテン系やしょぼくれたサラリーマンなど、男ばかり。

テーブルに並べられた丸いすは穴が開いて中のスポンジが顔を出してるし、テーブルも年季が入っている。

なにより、この店のおばちゃん！

まるつきり、ドラマかなんかで描かれる典型的な”食堂のおばちゃん”そのものだ。

最初は戸惑ったけれど、でもあったかいおばちゃんとのやり取りを見ているうち、なぜ笹原がこの店を気に入っているのか分かる気がした。

まるで家族といえるような空間。

どんな時でも受け入れてくれる寛大さがあつた。

リラックスした笹原の笑顔。

来てよかった。

よかったけど…いつになったら俺と会っただけであんな笑顔を見せてくれるんだろう？

彼氏かとおばちゃんに聞かれて速攻否定されたせいもあり、正直凹んでいたりする。

難題だ。

おばちゃんとの会話を終えた笹原は、おそろおそろ何を注文するのか聞いてきた。

んだよ…そんなに怯えることねーじゃねーか。
やっぱり面白くない。

どんなものがあるのかよくわからないので、笹原のオススメメニューを聞いてみた。

すると彼女は”ほっけ焼き定食”を上げた。

あまりにもおっさんくさい選択に驚いて声を失ったのに、どうやら俺がムツとしたと思ったようだ。

彼女は必死になって定食の美味しさについて早口で語り始めた。

真面目な顔で納豆談義って…俺の事、心の底から論外だと思ってるのだろうか？

かなり不安が残る。

けれど、再会したあの日から見ても、徐々に二人の距離が縮まっている気がする。

構えることなく笑顔で話をしてくれているのがうれしかった。

もっと距離を縮めたい。

彼女が好きなものを食べてみたくて、俺なら決して選ぶことはないだろうほっけ焼き定食を注文した。

彼女の顔がぱつと輝いた。

同じものを注文したってだけでこれだけ喜んでもらえるのは、かなり気分が良かった。

定食は、笹原がオススメと言うだけあってめちゃくちゃうまかった。ほっけは優しく端で突付くだけでぼろりと身が離れるほど鮮度があり、身も肉厚。

いくらでもご飯が進む。

ちらりと向かいに座る彼女を見ると、それはそれはおいしそうにパクパク食べている。

なにをアピールしたいのか、ちまちま食べる女たちに慣れていたせいか、そんな姿が新鮮だった。

箸使いや魚の食べ方がとてもきれいなことも感心した。

こついうところに育ちのよさや人間性が出てくるもんだとしみじみ思った。

彼女との食事で、不愉快に思うところは一つもなかった。

女性との食事がこんなに楽しくて、リラックスできるものだとは思ってもみなかった。

きつと彼女となら毎日3食一緒に食べても、飽きることも呆れることもないだろう。

長い時間、彼女を待っていてよかった。

愛想をつかさねられることなく受け入れられた俺がいかにもラッキーだったか、改めて実感した。

この調子でこいつに俺の存在になれてもらおうと、俄然やる気が出てきた。

次の週は毎日彼女が退社の時間を狙って、彼女の会社や駅周辺をうろついていた。

杉田のくれる情報の賜物だ。

…後が怖い気がしないでもないが。

仕事を途中で抜け出したり、営業帰りの時間に合わせるようにしたり、タイムスケジュールを調整するのが結構たいへんだった。

が、彼女と顔をあわせ言葉を交わし、愛くるしい笑顔を見るだけで、疲れも苦労も全て吹き飛んでくれる。

俺には精神的疲労に良く効くリラクゼーションタイムというわけだ。

彼女にパワーをもらったら速攻会社に戻り、遮二無二仕事した。

半分否定しつつも残りは肯定しているプチ・ストーカー生活は、案外と時間を削られるのだ。

わずかな時間を有効に使わねば、絶対に定時で上がりたい金曜日まで残業せねばなくなる。

それだけは困るのだ。

なにせ先週と同じく彼女を待ち伏せて、強引に夕食を食べに行く予定だからだ。

杉田の話だと、彼女は毎週金曜日に夕食をする習慣があるらしい。おそらく今週もまた一人夕食を楽しむつもりなんだろう、と。

「何で杉田と一緒に行かないんだ？」と聞くと、彼女はいやらしいとしか表現できない顔でにたあつと笑った。

…あんまり聞かない方がよさそうだ。

こいつのこと、魔王か何かと間違えてしまいそうだから。

努力の甲斐あつてか、彼女との距離はさらに縮まっている。

出来ればクリスマスまでに鈍い彼女にオレの気持ちを伝えたい。

簡単にいくもんだろうか…？

百戦錬磨のつわものだったはずなのに…笹原には狂わされてばかりだ。

待ちに待った金曜日。

ラッキーなことに、退社してきた笹原を無事に拉致することに成功した。

彼女の話によれば、これから馴染みの店にラーメンを食べに行くらしい。

来週は、恋人達の一大イベント『クリスマス・イヴ』がある。

24日はなんとしてでも笹原と一緒に過ごしたい。

杉田情報では彼女は毎年1人ケンタッキー・クリスマスを楽しんでいるらしいし、きっと今年も予定はないだろう。

意を決してクリスマスディナーにでも誘おうと思っているのだが。

毎年誘われることはあっても誘うことなどなかったから、どうしてもいいのか正直よくわからない。

だが…ラーメン屋で誘うつてのは、ありなのか？

はつきり言って、色気もそっけもないシュチュエーションだ。

……。

とにかく、やるだけやってみよう。

考えてみれば、ラーメン屋なんて大学の頃以来だ。

俺は大いに興味をそそられて、ふらふらと彼女のあとについていった。

そして、ラーメン店だと紹介された、倒壊寸前のブラック小屋のよ
うな建物にあぐりした。

……。

…マジかよ。

普通だったら入らないぞ？

一体どういう心境でこの店に入ろうと決意したのだろうか？

…って、こんな店でディナーに誘うって…どうなんだ？

俺は頭を抱えて座り込みたくなった。

驚かされてばかりの俺を馬鹿にしているのか、笹原はニヤニヤと笑っている。

…コイツ…ワザとか？

ワザとこういう系の店を選んで、俺の反応を楽しんでるのか？

あんまりにもムカつときたので、あらゆる場面で威嚇する時に使う声で「何笑ってんだよ」と素で睨みつけてやった。

もちろん、いつもより8割ほどやさしく、だ。

”可愛さあまってにくさ百倍”の心境だが、やっぱり可愛いものは可愛いということだろう。

こんなごく甘のちっぽけな脅しでいつもの怯える小動物に逆戻りした笹原に満足し、まるで俺が常連かのように先に店に入ってやった。少し拗ねたような顔で慌てて後をちょこちょこ付いてくる姿が、また何ともいえず心をくすぐられる。

店内を見回してみると、”ラーメン好きです”という看板をつけて歩いてそうなやつらが、ただ黙々とラーメンをすすっていた。

きつと誰も見ていないであろうテレビは、今人気のバラエティ番組。壁に貼られたポスターやメニューも茶色く色あせ、油染みが出来ているし、床はラーメン屋や中華料理店によくあるようにぬるぬるして滑りやすい。

絵に描いたような、ひなびたラーメン店だ。

それでも結構繁盛しているようだし、客は皆満足そうな顔をしているし、味は期待できそうだ。

店の切り盛りは恰幅のいい店主とアルバイトらしき若い男の2人。一見全く似てないけれど店主と男の目がそっくりなので、きつと近親者なのだろう。

2人して頑固なラーメン職人ってどこか？

笹原の姿が見えた途端、厳しい店主の目が柔らかく笑んだところを見ると、笹原は店主に相当可愛がられているようだ。

こいつ、年上キラーか？

おそらくこの鈍そうで騙されやすそうで、人の保護欲を刺激する人となりのなせる業だろう。

そのお陰で、不眠にならない程度だが、店主は俺をじろじろ観察している。

お気に入りの客が変な男に引っかけたら大変だと思っているのか、それとも…。

おそらく店主の隣で俺に人でも殺しそうな視線を投げてる、この油断ならない人間のためだったりするんだろうなあ。

アルバイトの男の態度は、あからさまな敵意と嫉妬だ。

笹原に対して明らかに好意を持っているのは間違いない。

そして、鈍感・笹原は彼の気持ちに全く気付いていないのだろう。気付いていて天然行動に走っているのなら、こいつは相当な悪女つてことになる。

樋口先輩といいこの男といい、一体どれだけ悩みの種を撒き散らせば気が済むんだろう？

頭を抱えていると、店主がさりげなく俺が彼女の恋人かどうか聞いてきた。

笹原は顔を真っ赤にして、顔を横にぶんぶん振りながら「違う違う！彼、富樫君って言うてね、私の幼馴染、なの。ね？」と力説した。そんなに強く否定しなくてもいいではないか？

俺はみつともないぐらいにショックを受けた。

笹原の言葉に店主はニヤニヤ笑い、アルバイトの男もふふん、と鼻で笑いやがった。

ム力つく…。

何でコイツはこんなにも鈍くて天然で、すれたところがなさすぎるんだ？

ここまで清纯派じゃなければもう少し男を寄せ付けない術を身に付けられるだろうし、俺との関係にも前向きになってくれるだろう。けれど、そうすればこれまでに付き合っている男が1人や2人ぐらい作ってそうだ。

…はつきり言つて、ここまでくると俺が勝手に頭の中で捏造した過去であつても、そんな経歴は許せない。

いや、まてよ。

もしかしたらコイツ、今になって俺のことが迷惑なだけの存在になったとか？

今の俺を見て、昔好きだったヤツのイメージに幻滅して、いらだつてはいるが面と向かって何も言えず行動で…って、ありそうな無さそうな微妙な説だ。

一体こいつは何を考えているんだろう？

…だめだ…こと笹原のことになると頭が回らないし、悲観的になりすぎるくらいがあるようだ。

いつもの俺らしくないうつろたえっぷりにイライラが倍増し、頭が痛くなった。

笹原が怯えているのは分かっていたが眉間に皺を寄せ、腹いせにア

アルバイトの男を威嚇するべく睨みつけた。
出来る事からコツコツと。

欲しいもんを手に入れようと思ったら、まずは行動することからはじめなければならぬのは人生の定石だ。

男も負けずに睨み返してくる。

笹原以外の人間には、2人の間にパチパチと生じた火花が見えてくるに違いない。

俺から発せられる不穏な空気を本能的に察知したのだろうか。
笹原はとにかく必死になって楽しい話題を探しているようだ。

そのせいか旨そうなラーメンと餃子がカウンターテーブルに置かれた時、笹原は安堵した、それでいておいしそうな食べ物を目にした時の幸せそうな恍惚とした笑顔を見せた。

「とにかく、大将のラーメンはすっごくおいしいの！熱いうちに食べよ？ね？」

確かに、旨い。

こんなに旨いラーメンは久しぶりだ。

何年も通いたくなる理由が、一口食べただけでよくわかった。

ラーメンそのものの味だけじゃない。

きっと笹原がめっちゃくちゃおいしそうに幸せそうに食べるから、余計に旨く感じるんだろう。

気取った店じゃなくて、等身大の笹原の世界に温かく迎えてもらったような気がして、じわじわと喜びが湧き上がってきた。

うつとり笹原を見つめる。

『食事をするという行為は性行為を連想させる』と、大学の悪友が馬鹿丸出しで力説していたのを思い出した。

その時は「アホか」と一蹴したが、口に入れる寸前にちろりと見える赤い舌先とか油でてらつと光った唇をなめる仕草とか、観察しているとぐつとくるものがあつた。

そして、ありえないことに股間とともに頬がどんどん熱くなっていく。

…俺は中坊かつ！

もしかしたら、笹原の清純派お色気オーラの影響を受けてしまったのかもしれない。

コイツが相手だとしても調子が狂う。

言葉遣いも態度も、何もかもがガキっぽくなってしまつのだ。照れるというか、なんというか…。

湯気の間こうから、アイツの視線がちらちらこちらにもかつているのが分かる。

今笹原と向き合っているのは誰でもない、この俺だ。

俺の方がいけ好かないあのラーメン大将よりも優勢、なはず。

食後”こっちに構うな”とあの男を睨みつけてから、俺は思い切っ

て24日を笹原に聞いてみようと思ちを固めた。

それなのにあの男は眉を吊り上げてこっちにやってきたかと思ったら、笹原に親しげに声をかけながらキムチの盛り合わせをカウンタ―に置いた。

「いつもありがとうー！」等いつてるぐらいだから、笹原のヤツ、コイツにすっかり餌付けされているようだ。

それはそれは幸せそうな顔をして食べ始めている。

男は満足そうに目を細めてから、俺を馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

…およびじゃねーとでも言いたいのか？

俺はこのとき確信した。

結局、こいつも24日の笹原を独占しようと思論んでいる。上等だ。

俺はガキ根性全開で、さらに残ったキムチをひとまとめにして、全部まとめて口に入れてやった。

俺の心の片隅には子供の心がちゃんと息づいていたらしい。

驚いた笹原と逆上して目をギラギラさせた男の顔が俺に注目してる。何となく、気分がいい。

ふふん。ざまーみる。

ラーメンと餃子同様うまいキムチをじっくりと租借した。

…ちよつと辛いけど。

しかし、この作戦には穴があった。

「……ところでよ、瞳、おまえさあ、来週の木曜日、会社帰りにこれねえ？」

俺は一瞬口いつぱいのキムチを噴出しそうになった。
男がしてやったりと言わんばかりに、にやりと笑う。
くそおつ！

飲み込まなければ話もできねえ！

調子付いた男は嬉々として笹原に向かい合った。

「え？木曜日……って、24日？」

「おお！どうせ予定なんてないんだろ？な？いいだろ？」

隠しきれない熱心さで笹原を誘う男。

俺は気が気じゃなかった。

なのに……

「ごめん。」

12月23日は両親の誕生日で、22日会社終わったらすぐに実家に帰るんだ。

24日は朝かなり早くに実家から出勤することになるし、
夜は家に帰って休みたいの」

……笑顔でばつさりだな。

男の顔には明らかな落胆が見て取れた。

笹原はそれはそれは申し訳無さそうな顔をしているが…きっとコイツが伝えたかった感情になど全く気付いていないだろう。

人間の裏表にあまり縁のない人生を送ってるって事かもしれないが、全然空気が読めないヤツだ。

どっちにしろ、この回答は俺にとってもありがたい訳で。

親の誕生日を出された日には、今後を考えても強引に誘うわけには行かない。

けれど、会社が終わってから軽く夕食に…ならいいんじゃないか？
きつとどの店も予約で一杯なんだろうが、ありがたいことに何件か融通を利かせてくれそうな店はある。

夕方帰宅する笹原を捕まえて、無理やり24日食事に連れ出そう。

男が店主に怒鳴られて仕事に戻った後、ミルクを飲んだ後の子猫みたいに満足そうにしている笹原。

自分が数多の男を引っ掛けて、一喜一憂させてるなんて事に、全く気付いてないんだろうな。

幸せそうな顔を見ると、人の苦勞も知らないで…と愚痴らずにはいられない。

仕方ないこととはいえ、何でコイツはこんなに男を夢中にさせるんだろう？

しかも鈍いし。

見てるこっちはヒヤヒヤさせられる。

どっちにしろ危険人物を排除して、笹原を完全に手にするまで気を抜けない。

今のところ、このラーメン屋の男と樋口さんか…。

障害が多いほど燃えるタイプだし、諦めるつもりなど毛頭ない。

笹原に関しては、誰かに譲ってやるような気持ちには到底なれない。

さあ、どうしてやろうか？

俺の脳みそはフルパワーで回転し始めた。

「で、青年！首尾はどうかね？」

出先から戻ってきてホッと一息ついた時、背中に杉田の手のひらが勢いよく飛んできた。

イテエよ！コイツはっ！

顔だけで振り返り睨みつけてみるが、もちろん何の効果もない。

杉田の目は、期待に満ち満ちたようにキラキラ光っている。

…こいつ、結構おせっかいだったんだな。

「…ぼちぼちだよ」と覇気のない声で返事を返すと、杉田はため息吐き吐き大げさに残念そうな表情を作って、首を横に振った。
芝居臭いのが、いちいち癪に障る。

「あらあらあら。社内一の色男が聞いて呆れるわねえ」

…遊ばれてないか？俺？

プライドが高い俺は案の定ムカつとしたのだが、こちらが立場上格下という事はとっくの昔にはつきりしている。

腹の立つことに、頭が上がらないのだ、杉田には。

俺は重たいため息を吐いて、降参の意思表示として両手を挙げた。
それをみた杉田は、満足そうににんまりと笑んだ。

社内一の色男、か…。

確かに俺の過去には、いい加減な気持ちで付き合っていた女の長いリストが残っている。

だからって、自分が思っていたように”百戦錬磨のツワモノ”というワケではないという事実は、笹原との再会で痛いほど実感している。

本物の恋愛に出会ってうるたえる自分が、いかに不器用でだっせえか。

本気で惚れた女にどうやってアプローチすればいいのかなんて、全く分からないのだ。

致命的だなあ…と己の過去の悪行を罵ったりしている毎日だ。もっと実りある人生を送るべきだったのだ。

笹原を前にすると、ホント、ガキみたいに戸惑ってはかりだ。

恥ずかしくなっていていつも演じている自分の下に隠していたはずのありのままの自分がすっかり出っ放しだったり、意味もなくぶっくらぼうになったり。

ついうっかりにやけた顔になりそうになったり、ちょっとした事で嫉妬したり、彼女の仕草や気配に我を忘れそうになったり…。

ありえない体験のオンパレードだ。

初恋は、不本意ながら綾だった。

けど、心身とも大人へと成長した俺が初めて本気で恋したのは、笹

原だ。

綾の時には求めなかったものを、飢えを満たすような激しさで求めてしまいそうになる。

そして俺1人が与え護るだけじゃなく、俺もまた与えられ護られた
気持ち。

上っ面じゃなくて、弱さもずるさもなにもかも、心の奥底から全部
互いを分かち合いたいという強い欲求。

こういう感情のことをなんと表現すればいいのかわからない。

とにかく、笹原への想いはこれまでもこれからも特別だろうし、俺
が帰る場所は常に彼女である事実を彼女に認めてもらいたいのだ。
失いたくない…簡単に言えばそういうことなのだろう。

「で？今日は二人で過ごすつもりなの？」

物思いにふけていた俺は、突然の杉田の質問に面を食らった。

「何のことだ？」

本気でボケた頭で答えた途端、俺にだけ聞こえるような小さいドスの
聞いた声で「ふぬけ野郎」とのたまひ、同時にわき腹に拳を入れ
やがった。

コイツの男、よく我慢してられんなあ…猛獣じゃねーか。

「なっさけないわねっ！アンタ、だから言ったでしょ！？」

瞳ははつきり言わなきゃダメだつて！」

「ラーメン屋のにーちゃんが目の前で断られてるんだぞ？」

どの面下げてアイツに約束取り付けろつてんだよ！」

「ほんとー！クズっぽいいい訳！」

あの押しの強いラーメンラヴユー・カツぼんに持ってかれてもいいつての？」

「そんなことは言つてねーだろっ！」

ホント、イライラさせる女だ。

「どうせ今日は実家から会社行つてんでしょ？」

例年通り残業しないでケンタッキーに寄つてご飯食べて帰るだらうから、

今日は残業せずに帰つて会社前で拉致りな」

杉田の何気ない一言が、オレの興味を引いたのは間違いない。

「…おい、ふつー、年頃の女がクリスマス・イヴに

1人でケンタツて…あり得るか？」

「瞳ならありうるのよ。若干人とは違う感性で生きてるから」

「…そうか」

「そうよ」

これだけで全てが解決したような気分だ。

確かに、彼女はちよつと風変わりだ。

「…じゃ、今日は残業しないで帰るよ」
「ま、がんばって」

そういつて、杉田は去っていった。
全身の力が抜けたおれば、椅子の背もたれにもたれかかった。

ほんと、一筋縄じゃいかねーな。
でも。

だからこそ、アイツが益々欲しいのかもしれない。

…いや、アイツだから欲しいんだ。

残業せずに帰るといつつ、退社寸前に営業に泣きつかれ、トラブルの尻拭いを手伝う羽目になった。
幸いたいしたことではなかったので、30分ほどで抜けられたのだが…慌てて笹原の会社の前に駆けつけた時には、出てくる気配もない。

考えてみれば、連絡を取りたくてもメアドも携帯番号も知らなかった。

これを言うときつと杉田に馬鹿にされるだろうが、テンパってて聞くのをすっかり忘れてたのだ。
俺にあるまじき失敗だ。

腕時計の秒針を眺めているのに耐えられなくなり、とうとう杉田の携帯に電話することにした。

コールすること30秒。

もの凄く不機嫌そうな声が返ってきた。

もちろん、無視だ。

『あんたねえ…人がお楽しみのところ……』

「そんな話は聞きたくねえ。それよりも、笹原がどこにいるのか聞いてみてくれ」

『は？あんた、まだ瞳のケー番とメアド、ゲットしてなかったの？』

「…うるさい、いいからさっさと聞いて、メールくれ」

『あんたは馬鹿だし、あの子はもう…こういうときに限ってちゃっかり』

仕事と終わらせるんだから！

ま、いいわ。クリスマスプレゼント代わりに連絡してあげるわよ

「ありがとう。速攻頼む」

『多分駅前のケンタッキーにいますと思うけど…ちょっと待ってて。じゃー！』

返事をする間もなく、速攻切りやがった。

とにかく、欲しい情報はくるわけだし、とりあえず杉田の予想した場所に向かって歩き出すことにした。

そして3分ほど立ってから、チキンとオツケーの絵文字だけが入った杉田からメールが届いた。

俺の足の動きは確実に速まった。

クリスマスイヴにケンタッキーになど、はっきり言つて来た事がなかった。

ガキの頃はお袋の手料理だったし、大人になってからはもっぱら女と洒落たレストランで過ごしていたから。
ちよつと新鮮だった。

カウンターには人が溢れんばかりに並んでいるが、大慌てで汗かきながら走りこんでくる客など俺ぐらいだ。
ちらちら視線を感じるが、そんなことは気にしない。

人がまばらな客席に目を移すと、あっさりと笹原を発見した。
窓際の席にぽつんと一人で座つて、のんびりぼけつとしながら食べている背中。

寂しそうに見えないのは、きっと街灯がきれいだとかチキンが旨いとか考えてるからだろう。

俺は早足で彼女の席に辿り着いた。
食ってるのは、ビスケットか。

「…こんなところで、何してんの？」

何つてお前…俺がお前のためにどれだけ走り回ったことか……。
なんだか無性に腹立たしい。

深呼吸して気持ちを落ち着けてから、笹原の向かいの席に座った。

「で？何でこんな日に、たった一人でケンタッキーなわけ？」

再度強めに言ってみる。

案の定、笹原は一瞬で震え上がった。

明らかに挙動不審で、居心地悪そうに身体をもそもそ動かしている。

そういう仕草にも胸が高鳴り、ついついつかり俺の中のサディストがむっくり頭をもたげ始めた。

…が、何とか耐えた。

杉田に聞いた信じられない話は真実で、毎年ケンタッキーでクリスマススイヴを迎えていると彼女の口から聞いた。

ある種の驚きと共に、笹原らしいなあと妙に納得した。

とりあえず彼女とクリスマススイヴを過ごすことの出来るきっかけはばっちりつくった。

くだらないことで時間を潰したくはない。

うきうきと踊り出しそうな心を隠して、カバンを座席に放り投げた俺は、列が短くなったカウンターに注文しに行った。

買うもん買って戻ってきてても、笹原は疑うような視線のままだった。何気に居心地悪くて、いい訳めいたことをもごもご言ってから席に座った。

と、笹原の冷え切ったチキンが目に入った。

これじゃ美味くないだろうと思い、今注文してきたチキンと交換してやった。

うれしそうに食べ始めたのを見ると、幸せな気分になる。

純粹に可愛い。

たいしたクリスマス思い出も作れなかったことが悔やまれてならなかった。

だからせめて彼女には温かな食事を…と思ったのだ。

これまでクリスマスを過ごした女たちなら、きっと眉間に皺を寄せて目を釣りあがらせて怒ったに違いないのに。

コイツはたったこれだけで、心の底から喜んでくれるんだ。

俺は卑怯だと知りつつも、強引にお互いのメアドと携帯番号を交換した。それからさりげなさを装い、自分の実家のことやオレの立場について話した。

もちろん、俺の全てを知って欲しいという気持ちが大半だ。

しかし俺の立場を知った女たちが目を輝かせていたのを思い出し、少しでも笹原の気を引きたいという、俺らしくない姑息な作戦だということとは否めない。

家業や仕事のことを自分から進んで話すなんて初めてだ。

もしかしたら、俺のうちの家柄や財産のことで何らかの反応があるかもしれない、と内心ドキドキしていた。

なのに笹原はただただ感心したように、「そんなプレッシャーがかかる中でよくがんばってるね」と

尊敬のまなざしで俺を見ている。

コイツにとって俺は俺で、俺の家が金持ちだろうが貧乏だろうが全く関係ないのだ。

俺が持っている物質的なものじゃなくて、心のあり方に共感し、関心を向けてくれている。

笹原は、俺のバックグラウンドに惚れるような女じゃない。

そう実感できた瞬間、心の片隅にあった女への最後の警戒心が解けた。

無意識のうちに考えていた。

もしかしたら笹原もまた、これまで通り過ぎるだけの名前も覚えていない女たちと同じじゃないか、と。

もう二度と騙されたくない！頑ななまでに決意に縋るほど、俺は綾との件で未だに深い傷を抱えていたのだろう。

でも大丈夫だ。

笹原がいる限り。

世界中の全ての女が卑怯だとしても、コイツがらしいままでいてくれたら、それでいい。

笹原がいるだけで、世界が優しく感じられる。

もう既に、彼女は俺にとってかけがえのない存在になってしまった。

だから絶対に、誰にも渡さない。

どんな手を使っても。

忙しい！なんでこんなに忙しいんだよっ！！

きつと今、俺の目は血走り、毛穴の一つ一つから殺気を噴出しているに違いない。

ここのところ笹原に会いたくて、かなり仕事を後回しにしてしまった。

そのツケが今になって回ってきたって感じた。

あのクリスマスを過ごすためだったらこんな犠牲もいとわれないとは思うのだが、やっぱり辛いものは辛い。

身体はひとつしかないんだから。

その上、自分の仕事だけならなんとかあったはずなのに、年末で焦っていたせいか、営業たちのミスが重なった。

後始末にまで追われ、外勤がぐんと多くなった。

必死になって働いて、半ば足を引きずるように家に帰って、泥みたいに眠って…地獄のような毎日だった。

少しでも時間を稼ぎ出して笹原に会いたと思っていたのに、外せない用事のために実家に帰らねばなくなったり。

帰ったら帰ったで綾の総攻撃が待っていて、イライラも最高潮に達していた。

しかもせつかくメアドをゲットしたのに、笹原にメールの一つも送ってねえし。

子供っぽい悪態を心の中で吐きつつ、不貞腐れていた。

本当はメールでも送ろうと思って、何度となく携帯から彼女のアドレスを呼び出したのだ。

なのに携帯を握るたびに、妙なためらいが頭を掠めるのだ。

『仕事、がんばってるか？』…思いっきりオトモダチ過ぎるメールって、どうよ？もつと気持ちを込めて…

『お前に会えなくて、寂しいよ』…どん引きされたらどうすんだよ？もつとさっぱりしたものはないのか？

『元気か？』…なんじゃそりゃ。

結局悩みに悩んで、一通も送れなかった。

馬鹿だろ、俺。

ありえねえよ。

そんなこんなでずるずると、年末までできてしまった。

世間では、今日は大晦日と呼ばれている。

笹原と一緒に年末年始を過ごせると当て込んで、昨日も一昨日も我慢して親戚筋の所用を手伝うために実家に泊まっていたのだが。さすがに今日は家に帰れたかった。

もう綾のお守はゴメンだ。

昨日深夜まで仕事をして、ようやく家に辿り着いたと思った瞬間、スーツのままベッドに倒れこむようにして眠っていた。

朝起きた時、よれよれのスーツとぼさぼさの髪、情けなく伸びた無精ひげがいかに惨めだった。

けれど、これでもうやく年明け3日まで時間が出来たのだ。

笹原に連絡して今からあいつの実家に向かえば、大晦日から正月にかけて初詣にかこつけて一緒に過ごせるかもしれない。

母方の本家への挨拶は年末の手伝いをしたことだし、パスしても平気だろう。

笹原の実家は静岡と聞いてるし、京都にある父方の実家へは笹原と別れてから車を飛ばして行けばいいだろう。

一緒に連れていけたら、なおいいのだが。

せつかく笹原の中ではラーメン男はただの友達という事が分かったんだ。

樋口さんもこのところ忙しくて笹原にちょっかいかけられる状況じゃないし、杉田は俺に全面協力することを約束してくれている。

だからここは押して押して押し捲るしかない。

仕事に奔走するばかりで何のアプローチも出来なかったことが悔やまれてならない。

俺は携帯をじつとにらみつけた。

………。

…わかってる。

忙しかったとはいえ、堂々と連絡を取れるようになったのに何も出来ないでいるなど俺らしくない振る舞いだった。

恥ずかしい話、何故か笹原に連絡を取ろうとすると、まるで初恋に

浮つく子供のように緊張してしまうのだ。

何の用事もなく電話するのもなあ、とか。

メール、何書いていいのかわかんねえ、とか。

理由がないとかっこ悪くて出来ない……って、やっぱりまるつきり中学生レベルだ。

俺は頭を抱えなくなった。

自分からアプローチしたことなど、俺の人生では本気でありえなかったのだ。

女の方から勝手に電話してきたり、押しかけてきたり、はたまた頼みもしないのに服を脱ぎ出したり押し倒してきたり……女に関して努力という言葉は、俺には一切なかった。

要は経験不足なのだ。

やることはちゃっかりやって25年も生きてきて、恋愛経験が薄いというのはかなり恥ずかしい話だが、事実が事実として認めよう。

ここでずっと携帯を睨みつけていても始まらないことぐらい分かっている。

覚悟を決めて電話をかけるべく、深呼吸数回で気持ちを落ち着けてから、俺はアドレスから笹原の名前を探し出した。

携帯を握る手に汗が滲んできた。

俺はゆっくりと強く押し込むように、ダイヤルボタンを押した。

なのに、携帯は無情にも電波の届かない地域にいるか、電源が入っていないか……と機械的な声が返って来ただけだった。

あれだけ力が入っていただけに、拍子抜けだった。

今度は一回目よりも楽な気持ちでダイヤルした。
やっぱり出ない。

時間を置いて掛けなおすが、全く繋がる気配すら見せない。

さすがの俺も焦り始めた。

もしかしたら何か事件か事故に巻き込まれたんじゃないか、とか。
病気でもしてるんじゃないか、とか。

メールも何通も出した。

けれど、何の音沙汰もなかった。

半日ちよつとで痺れを切らし、恥を忍んで杉田に電話を試してみた。
が、こちらも繋がらず。

年末年始、一体何やってんだ？

年が明けると、もう約束出来なかったことはどうでもよくなり、心配で心配で仕方がなかった。

何とか連絡を、と、正月3日間、隙を見ては電話をかけた。
けれどやっぱり繋がらない。

一体何が起こったのだろうか？

毎年恒例の親族との新年の挨拶に回っている間も、焦りでイライラしていた。

もう、何もかも投げ捨てて笹原の元に向かいたい。
死ぬ気で探せばみつかるかもしれないし。

それにしても、何で実家の住所ぐらい聞かなかったんだろう？
笹原のことでは、呆れるぐらい全てが後手に回っている。

ついにお手上げ状態になった俺は、結局再び杉田の携帯にかけてみた。

繋がった……っ！

俺の心は期待で跳ね上がった。

10回コールぐらいでようやく出た杉田は、けだるそうな声で『あけおめえ……』と言った。

衣擦れの音や男の囁き声が雑音のように入ってくるのが腹立たしい。全くもって、結構なご身分だ。

こっちは干からびそうないだつてのに。

「新年早々すまないが、笹原を捕まえてくれないか？」

『……あんた、メアドと携番聞いたんじゃないの？』

「つながんねーんだよ。年末からずっと」

『おかしいわねえ……考えてみたら、毎年合宿から帰って来た頃にメールくれてたのに。』

……って、どうしよう！何かあたんだ、絶対！……』

「落ち着け、杉田。とにかくあいつに連絡とってみてくれよ。頼む……」

『悪いけど、すぐ切るね？瞳の実家に電話するから』

「りょーかい。俺、今日休日出勤するし、会社に出てるから。」

携帯が繋がらなかったら、そっちに連絡くれ」

『これ、高くつくからね、覚悟しといてよね』

言いたいだけ言って、ぶつんと電話を切られた。
小声で悪態を吐きつつも、これで笹原の様子がわかればよしとしよう
と矛先を収めた。

これで必ず連絡は取れるはず。
そう考えただけで気持ち少しだけ軽くなった。

今日はまだ業務は休みなので、早めの昼メシ食ってから出社した。
昼からは樋口さんと新年早々提出予定の営業計画について詰める予定だ。
その前に片付けたい書類が2、3あったので、ちゃっちゃんとやってしまうことにした。

丁度作業が終わりファイリングしている時、樋口さんが出社した。
休日出勤なのでスーツではなく、ラフな私服だ。

こうして改めて見てみると、彼はセンスがよく、大人の落ち着きがあり、男の目から見ても格好よかった。
なにより、性格がいい。

何事にも一生懸命で、思いやりのある頼りになる先輩だ。

そんな彼が笹原を狙ってるなんて……そして俺は全力で勝負をかけよう
としているのだ。

あれこれ考えていると感情が複雑に絡み合う。
だからあえて考えない。

どっちにしる譲れないことだから、何も言えることなどないのだ。
そのためには、どんなことでも樋口さんには負けられない。

そういつた覚悟を自分自身に知らしめる意味でも、今日はこれまでに
以上に真剣に仕事に取り組んだ。
ちよつとした食い違いでも放っておいたりせず、意見をぶつけ合った。

お陰で樋口さんとの距離が近くなり、彼のことを改めて見直した。
そして相手も俺を認めてくれているからこそ、こうして対等に向き
合えたことがうれしかった。

調子よく仕事が進み、終わりも見えた頃。

フロアへと続く廊下から、足音が響いてきた。

明らかに怒っているような、焦っているような音だ。

休日なのに誰か出社したのだろうか？こんな時間に？

首を傾げつつも書類をまとめ始めた時、肩をぽんぽんと叩かれた。

ぞわつと殺気を感じたが、反射的に振り返ってしまった。

と、その瞬間、右頬にもの凄い衝撃を受け、椅子に座った体が左へとよろめいた。

樋口さんは目を見開き、口をあんぐりと開けたまま硬直している。

そりゃびつくりするだろうよ。

心の中に枯れた笑いが込み上げ、今殴りつけてきた相手の方をゆっくりと見た。

予想通り、そこにはまるで仁王のように怒りの炎に包まれた杉田がいた。

すっぴんの彼女はたいそう迫力満点で、怒りで釣りあがった目に既に3回は殺されたような気分だった。

振り上げた姿を見るに、どうやら裏拳を繰り出したらしい。

頬がじんじんして、口の中に血のサビ臭い味が広がった。

歯が折れなかったただけラッキーだったが、ほっといたら明日腫れ上がるに違いない。

…笹原に一体何があったんだ？

内心焦れながらも、杉田が口を開くのを待った。

よほど気が立っているようで、未だに肩で息をしている。

どうやら数発は殴らないと気がすまないところを、必死になって1発で我慢しているようだ。

「……あんだ、私の忠告、聞いてなかったね？」

奥歯をぎりりとかみ締めながら発せられた言葉は、怒りで震えていた。

よっぽどの事があったのだらうと、俺は眉間に皺を寄せた。

「何のことだ？」

「とぼけんじゃないわよっ！このクソやろうがっ！！」

よくも…っ！よくも私に嘘付いた拳句、瞳を傷つけてくれたわねっ！」

「だからっ！何の事だって聞いてんだよっ！」

「ふざけんじゃねーよっ！」

アンタ、女と関係ないとか言いながら、裏では結婚の準備進めてたんだって？

この、鬼畜野郎がっ！

あんだ信用して瞳を託した私が馬鹿だったわよ！」

「結婚っ！？なんで俺が知らないところで、結婚話なんて進んでんだよっ！」

「とぼけんなっ！」

アンタの女が瞳にわざわざ電話かけてきて、そう言ったんだよ！
年末の30日につ！

あの子が一体どれほど傷ついてるか…」

あの女が！？

瞳につ！？

俺はカツとなって杉田の両腕を掴んだ。
そんなこと、俺は一切知らないっ！

「ちょっと待て！…おい、詳しく話せ、それ」
「偉そうにつ！話の腰折るんじゃないわよ！」

気が強い杉田は、まだ俺に噛み付いてくる。
いい加減、我慢も限界を越えた。

「いいから話せつつってだろっ！」

イライラした俺は、怒りに任せて腹の底から叫んだ。
それが功を奏したのか杉田は、少々ではあるが落ち着きを取り戻した。

「だっ…だから、30日に、アンタの幼馴染の…なんだっけ？
…まあ、いいや、から電話があったのよ。」

アンタの携帯から。

その女が瞳に言ったのよ。

今アンタと婚約中で近々結婚するし、邪魔になるから近づくな。

アンタが瞳に近づくのは、瞳の事が哀れだからだって」

「はあっ！？なんだ、それっ！」

「嘘じゃないわよ！」

アンタから連絡あった後、携帯に電話してもメールしても全然だしさあ、

実家の方に電話したらもう、ぼろっぼろだったんだからっ！

事情聞いて、それで私、アンタに一発お見舞いしないと気が済まないって…

…そうよ、アンタ、自分の履歴見てみなさいよ！」

そう言われる前に片手で携帯を取り出し、発信履歴を調べた。

すると…あった、30日、してもいない電話の発信履歴が。

笹原に連絡したくてもなんだかこっ恥ずかしくてどう言えばいいのかわからない…などと柄にもなく乙女モードに入っていた頃だ。

悔しすぎて、携帯を壊れそうになるほど握り締めた。

「…あった。この日、実家に行ってたんだよ。」

ほんの一時間ぐらい携帯放置してたから…その時使われたんだな」
「ってことは、アンタは無実だって言いたいよね？」

「言いたいんじゃないくて、無実だよ…っ！あのクソ女がっ！！」

大人になってから初めて、腹の底から巨大な怒りが湧き上がった。

綾の顔を思い浮かべただけで、腹立たしさからむしように何かを殴り倒したくなる。

怒りが大きすぎて力加減ができなかったようで、杉田が「痛いわよっ！」と今だ彼女の腕を掴んでいたオレの左手を払った。そこではっと我に返った。

これ見よがしに腕をさすっている杉田は、どうやら俺への誤解を解いてくれたようだ。

俺は深呼吸して息を整え「悪かった」と謝った。

「…わかった。アンタは嘘をついてない。

で、これからどうするつもり？

同じような事が起こるなら、もうアンタに瞳は任せられないわよ」

「アイツ、いつ帰ってくるんだ？」

「明日、朝、実家から出勤するって。

携帯は電源入れるように言つといたし、何なら実家の電話番号も教えられるわよ？」

「…いや、いい。明日直接会って話がしたい。

ちゃんと顔を見て、くだらない誤解を解いておきたいんだ」

「了解。だったら明日の瞳とのデート、譲ってあげるわ。

就業後、駅前のスタバ。6時半までには駆け込むように」

「…ありがとう」

願ってもないチャンスを与えられたことにほっとして、素直に心からの礼を言つと、照れたのか、杉田が唇を尖らせた。

「別にアンタのためにつてわけじゃないわよ！勘違いしないでよね？」

「だったら、僕にその時間を譲ってくれよ」

突然割って入ってきた声。

忘れてた、樋口さんがいたこと。

「げ…」っと小さく呟いたところを見ると、杉田も樋口さんの事が目に入っていなかったようだ。

…ま、避けて通れる道じゃねーわな。

俺は腹を括って、樋口さんと向き合った。

「樋口さん、それは無理です。絶対に出来ません」

「なぜ？君はどんな形であれ、笹原さんを傷つけたんだろう？」

杉田さん、確か、笹原さんにアプローチするなら、

絶対に傷つけない事が条件だって言ってたよね？」

「はい…確かに」

「だったら、君の基準からしても、既に富樫に

その権利はないってことじゃないのかい？」

「…樋口さん、いくら樋口さんでも…っ！」

かっとなった俺は、肩を怒らせて殴りかからんばかりの勢いで言った。

笹原だけは譲れない。

アイツは俺だけのもんだ。
誰にも渡せない…っ！

戦闘態勢に入った俺を杉田は冷静に片手で止め、樋口さんを真直ぐに見た。

「確かに、私は傷つけるのは言語道断だと、今でも思ってます。
瞳に近づく男は、彼女を傷つけない人間って事が最低条件の一つ
です」

「だったら、明日僕が彼女を慰める時間をもらっても
いいってことにはならないかい？」

そこから恋が芽生えるって可能性は、ないわけでは、ない」

「そんなことっ！！」

「富樫、黙れっ！」

杉田がぴしゃりと言った。
しぶしぶ口を閉じた俺をひと睨みしてから、再び樋口さんに向かった。

「無いわけではないでしょうね」

「じゃあ、僕に君の時間を譲ってくれないかい？」

「だめです」

杉田は、潔いきっぱりとした口調で断った。
俺は心の中で拍手を送った。

不服そうに眉を上げた樋口さんは、「なぜ？」と優しく問いかけた。優しい口調と違い、目はいつになく鋭かった。

「傷つける人間は、言語道断です。

ですが、瞳を心の底から傷つけることの出来る人間は、例外です。だって、あの子の精神までずたばろに出来る人間は、あの子が心の底から愛した人間以外にいませんから」

杉田が言葉を切ると、三人しかいないフロアに、コンピューターが作動する音だけが響いた。

「私は、あの子の気持ちを無視することは、絶対にしません。

私にとって一番大切なことは、瞳が心の底から幸せになることです。

それが私が瞳の幸せと想像していたこととは全く違う形であったとしても、

たとえ私がそれに不満を感じていたとしても、

あの子が一番笑顔であの子らしく生きていけるようにしたい。

瞳以外の人間の価値観なんて、あの子の人生にとってはくそくらえなんですよ。

だから、その可能性を邪魔する人間とは、障害物として、全力で阻止します」

直立不動で言い切った杉田は、男の目から見てもめちゃくちゃかつ

こよかった。

…これでは、杉田に笹原を持っていかれるかもしれない。
そんな下らないことを考えていたら、樋口さんがくつくつと笑い出した。

「最強のブロッカーだね、杉田さんは。

本当は富樫君と直接対決したかったんだけど、それすら許されな
いらしい」

「杉田がいようがいまいが、俺はアイツを誰にも渡しませんよ」

唸るような声で言うと、樋口さんはにんまりと笑った。

「おっと、こちらも手ごわそうだな…笹原さんが小さい頃から恋し
続けるはずだよ」

「…気付いてたんですね、瞳の初恋の人がコイツだって」

杉田が顔を顰め、俺の肩を拳骨で殴った。

「そりゃ、気付かないわけないよ。

あの宴会の時、富樫君が現れた途端、全てが彼女の顔に出ていた
んだから。

それに、富樫君の様子を見ていたら一目瞭然。

普段のポーカーフェイスなんて跡形も無かったからねえ」

ニヤニヤと笑いながら話す樋口さんは、それはそれは楽しそうだった

た。

考えてみれば、そりやそうだろう。

あの時はもう、周囲の事なんて何にも考えられなかったんだから。

「なんで…黙ってみてたんですか？」

私に…あの、頼みごとまで、してたのに…」

杉田が、珍しくためらいがちに聞いた。

すると樋口さんは一瞬哀しそうな目をして、それからきっぱりと言った。

「君と同じ理由だよ。僕ではだめだと、あの瞬間にはつきりわかったからさ。

彼女の初恋は憧れとかそんな軽いものじゃないと、涙で語っていたじゃないか。

そして、富樫も同じぐらい彼女の心を真直ぐに見ていた。いくら僕がアプローチしても、ちつとも振り向いてくれなかったのに。

付け入る隙もないって感じだったな」

「樋口さん……俺…」

「謝るなよ、ばーか！完全に吹っ切って許したってワケじゃないんだから。」

杉田さんがやってなかったら、僕がその頬を殴ってたよ。

…けど、げっそりやつれるほど痩せた理由がわかったら、その気も失せたけどね」

やっぱりいい男だ、樋口さん。

俺は彼の目を真直ぐに見て、真摯な態度で誓った。

「俺、彼女を絶対に幸せにしますから」

杉田がひゅう、と口笛を吹いた。

「その言葉、忘れないように」

樋口さんに恥じないように、彼女を愛し続けよう。
俺は決意を新たにした。

翌日、早朝から出てきて、とにかくがむしゃらに働いた。

お陰で残業はほとんどなく、6時半までにはスタバに到着できそう
だ。

俺はホッとして、肩の力を抜いた。

冬の寒さがコートを通して凍み込んでくるほど寒い一日だったのに、
額にうつすらと汗が滲んでいるほど体が火照っている。

すでに日が落ちて真っ暗になり街灯と電飾が輝く街を、行き交う人
を避けながら黙々と歩いた。

笹原は：瞳は、もう来ているのだろうか？

心臓がバコバコ鳴っているのは、勝手に足が動いて小走りになって
いるだけが理由ではないだろう。

今日、昼休みに杉田が激励の一口チョコを持って来てくれた。

「糖分摂つといた方が、血行の悪い脳みそに血が巡りやすいかもよ
？」って台詞は、彼女なりの励ましの言葉だったのかもしれない。

たとえからかわれたかバカにされたように感じたとしても。

終業間近には、今度は樋口さんが「ま、今日はがんばれ。もし君が
ダメだったら、僕がもらうから」と背中を叩いていった。

反射的にイライラしてきたが、この場合我慢すべきことだろうと思
い直して堪えた。

これだけ励まされていると推測されるのだから、確実に結果を残す。そして、期待以上のものを上げてくる…仕事ではそう考えて努力してきた。

瞳のことは言うに及ばず、だ。

絶対に、誰の目からも明らかなぐらい、誰もが羨むぐらい、幸せに
してやる。

杉田の電話の向こうの灼熱のような関係以上に熱く、樋口さんが神経性胃炎を患うほどに甘い関係を…。

見えてきたスタバのウィンドウに、一人座っている瞳を見つけた。
窓の外に顔を向け、頬杖を付いたまま目を閉じる彼女。

まるで大切な何かを諦めたような表情に、一気に胃が冷たく縮み上がった。

もしかして、手遅れだったのか？

もう、間に合わないのか？

まるで転がり込むかのように、俺は店に飛び込んだ。

オレの顔を見た瞬間、瞳はあんぐりと口をあけて停止した。

…こいつ、どんな時でも驚くとこんな顔になるんだな。
いつもと変わらないところが見つかっただけで、安堵感で体の力が
抜けそうだった。

大丈夫。

まだ何も終わっちゃいない。

だから。

絶対に、逃がさない。

俺は気合を入れるべく、コーヒーを買いにカウンターへ向かった。

テーブルに戻してみると、わずかにショックから立ち直っている瞳
はちょびちょびとミルクがたっぷり入ってそうなコーヒーを飲んで
いた。

ケーキはまだ食べかけのまま残っている。

…相当苦しんで、いたんだろうな。

目のふちが腫れぼったそうにむくみ、心なしかげっそりした頬に気
付き、自分の愚かさを見せ付けられた気分になった。

杉田にどやされるのは当然だ。

俺は胸の痛みを紛らわせるように、コーヒーを口の中に流し込んだ。
殴られて切れた唇に、ちりつとした痛みがしみる。

「どっ、どうしたのっ！？怪我してるよ？」

突然、瞳のほっそりした手が俺に向かって伸びてきた。

どうやら、殴られた後に気付いたみたいだ。

自分がどれほど落ち込んでいても、辛くて苦しくてどうしようもなくとも、相手を気遣い、心配してくれる彼女の優しさに触れ、胸が切なくなる。

当たり前のように向けられる心配そうな目と伸ばされる指先が愛しい。

”その綺麗な指先で、優しく触れて欲しい……”

湧き上がる期待に心臓が高鳴る。

なのに、触れようとする直前、びくんと震えた指の動きが止まった。

瞳は、まるで自分の身体に俺と同じ傷があるかのように、痛そうに顔を歪めた。

届かなかった指の代わりに、彼女の優しさが心のずっと深いところに触れ、痛みが和らいだように感じた。

けれど。

お預けを喰らった犬の気持ち、今分かった気がする。

正直、痛い場所でも何でもいいから、彼女に触れて欲しかった。

もっと言うなら、自ら手を伸ばし、好き放題に彼女を撫で回したい。

これまで押さえつけていた猛獣が、彼女を求めて暴れ出しそうだ。

俺はぐつと歯を食いしばり、自分の感情を押さえ込んだ。

けれど瞳は俺が怒ったと勘違いしたみたいだ。

目が切なさうに揺れ、ゆっくりと彼女の手が遠ざかるうとしている。

くそっ！

日ごろのポーカーフェイスはどこにいたんだっつーのっ！

俺は逃がさないとばかりに、素早く瞳の手を握った。

柔らかくて小さな手だった。

愛しさが後から後から湧いてきて、心が満たされていく。

こんなにも激しくも優しい感情は、一体どこから生まれてくるのだろうか？

怖くなった俺は瞳の温もりを心地よくももどかしく思いながら言った。

「この怪我は……大丈夫、たいしたことないんだ。

むしろ必要だったし、受けて当然の報いだ。

だから、おまえが気に病むことなんて何もない」

瞳の頬がぼつと赤らむのを見て、青臭さ丸出しの台詞が勝手に飛び出してしまっただけで真剣な自分をさらけ出してしまった事に気付いた。恥ずかしくなって、勝手に頬が熱くなる。

…向かい合って頬を互いに赤らめるって…一体いくつだよ？

当初の”かつこよく決めるぞ”作戦が、瞳の純粹さの前でもろくも崩れ去ったことを知った。

そして、生まれて初めてつつかえながらたどたどしく、女を食事に誘うこととなったのだ。

瞳の目が期待と喜びでキラキラと光った。
つられるように、俺の口元が緩んだ。

が、次の瞬間、彼女は息を詰めた。
俺は、綾のことを思い出したに違いないと確信した。

”ここまできて、断らせるかつ！”

俺は強引に約束を取り決め、遅々として減らない瞳のケーキを一口で食べてから、彼女の手引いて店を出た。
必死だった。

彼女がうるたえているのは分かっている。
けれどこの機会を逃してしまったら、きっと2人の溝が埋まるには、長い時間がかかることになるだろう。
もしかしたら、埋まらないまま瞳の心からフェイドアウトだ。
それにぼやぼやしてたら、魅力的な彼女は横からかつ攫われてしまいかもしれない。

焦りが焦りを呼び、不安の波が絶えず押し寄せる中、彼女の手の温もりだけを支えに、俺は歩き続けた。

目的地は、電車で何駅か先にある。
俺たちが再会した、記念すべき場所。
ここから全てを始めたいと、柄にもなく感傷的な気分になっていた。

駅ホームに立った時、少し呼吸が乱れた瞳をちらりと盗み見した。駆け抜けるように駅まで引つ張ったせいで上気した頬と乱れた髪……無性に抱きしめたくなった。

電車に乗ったら、満員なのをいいことに、瞳を柔らかく抱きしめた。甘く優しい瞳の香りが鼻をくすぐった。

たまらなく愛しくて、全身全霊で守りたくて、耐え難いほど欲情した。

本当は潰れるぐらいに強く抱きしめたい。

瞳の身体の隅々に、俺という証を刻み込みたい。

でも、その前に彼女に話すべき事があるんだ。

俺は必死になって逸る自分を押さえ込んだ。

ようやく目的の駅について、再び強引に瞳の手を握って歩いた。出来るだけくっついていたかったから、手のひらを合わせるようにして指を絡めた。

時々親指で手の甲をなで、彼女の柔らかさを堪能した。

”コイツはオレの気持ちを、ちゃんと受け入れてくれるだろうか？”……なんて、気を許すとひたひたと押し寄せてくる不安と戦うために。

「…ねえ、富樫君、どこに……」

瞳は不安そうな目を俺に向けた。

誰も連れていったことのない行きつけの家庭料理の店だと答えようとした。

なのに。

響いてきたのは、あの忌々しい声。

「雄大君っ！」

媚びた甘い声でも、顔は般若のような激しい怒りを隠し持っていることを物語っていた。

いくら彼女が名女優でも、俺の目はもうごまかされやしない。

…ってか、もう飽き飽きしてるからな。

瞳との大切な時間を邪魔されたのには腹が立ったが、丁度いい。ここでまとめて決着をつけてやる。

俺は冷めた目で綾を真直ぐに見た。

…瞳を恐ろしげに睨みつけているのも気付いた。

まさしく、日本のホラー映画の恐怖そのもの。

まったく……変わらねえな、昔っから。

「ねえ…雄大君…今日は私…すっごく嫌な事があって…」

…どうしても雄大君にお話聞いてもらいたくて…。

そうしてもらえなきゃ、私、立ち直れそうに無いの…苦しくて。

お願い。いつものお店で相談に乗ってくれない？ね？いいでしょ？」

芝居がかったポーズと純情可憐風な台詞、それに歌うように甲高い声。

なのに、彼女の心の中はそれらの全てに対して真逆だ。

積みもり積みもった鬱憤と共に、俺の中で何かがぷつん、と切れた。もう、我慢できない。

俺は腹の中に溜まった怒りを吐き出すために、ふう、とため息をついた。

「やめてくれ」

言うと同時に、胸に置かれた彼女の手を払いのけた。

今まではつきりと拒絶された経験のない綾は、心底驚いたような顔をしていた。

そこで、もう一発先制攻撃の爆弾を落としておくことにした。

「俺は、コイツと結婚を前提に付き合ってたんだ。誰にも邪魔はさせない」

「な…っ、なんですって!？」

目が飛び出すんじゃないかと思うほど、綾は目をひん剥いて叫んだ。

言葉も出ないほど驚いているのが分かる。

けど…こういう表情って、ホラーマンガでよく出てくるよなあ？
意地が悪いとは思うが、思いついた途端笑がこみ上げ、何となく気分が良くなった。

少しだけ出来た心の余裕から、俺はちらりと瞳の方に目を向けた。
こっちはぼっかりと口を開いたまま固まっている。

…ん、かわいい。

どつきりを仕掛けた後に見たい顔ベスト1だ。
これからは時々サプライズを用意して、この表情を楽しむのもよさそうだ。

近い未来の予定表に書き込みをして一人で満足していると、綾がパニックなりに正気に返りつつあったらしい。

「何言ってるの！？正気なの！？こんな女とっ！？」

正気かって？

瞳を手に入れたという欲求が狂っている証というなら、愛し合うカップルは全員手に負えない狂人だ。

こんな女だと？

この一言が一番許せない。

瞳にはそんな呼び名は似合わない。

どす黒い感情が再び俺の中から沸々と湧きあがり、もはや周囲に駄々漏れだ。

「綾：今すぐ彼女に謝れ。そしたら君のその失礼な態度もなかったことにしよう」

こいつを傷つけることだけは、許さない。
俺は綾をまともににらみつけた。

それでかえって冷静になれたのか。
綾はうるたえながらも以前のペースを取り戻し、傲慢にも言い放った。

「：ごめんなさい。でもそれは、雄大君が悪いのよ？
だって、おじさまもおばさまも私がお嫁に来るのを楽しみにしてるって仰って下さってたのに、
突然結婚を前提にしたお付き合いをしてる人が居るなんて…」

…楽しみにしてるのは、お前とお前のお袋だろーが！

「私のことっ！好きって言うてくれたじゃないっ！」

…ガキのたわごとが契約として有効なら、大人になる頃には重婚罪に問われる人間で裁判所はおおわらわだ。

「それはガキの頃の話だろ？大体、君はずっと兄貴に夢中だったじ

やないか。

それに、子供のおままごとのような話を今まで信じているほど、俺たちの仲が幼馴染以上に発展したことなど過去一度も無いじゃないか。

…そうだろ？」

綾は紙みたいに真っ白な顔で、息を呑んだ。

力を入れて噛まれたグロスでツヤツヤと光った下唇にめり込む前歯が、わずかにぎりぎり左右に引かれている。

ようやく悪い頭に血が巡ってきたようだ。

上等。

やっと本題に入れる。

「ね、あの、2人とも、ちょっと落ち着いて…人目もあることだし、ね？」

戦闘態勢に入っていた俺は、瞳の声ではたと気付いた。

周囲を見回してみると、通り過ぎていく人たちが面白そうにちらちらとこちらを見ている。

これじゃ、瞳が可愛そうだ。

俺は場所を変えることをそっけなく告げると、瞳の手を握って歩き出した。

綾の恨めしげなヒールの音が、背後から響いてきた。

海が見える広場には、人の気配がほとんどなかった。
話し合いには丁度いい。

俺は闘志を胸に綾に向き合った。

が、俺が口を開こうとするよりも早く、綾が機関銃のように瞳を攻撃始めた。

「…あなたの目当てはなんなの？
財産？

それとも、雄大君の容姿に釣られたの？
善人面で私は何も知りませんって態度で、ほんつと、頭にくるわ！
いやらしい、最低の女ね！」

いやらしい最低女はお前だろうがっ！
俺はいい加減にしろ、と怒鳴りつけた。
なのに、この厚かましい女はまだ自論をぶちかましている。

「だってっ！私、雄大君だけなのに…っ！
絶対にこの女、雄大君のおうちがお金持ちだから近づいただけの女よ？」

これまでずっとそんな女を軽蔑して、距離を置いたり切ったりしてきたじゃないの！」

…だからそれは瞳じゃなくて、…。

オレの中でかろうじて残っていた紳士な一面が崩壊した。

こんな人間でも幼馴染だし、瞳にあまり黒い自分を見せたくないという計算も働いていたのだが、もうどうでもよくなった。

頭の中が冴え渡り、残虐で冷酷な部分が支配権を広げていく。

大きな相手との交渉の時にしか現れることがない、情に惑わされることなく的確に追い詰めていく俺の一面。

過去、腹割って話せる連れからも恐れられた極悪モード。

もう、容赦しない。

まずは心の中で両親と綾の親父さんに詫びを入れた。

「…だから、君とも距離を置いたんじゃないか」

「…なんて…？」

綾が再び呆然と見つめてきた。

俺の口角は、自然と上がった。

「だから、俺が何も知らないと思ったたら大間違いだってことだよ。」

君の交友関係についてはおおそ把握しているつもりだし？」

「…何のこと？」

「俺の両親や親戚が持っている財産や地位を狙っている女をリストアップしろと

言われたら、俺は真っ先に君の名前を書くよ。

それについては、反論の余地なし、だろ？」

「そんなっ！」

焦ってるな。

うぬばれるあまり自分がぼろ出してるなんて、考えもしてなかったんだろ？

実は、こいつが見知らぬ男とホテルに入っていく姿、過去3回は目撃しているのだが。

盛りの付いた犬のようにやりまくってるの、マジで知らないと思ってたんだな。

俺の財産狙ってることを知らない、手玉に取りやすい男だと。

中学の頃と変わらず、綾を崇拝している安全パイだと。

そう考えていたわけだ。

…むかつく。

「それに、俺が結婚を急ぎたいと思うほどに惚れ込んでいるのは、君じゃなくて瞳だ。

俺が選んだ相手に何故ケチをつける？君に決定権などないのに」

「私はっ！雄大君のことを考えて…っ」

うぜえ。

俺のためとか言えば、何しても許されると思っっていること自体うざい。

猿みたいな綾の叫び声を片手で制し、きっぱり言いきった。

「俺の気持ちを考えてくれると言うなら……今すぐどこかに行ってくれ。

そしてもう二度とこんなことで俺たちを煩わせないでくれ。

俺が穏やかに話をしているのは、単に家族や瞳のことを考えてのことだ。

くだらない自分本位な理由でオレの大切な人たちを苦しめるのであれば、

誰であろうと許さない。

親父と君の父親の関係がなければ、俺はこれまで言い寄ってきた女たちと

同じように君を切ると断言するよ。

これ以上、どういえばわかってもらえるんだ？」

ちよつと困ったように芝居丸出しに眉を上げてやると、ショックと怒りのせいか綾の顔は青ざめていった。

よろよろと後ずさりしたところを見ると相当のダメージを受けたかと思いきや、バッグで街灯を殴りつけるところが彼女らしい。

けど、あれはかなりプライドが傷ついたな。

自業自得だ、少しは反省しろ。

これでよかったと思いつつ、正直、心は複雑だった。

子供の頃、純粹に思い続けていたあの少女は幻だったのだと思うと、やはりやるせない。

今の彼女の生き方に賛成も共感も出来ないが、彼女なりの幸せを掴んでくれたらと純粹に願っている。

これでも少しは敬虔さを持ち合わせているつもりだ。

綾の後ろ姿をぼんやりと見送っていたら、突然瞳がその場に座り込んだ。

慌てた俺は「おい！大丈夫か！？」と叫び、両手を彼女の頬に当てて顔を覗き込んだ。

真っ青だ。

こんな修羅場、精神的にもきつい年末年始を送っていたはずの彼女にはかなり辛かっただろう。

そんなことにも気付いてやれない俺のアホさ加減に嫌気が差した。

大きな目から大粒の涙が次々と溢れ出した。

苦しい。

また彼女にこんな顔をさせるなんて。

「…怖がらせて、悪かった。

こんなことになるなんて、思ってもみなかったんだ…許してくれ」

許しを請うように、額に小さなキスを落とした。

彼女が感じている苦しみを全て拭い去りたくて、流れ続ける涙を唇

ですくい取る。

少し塩辛い涙の味が広がる舌尖に、確かに彼女の温もりを感じた。柔らかくて滑らかな彼女の頬を舌尖に感じる度に罪悪感は薄れ、代わって心の奥底に閉じ込めていた欲望がむくむくと頭をもたげた。

瞳の涙が止まる頃、許しを求めるためのキスは、より情熱的な意味合いのものに完全に姿を変えていた。

最後に額に落としたキスは最初のキスとは似て非なるもの。

慰め、労わるのではなく、求め、奪いたいという宣言のキス。

瞳は、そのことを理解しているのだろうか？

きつと一つも理解していない無邪気な彼女が可愛くて、視線を合わせた途端笑ってしまった。

彼女は耳まで真っ赤に染めて、明らかに恥ずかしがり、戸惑っていた。

愛しさが後から後から湧きあがり、自然と笑みがこぼれる。

これを幸せと言わずして、なんと言えればいいんだ？

彼女と再会できて、本当に良かった。

運命の女神は俺に味方してくれたんだ。

陳腐な使い古された台詞が、今の俺にはぴったりだった。

コイツも俺の事、好きでいてくれるんだよね？

結婚したいと思うぐらいに。

俺はお前のこと、心の底から愛してんだ。

この気持ちの全てを伝えたくて、俺は瞳の唇に唇でそつと触れた。

頬とはまた違った柔らかさに、俺の身体はたちまち反応した。
なのに瞳は、相変わらず無垢な瞳のまま。

…愛してるんだ！

俺の中に今だ住んでいる我侭なガキの部分が、飛び出してきた。
そして本能の赴くまま、想いの全てのままに、全てを奪い去るような濃厚なキスで瞳に突撃した。

全く不慣れな様子がさらに俺を煽る。

無防備に開かれた唇の間から自然を舌を差し込むと、心が求めるままに瞳の口内を暴れまわり、蹂躪した。
もちろん、愛をたっぷり込めて。

もっと欲しい。

もっと、もっとだ。

このまま2人一緒に融けてしまいたい。

瞳の小さな身体を硬く抱きしめていた両手で彼女の背中を撫で下ろし、丸みのあるヒップをぎゅっと掴んだ。

もう既に硬くなっている分身を押し付けたい欲望が体中を駆け抜ける。

だめだ、コントロールが効かない。

こんなことは初めてだった。

正直、こうなる予感があったとはいえ、この俺の反応には俺も戸惑った。

とその時、瞳が俺のワイシャツの背中をぎゅっと握り締めた。
ふるふると小刻みに震えている。

もしかして展開が早すぎてついていけないのか？

そう考えた途端、杉田が教えてくれた言葉が蘇った。

『おかしのおなら』

一瞬で気持ちが萎え、正気が戻ってきた。

俺は離したくない気持ちを宥め透かし、しびしび彼女の唇から撤退した。

んだよ！

二つの”お”が守れないのは、お前のせいじゃねーか、杉田っ！！
頭の中に浮かんだ憎ったらしいチェシャ猫のように笑う杉田の幻影
に向かって悪態をついた。

初めての経験だったのだろう、瞳は膝を震わせ、身体中で緊張していた。

そつと抱き寄せてやると俺の胸に頬を摺り寄せ、体中の力を抜いた。

安心してくれているんだ。

彼女からの無条件の信頼がうれしくて、心が躍った。

「…なあ、瞳、結婚しょ？」

自然に口を付いて出てきた言葉だった。

驚いて、大きな目を一杯に見開いた瞳と目が合った。

「俺、やっぱりオマエと居るとすっげえくつろげる。

素のままの俺を見ても本音言っても、自然に受け入れてくれる

お前が生涯必要だって、わかったんだ。

中学校の頃から俺を見捨てず、想っていてくれてたことがうれしかった。

…それが分かった時、もう気持ちがいまなくなったんだよ」

ふわっと改めて彼女の頬が赤く染まった。

「でも、結婚って…富樫君、後悔しないの？」

「ああ、全然。

俺だって人生の中でいろいろなことを学んできたんだ。

だからこそ、お前が必要なんだと確信したんだ。

お前だって俺のこと想ってくれてるって言ってただろ？」

必死になって思いを伝えようとしてるのに、瞳はどんどんイライラ

して、最後には泣きそうな顔になっていた。
なんで？

俺はなぜ彼女がこんな風に反応するのか、全く理解できなかった。

「けど！けど…全然違うじゃない…」

話せば話すほど、彼女は目は戸惑いに揺れ、唇を怒ったように尖らせる。

ほんと、何が悪かったのだろうか？

思いが伝わらなくて地団太踏む子供みたいな彼女を見ているうちに、俺はようやく思い至った。

そうか、俺は大切なことをまだ伝えてなかったんだ。

「だって、結婚するって事はお互いに…」

「ストップ！」

「でも、これは…っ！」

「だから聞けって！」

興奮して話し続けようとする瞳の注意を俺に向けさせた。
大切な気持ちだから、言わされるみたいなんじゃだめだ。
俺が自分の意思で伝えるんだ。

中学生だったあの日。

彼女がありったけの勇気を振り絞ってしてくれた、告白のようだった。

「打算や妥協で結婚するんじゃないんだ。

…俺はお前が好きだ。愛してる。

これからは毎日一緒に夜を過ごし、朝を迎えよう」

くにより、と瞳の顔が歪んだ。

と同時に、彼女の目から新しい涙が滝のように溢れ出した。

想いが通じた。

そう実感したとき、心に温かな風が吹き抜けたようだった。

その事がただただ、うれしかった。

「泣きすぎ」

照れくさくて、恥ずかしくて、愛しくて。

俺は潰さない程度に力を込めて、瞳を抱きしめた。

身体だけじゃなくて彼女の心も過去も未来も現在も全て、この腕に閉じ込めるつもりで。

心臓がバコバコ鳴っている。

どれほど大きな取引が成功しても、これほど興奮することはない。

瞳だから、だから俺はこんなにも翻弄されるんだ。

このまま離したくない。

癖になるな、コイツって。

俺は瞳の頭に、音を立ててキスをした。

すると、キラキラした目をつれしそうに細め、どこまでも澄んだ笑顔を見せてくれた。

「私もね、富樫君のこと、愛してるの！」

あまりにも無邪気な告白に、幸せな気持ちが温かな風になって俺たちの周りを包んでいるようだった。

「知ってる」

中学生に戻ったように意地悪く言ってみても、やっぱり彼女の笑顔は変わらなかった。

あの怒涛のプロポーズから、俺たちはようやく平穏な日常を取り戻せた。

あれほど苦しんでいたのに、今は信じられないぐらいに幸せだ。

仕事をして、家に帰れば瞳が笑顔で出迎えてくれる。

以前の俺なら家に女を入れるなんて、考えられなかった。

ましてや、仕事で疲れきってる状態で女の相手なんて冗談じゃねえ！とすら思っただろう。

なのに俺の領域に瞳がいる事が、自然で一番しっくり来るように思えるんだから不思議だ。

これが俺が求めていた人生なのだ。

今なら大きな声できっぱりと言い切る事が出来る。

…人間、変われば変わるもんだ。

あの告白の後、晩飯のことなど忘れて瞳の手を引っ張って宝飾店に直行した。

瞳と再会してから何気に目をつけていた指輪を婚約指輪として購入

し、テンポについていけず「え？え？え？」しか言えない瞳の左薬指に強引に押し込み、その場で挨拶から結婚式の日取りまで決めた。もちろん、その瞬間に携帯から双方の親に連絡を入れたのは言うまでもない。

ここで逃げられたら困るからな。

結婚のことを話したら、両親、特に母親たちが大喜びだった。

瞳のお母さんとお袋は幼稚園から中学校まで一緒に学校役員をしたりで仲良がよく、当時たまに2人でランチを食べに行ったりしていたそう。

今でも年賀状のやり取りはもちろんのこと、ことあるごとにメールしたり電話したりしているそう。

故に瞳の成長を知っているお袋は「あの可愛い瞳ちゃんだもん！反対する理由なんてないわよ！っていうか、逃がしたら許さないわよ？わかった？」などと半ば脅してくる始末。

それにしても、こんなに近くにパイプがあったとは…何でもっと早くに気付かなかったんだろう？

瞳の家族の方は、2人の兄貴から一発ずつ殴られた以外に特にトラブルもなく、全てが順調に進んでいた。

…このあくの強いシスコン兄弟が後々トラブルメーカーとなることは、この時に予想して然りだったが。

俺も浮かれすぎていて、そんなことにまで気が回らなかった。

あちこちへの挨拶も済ませた後、うれしいことに、瞳が借りているアパートの契約更新が今年2月までだと判明した。

もちろん、結婚がわかっていて更新するなんてもったいないなどとまことしやかに理由を並べ立て、結婚前からオレのマンションで瞳が暮らすことを両家に承諾させた。

そうすれば仕事が忙しくても、毎日瞳の顔を見る事が出来る。

俺はチャンス逃がさない男なのだ、と内心ほくそえんだ。

これで誰にも邪魔はできない。

…けれどこれがかかなり気に入らなかつたらしく、再度瞳の友達から一発ずつ殴られた。

かわいい瞳を嫁入り前に汚すきか？と因縁をつけられて。

この時代、どこのどいつが結婚まで処女を通すものかと言ってみるものの、シスコン兄弟には通じない。

瞳の周りには、拳でコミュニケーションをとる人間が多すぎる。

俺は通っているジム以外にも、以前世話になっていた少林寺の道場で稽古することを真剣に検討し始めた。

一緒に暮らし始めた当初、急展開についていけず、瞳は事あるごとに途方にくれていた。

けれど、冷静さを取り戻していくにつれ、心から幸せそうに微笑むことが多くなった。

時々、何を想像しているのか、ニヤニヤ笑ってることがある。

そう指摘すると、決まって恥ずかしそうに顔を赤らめ、拗ねて頬を膨らませた。

その度に押し倒したい衝動と戦わねばならなかった。

いつもより強く抱きしめることで我慢している俺は、かなり紳士だ
と思う。

「早く3月になればいいな？」

” 離れ離れになった日から新しい関係を始めたい ”

結婚式を中学の卒業式の日にしたのは、たったそれだけの理由だった。

瞳は察してくれたようで、ニコニコ顔で頷いた。

たまらなくなつた俺は瞳の肩を抱き寄せた。

子供みたいにくすぐす笑う彼女の首筋に唇を落とし、耳たぶに優しく
歯を立ててからキスをした。

くすぐつたいと顔を真っ赤にして身を擦る瞳は、態度とは裏腹に甘
いため息を零す。

あゝ…ダメだ、我慢できねー！

唇を強引に合わせ、味わいつくしてやろうと唇に全神経を注いだ。
そして、あわよくば……

…まったく、誰だよっ！

結婚までお預けなんて言つたヤツは!？

壁のようにごつい2人の男と意地悪そうに微笑む女が頭にに浮かんだ。

自分たちはやりたい放題やってるくせに理不尽だと腹を立てつつ、ここまですつと約束を守っている俺。律儀だ。

理由はたくさんある。

これまで瞳を傷つけ、周りに迷惑をかけてきたのにもかかわらず、みんなさりと水に流し、俺を受け入れてくれた。

俺はこれでも、誠意には誠意を返すべきだと常々考えているのだ。それに瞳の純粹さを見ていると、清らかなものを踏みつけるような気分になる。

あまりにも無垢なので手を出しあぐねているというか、なんというか…。

とにかく、めちゃくちゃにしたいと思う気持ちと、守りたいという気持ち俺の中で交錯しているのは事実だ。

…昔の俺を知っているヤツが聞いたら全員「けっ！」などと言って馬鹿にされそうだが。

しかし。

こんなことはある種の自分に対するいい訳でしかなく、彼女を一度もぎ取ってしまえば罪悪感だろうがなんだろうが霧散することには違いないと確信している。

そう、最大の理由が別にあつたりするのだ。

…それは…。

予定通り、いいところで携帯が着メロとともにぶぶぶ…と震えた。液晶画面には、”瞳・兄その1”と書かれている。俺はため息をつきながら、いやいや電話に出た。

「…もしもし」

『お前、瞳に手え出してんじゃねーだろうなあ？』

「…出してませんよ」

『…お前のことだから、こっち方面では信用できねえしな。』

結婚前に瞳になんかしやがったら…分かってんだろうなあ？え？』

「……………」

別に怖いわけではない。

軽いブラコンである瞳への気遣いと言うかなんと言うか…。

一体何をどう吹き込まれたのか、瞳は結婚しなければセックスしてはいけないと頑なに信じている。

そうしなければ、赤ちゃんが出来ないから、と真剣な思いつめた目で言われたら、どうすればいいというのだ？

今では裏で操っているのは兄・その1だと確信している。

兄・その2は傍観者だ。

もちろん、かなり面白がっていることは間違いない。

最初は殊勝な気持ちでいたのだが。

元来、俺は殊勝などという言葉から最も遠い位置にいる男なのだ。そろそろ本性を現してもいい頃だろう。

こんなやせ我慢、あと1日も持ちそうにない。
俺は兄からの電話を切ったあと、決意を固めた。

「瞳！明日結婚するぞ！」

「ふえ？」

「だから、婚姻届出しに行くんだよ！」

「でも…明日は日曜日だよ？」

「最近では、ちゃんと日曜日でも受け取ってくれるんだよ！
とにかく早く文句言えねえ状態にしねーと、俺が悶死する」

「もんし？それって、なに？」

「…お前に触れたくて、悶え苦しむってことだよ」

瞳の頬がバツと真っ赤に染まった。

満足した俺はにんまりと笑った。

全く知識がないってわけでもないわけだ。

「でも…明日、ちょっと用事が…」

「用事？」

申し訳無さそうに上目遣いに告げる瞳は、文句なしに可愛かった。
けれど、暴走寸前の第二の人格の処遇について、かなり差し迫った
状態が続いている。

下の器官から湧き上がってくるイライラとムラムラを押さえ、彼女
を怖がらせないように出来るだけ優しく尋ねた。

「あのね、そろそろ剣道の試験があるから練習しなくちゃいけない
の。」

「ここのところいろいろあつたし、道場の方にあんまり行けなくて…特に型の方をすっかりしてないとだめだし、稽古つけてもらわないと…」

「剣道、やってんだ？」

「うん、小学校ぐらいからやってたんだけどね、今もできるだけ道場に」

「通うようにしてるの」

「へえ…剣道にも試験があるんだな」

「そうなの。段審査は年に二回だから、チャンスはものにしないと」

格闘兄貴達に守られた秘蔵っ子。

この儚げな彼女と武士道は、あまりにもかけ離れて見えたのだが…。

俺はこのことを知って一番はじめに疑問に思ったことについて聞いてみた。

「で、お前、何級受けんの？」

「えとね、今4段で、次は5段」

「……」

放心した俺に気付かない彼女は、型の審査がいかに厳しくて難しいかということを熱心に語った。

その眼の奥にあるものは…確かに何事にも妥協しない、ひたすら上を目指す武道家の闘志。

兄貴2人は柔道と空手の帯もち、親友は情け容赦ない空手家。そして彼女は…

その後すぐ、少林寺道場に入会を申し込んだのは言うまでもない。

で、婚姻届はどうなったかって？

2人とも稽古が終わって汗臭いまま、役所に駆け込んだに決まっているだろ。

そのあと怒りとお祝いの拳を受ける羽目になったけどな。

<完>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8889v/>

マンガみたいな告白と再会の行方

2011年10月6日16時40分発行